



元気そらち！産炭地域活性化戦略

用語解説●炭^や鉱^まの記憶と炭^や鉱^ま遺産

炭^や鉱^まの記憶：空知地域の炭^や鉱^まが栄えた当時の姿・様子（産業・石炭生産の姿、まちなみ・風景、炭^や鉱^まに働く人々の働く姿・暮らし・文化など）を、現在に語り継ぐ、様々な記録や情報

炭^や鉱^ま遺産：炭^や鉱^まの記憶のうちの有形のもの

この戦略が訴えるもの

青春とは 人生のある期間ではなく、

心の持ち方を言う。

薔薇^{ばら}の面差し、紅^{おもぎ}の唇^{くちびる}、しなやかな手足ではなく、
たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。

青春とは 人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは 臆病^{おくびょう}さを退ける勇氣、

安きにつく気持ちを振り捨てて 冒険心を意味する。

ときには、20 歳の青年よりも 60 歳の人に青春がある。

年を重ねただけでは 人は老いない。

理想を失うとき 初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、情熱は失えば心はしぼむ。

苦悩・恐怖・失望により 氣力は地に這い精神は芥^はにある。

60 歳であろうと 16 歳であろうと 人の胸には、
驚異^{きょうい}に魅かれる心、おさな児のような未知への探求心、

人生への興味の歡喜がある。

君にも吾にも 見えざる駆遣^{きせん}が心にある。

人から神から 美・希望・よろこび・勇氣・力の

靈感を受ける限り 君は若い。

靈感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ、

悲嘆の氷にとざされるとき、

20 歳であろうと 人は老いる。

頭^{こうべ}を高く上げ 希望の波をとらえる限り、

80 歳であろうと 人は青春にして已^やむ。

サムエル・ウルマン「青春」(作山宗久訳、角川文庫版)

この戦略は、空知産炭地域が、直面する山積した課題の前に悲嘆の氷にとざされ立ちすくむ状況から脱却して、たくましい意志、ゆたかな想像力、燃える情熱を持った地域へ再生するために、理想に向けた活動によって、安きにつく気持ちを振り捨て自らの力で歩むための道筋を示したものです。

具体的には、地域の足もとにある固有の資産である《炭鉱の記憶》を活用して、地域外の人から美・希望・よろこび・勇氣・力を受けることによって、地域内の人頭を高く上げ希望の波をとらえる心を持ち行動するための条件を整えようというものです。

目 次

はじめに	1
背景●世の中の大きな変化…これまでの常識は通用しない社会、生き方の捉え直しを 思想●未来を描くために…過去をしっかりと見据える 戦略●全国共通（基本3点セット）＋空知固有（炭鉱の記憶）…戦略的な組み合わせ 炭鉱遺産●モノを残すことが目的ではない…手段として活用し、結果として残る 具体化の推進●選択と集中 ➡ ネットワーク化 ➡ 拠点の形成	
1. 政策目標	7
1-1 目標年次	
1-2 目指すべき姿	
2. 戦略の根底にある認識	9
2-1 空知産炭地域の変化	
2-2 これまでの歩みからの反省	
2-3 制約の中からの再スタート	
2-4 この戦略を策定する契機	
2-5 この戦略の意義と性格	
3. 基本的な考え方	15
3-1 基本的な考え方	
3-2 最初に着手すべき一手	
3-3 展開の手がかり ①…自然と炭鉱の歴史が織りなす景観	
3-4 展開の手がかり ②…過去と未来を結ぶ炭鉱遺産	
4. 実現の手段 ① ー選択と集中	23
4-1 「選択と集中」の基本方針	
4-2 先導的な拠点の選定	
5. 実現の手段 ② ーネットワーク化	28
5-1 「ネットワーク化」で目指すもの…質×量の最大化	
5-2 対象層による戦略の違い	
5-3 拠点のネットワーク	
5-4 ネットワーク具体化のため最低限必要な足場	
6. 実現の手段 ③ ー拠点の形成	45
6-1 拠点形成の必要性	
6-2 拠点形成のスタディー（赤平）	
6-3 拠点形成のスタディー（三笠）	
6-4 拠点形成の道具だて	
6-5 具体化の手順	
資 料	66

はじめに

戦略の背景とねらい

ここでは、「元気そらち！産炭地域活性化戦略」が生まれた背景と展開の道筋について、その全体像を端的に示します。

背景●世の中の大きな変化…これまでの常識は通用しない社会、生き方の捉え直しを^{とら}

○国境を超えて様々な動きが連鎖するグローバル化、形のある「モノ」から形のない「コト」が価値を持つ知識社会の到来、少子高齢化と急激な人口減少…いま、世の中は急ピッチで大変革が起きようとしています。

➡ 私たちは、大きな変革の渦中にあることを認識して下さい。

○空知産炭地域では、これまでは国の産炭地域振興に頼ってきたことから、地域外の世界とつながるパイプは、主として行政が担ってきました。しかし、行政の窓から見た外の景色は、激しく変わりつつある世界の、限られた一面を捉えているだけです。これでは、「井の中の蛙、大海を知らず」に陥りかねません。

➡ 「井の中の蛙」にならないよう、これからは様々な局面で様々な人が、外の世界の動きを敏感に察知する必要があります。

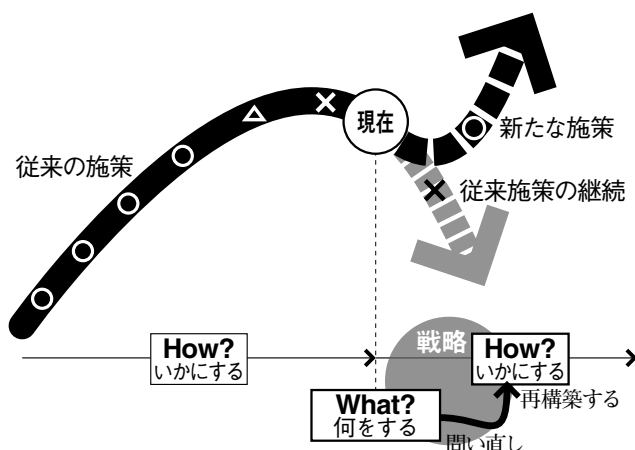
○この大きな変化の前では、対症的な治療は、もはや通用しません。時が過ぎるのを待てば、事態が好転するものでもありません。

➡ そのまま流れに飲み込まれてしまうと、地域の存立は極めて危ういものとなります。しかし、ただ流れに追随すれば良い訳でもありません。

➡ 勇気をもって、大きな流れをしっかりと捉え自らの足場を固め、地域活性化に向けて踏み出すべきです。

○表面的な現象に対して個別に対応していても、この大きな変化を乗り切ることはできません。

➡ 前提条件が変わりつつあり、表面的な方法としての従来の常識は、今や非常識になりつつあります。そこで、根本的な部分から、地域の生き方を捉え直す必要があります。



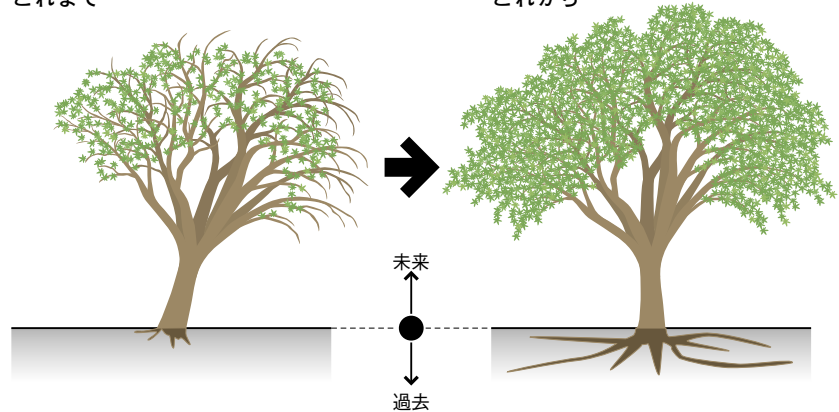
思想●未来を描くために…過去をしっかりと見据える

○空知産炭地域では、多額の公的資金を投入して、これまで多くの取り組みがなされてきました。しかし、今なお厳しい状態が続いているのはなぜでしょうか？

○自分たちの地域の特色を考えず、表面的な流行を追い求めてきたことが、根本の原因の一つであると考えます。

これまで

これから



○今日の地域があるのも、過去からの日々の積み重ねの結果です。過去から眼を背けて未来だけ求めようとしても、地域の個性を主張できない借り物・張りぼてのようなものしかできず、過当競争に巻き込まれて、力の弱い空知産炭地域は翻弄されるだけです。

○空知産炭地域には、かつての日本を支え、北海道を先導してきたという、人に誇るべき歴史があります。わずか 100 年余りの短期間に、自然を開拓し、繁栄を極め、急激に苦境に陥った姿は、それを見る人に深い印象を与えます。短い時間の中に、多くの人のドラマや貴重な教訓が濃密に詰まっています。短期間で駆け抜けてきた空知産炭地域だからこそ、明日の日本の姿を考える手かかりを、わかりやすく訴えることができます。

➡「過去を見ずして、未来はない」。未来を描くためにも、過去をしっかりと振り返るべきです。

○過去をしっかりと見て、それを未来に生かすためには、そのための仕組みづくりが必要です。なぜその場所で、どのようなことがあったのかを理解し、地域の歩んできた営みの意味を振り返ることを通じて、はじめて未来への手かかりを得ることができます。

○しかし、地域内の人にとっては、地域の歴史に気づくことは、余りにも当たり前の日常の光景であるために、難しいことです。そこで、地域外の人々の新鮮な視点によって、自分たちが暮らす地域を見つめ直す「キッカケ」が必要となります。

○そのためには、残っている手かかりは一定の条件の下で保存し、消えてしまったものは映像や文書で見えるようにし、埋もれてしまったものは発掘して再生しなければなりません。

➡歴史をしっかりと見るための仕組みづくりが必要です。それは、地域外の人々の新鮮な視点を「キッカケ」に、地域内の人々が気づき・考え・行動し、未来を創出するための仕組みです。

戦略●全国共通（基本3点セット）＋空知固有（炭^{やま}鉱の記憶）…戦略的な組み合わせ

○空知産炭地域の活性化にあたって、目下の急務は「誇り」の回復です。そのためには、自らが「誇り」を実感できる状況と、「誇り」を持って生活をするための経済的基盤が必要です。

○「誇り」を回復するために最も効果的なのは、人に自慢することです。自慢するには相手が必要となりますが、それには地域外の人が適役です。地域内外の接触・交流によって動きが出てくると、新たな稼ぎのヒントや経済の動きが生まれます。

○ただし、これまで展開してきた従来型の観光とは混同しないで下さい。空知産炭地域では、大量の来訪者を受け入れる能力や、より高いサービス水準を求める今日の観光の流れに追随することに、一定の限界があります。さらに、すでに様々な「モノ」に投資してしまったので、新たな投資余力は限られています。「たくさん人を呼ぶ」「カネを落とさせる」といった従来型の発想ではなく、価値観を共有し支援してくれる応援団を増やすというスタンスが不可欠です。

➡「誇り」の回復によって、経済的にも社会的にも地域が存続するのに足る条件を獲得するためには、次の3ステップが次第に拡大するような、戦略的な取り組みが不可欠です。

- ① 地域に残されたものを手がかりに
- ② 地域外の人と「ゲストとホスト」という関係を越えたつながりをつくり
- ③ 地域外からの眼差しによる刺激によって、地域内で活性化への力が生まれる

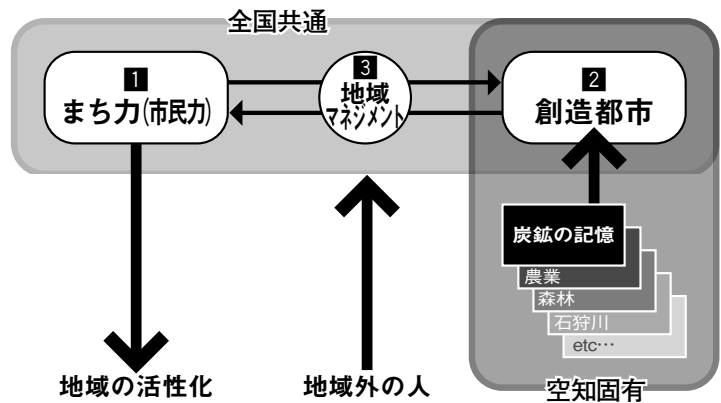
○具体化のための仕組みとして、地域再生の潮流として世界的に注目されている3つのキーワード、**① まち力（市民力）** **② 創造都市** **③ 地域マネジメント**を基本に考えます。

○**① まち力（市民力）**とは、市民が地域課題の解決力を持つことです。かつて、炭鉱社会では強固なコミュニティがありましたが、今日的にこれを再認識し高めるためには、力を発揮する場や契機を新たに設定する必要があります。

○**② 創造都市**とは、様々な活動と価値を生み出すための条件を備えた都市のことです。知的好奇心をくすぐる素材をもとに、眼に見えない知的な価値を生産する人々が集まり、結果よりも途中経過を共有することによって、新たな価値を生み出す力にしようというものです。

○**③ 地域マネジメント**とは、**① まち力**（ローカルな動き）と、**② 創造都市**（グローバルな動き）を仲介し、うまく結びつける働きです。地域内外の要素を適切に組み合わせることで、お互いに持つ力以上の効果を引き出す「1+1=3」となる働きを狙います。

➡世界的なキーワードである3点セット（**まち力・創造都市・地域マネジメント**）によって、地域活性化に向けた仕組みの基本を構成します。



○これら基本3点セットは、全国共通で、どの地域にも当てはまるものです。空知産炭地域の未来を創出する仕組みとしては、地域の独自性を加えなければなりません。

○空知の特徴として、農業・林業・自然…など様々な要素が考えられますが、地域の歴史性、課せられた制約条件、ここしかないという固有性などから、まずその筆頭にくるのは、《炭鉱の記憶》です。

○炭鉱によって開かれ、多くの人が炭鉱とともに生きてきた空知の歴史を考えると、《炭鉱の記憶》はその本流に位置し、地域内の人々のかかわりも最も豊富です。地域再生のための時間が残り少ないという制約条件を考えると、すでに地域内に蓄積されて新たに買ったり作ったりする必要がない《炭鉱の記憶》は、最も頼りになります。地域外の人に対しては、物的な《炭鉱の記憶》である炭鉱遺産は、最も訴求力の高い素材と目印（ランドマーク）になります。

➡ 空知の固有性・独自性を表現するためには、《炭鉱の記憶》が最適であり最も頼りになります。まずこれを柱にすえて活用し、空知独自の地域活性化の仕組みを構想し実践します。

➡ この動きに触発されて、農業・森林・石狩川・地質…など、他のテーマに沿った活動も追隨することが期待され、《炭鉱の記憶》はその先駆的な役割を担います。

○ **1 まち力**と **2 創造都市**とは、「^{ちから}鶏が先か卵が先か」という依存的な関係にあり、どこから着手するかが問題です。空知の置かれている状況から、緊急に着手しなければならないのは、地域外の人が空知に着目し地域内の動きへとつなげる **2 ⇨ 1** の仕組みづくりです。

○具体化のためには、実践的な「場」を、「選択と集中」によって効果的に設定し、これらを効率的に「ネットワーク化」することによって、まずは現状打破の突破口を開く必要があります。

➡ まず着手すべきは、外 ⇨ 内の動きをつくることです。

➡ そのために、実践的な「場」を、「選択と集中」の考え方によって効果的に設定し、「ネットワーク化」によって効率的に結びます。

➡ これによって、新たな現実が生まれ、地域内の人々に認識されることによって、現状打破の突破口となります。

炭鉱遺産●モノを残すことが目的ではない…手段として活用し、結果として残る

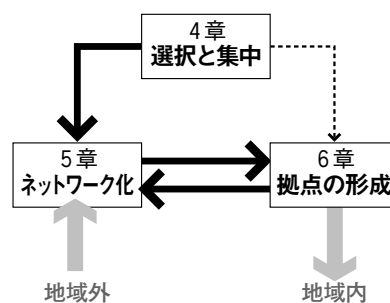
- これまでの地域政策では、「できること」に取り組んできました。しかし、いくら「できること」を重ねても、「やるべきこと」が達成されとは限りません。
- 空知産炭地域で「やるべきこと」は、今後も持続可能な地域として再生することです。そのために、地域固有の資産である《炭鉱の記憶》が最も貢献すると考え、戦略の柱に据えました。
- この戦略では、地域固有の《炭鉱の記憶》が、地域にとって極めて有用な資産であることを示し、地域内外の様々な主体が実践するための、大きな流れを示すことを狙いとしています。
- その際、《炭鉱の記憶》の一部を占める物的な炭鉱遺産は、具体的な「モノ」があることによって、人々へ訴える力は大きく、有力な手段として活用が期待されます。
- しかし、特に注意しなければならないのは、手段が目的に転化してしまうことです。もちろん、この戦略は、ただ単に物的な炭鉱遺産を残すことが目的ではありません。
 - ➡ この戦略の目標は、物的な炭鉱遺産を残すことではありません。
 - ➡ 物的な炭鉱遺産を手段として活用し、これをもとに地域の活性化に向けた動きがおこり、成果を上げることができれば、その結果として炭鉱遺産は残ることになります。



具体化の推進●選択と集中⇒ネットワーク化⇒拠点の形成

- このような基本方針に沿って構想された戦略を推進するために、選択と集中（4章）、ネットワーク化（5章）、拠点の形成（6章）という順で、具体的な手だてを示しました。
- 数多い制約の中で《炭鉱の記憶》を地域活性化に活用するためには、「選択と集中」によって取り組む必要があることから、その先導的拠点となる場所を選定しました。
- 地域外からの支援を得るためには、訴求力のある炭鉱遺産を中心に象徴的な場を「ネットワーク化」し、地域全体の価値を高める必要があることから、そのルートを設定しました。
- ルート上にある先導的拠点は、ネットワークの一つの構成要素として機能するだけでなく、それ自体が明確なメッセージを地域内外に対して発信します。地域外の力を地域内に還元するための変換装置となる「拠点を形成」するために、どのような知見が必要なのかについて、赤平市・三笠市の重要拠点を例にスタディーし、他の拠点の形成に資するツールを提供しました。

⇒「選択と集中」で先導役となる場所を特定し、これらを「ネットワーク化」するルート設定によって地域外からの力を引き入れ、「拠点の形成」によって地域内へと還元します。



1. 政策目標

2018（平成 30）年度の目指すべき姿

ここでは、この戦略の目標年次と、目標年次に達成しているべき望ましい状況について示します。

1-1 目標年次

■目標年次＝ 2018 年度

この戦略が達成すべき目標年次を、2018（平成 30）年度に定めます。

これは、「まちづくりは 10 年作業」と言われているように、地域政策の効果は即座に現れないことから、あまり短期に設定できない反面、空知産炭地域の状況を考えると、あまり長期の設定もできないという、矛盾した二つの要素を勘案した結果です。

■前半 5 年と後半 5 年

前半の 5 年度（2009 ～ 2013 年度）では、この戦略の一部が具体化し、新たな現実を眼にした地域内外の多くの人たちの注目を集め始める状態を目指します。

後半の 5 年度（2014 ～ 2018 年度）には、前半 5 年の取り組みをもとに活性化へ向けた流れが加速し、各所で幅広い動きが複合的に発生し、目標達成に向けた効果が顕著に現れることを目指します。

1-2 目指すべき姿

最終年次の 2018 年度には、次のような状態が達成されていることを目指します。

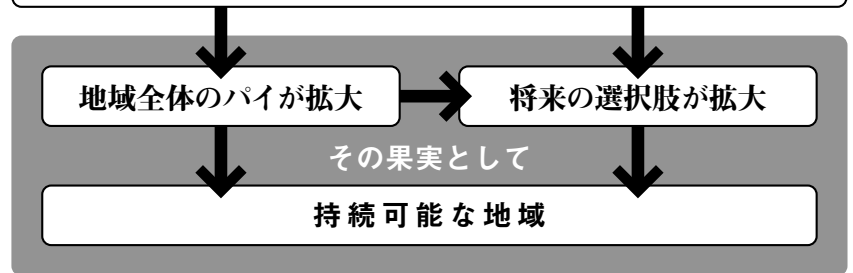
地域内の人	元炭鉱マン	● 自らの労働や人生のドラマを、訪れた人に語っている。 たくましく生きる姿が、気力を失いがちな日本国民に刺激と活力を与えている。 かつての得た知識技能が人から評価され、チョットした収入も得ることができる。
	一般住民	● 炭鉱からまちがスタートしたという、地域の歴史的な文脈を理解し誇りを持っている。 地域のあり方と実現手段（政策）について、常にチェックし考えている。
	高齢者	● 炭鉱遺産の場で社会活動を行い、家にこもらず医者いらずの生き方をしている。
	児童・学生	● 地域の歴史や現在の取り組みを、授業の中でしっかり学び理解している。
	企業	● 人の動き（数・質）から獲得した知識・人脈により、ビジネスチャンスを得ている。
	自治体	● 最大の地域資源として認識し、専門部署の職員が保全活用にあたっている。

相乗効果

地域外の人	北海道民	● 本道発展のルーツとして、一生に一度は必ず空知産炭地域を訪れる。
	一般の人	● 炭鉱に興味がなく訪れた人も、現地で触発されて関心を示す。
	芸術家	● 多くのアーティストが移住・滞在し、場の記憶を生かしたトリエンナーレが開催。
	研究者	● 地域活性化のプロセスが研究対象となり、多様な専門家が課題解決に関わっている。
	道国	● 本道の固有性や将来の課題を、最も端的に示す地域として継続支援している。
	海外産炭地	● 同じ課題と炭鉱という共通言語を持つ地域が、ネットワークし励ましあっている。

その結果として、次のような成果がもたらされ、地域全体のパイの拡大や、将来に向けての選択肢が拡大し、持続可能な地域づくりに貢献します。

- 忘れられずにいて、地域外のいろいろな人が応援してくれる。
- 日本の将来を占う（世界的にみても…）、注目エリアとなる。
- 有為な人の来訪割合が高くなり、人脈・知識など獲得チャンスがUpする。
- 外から刺激を受けて活性化された地域となる。
- 人の動きがおきて、チョットした経済的収益がもたらされる。
- 世の中の動きに眼が開かれる（地域内のコップの中の争いは小事になる）。
- 社会から注目され必要とされる実感を得て、住民は心身ともに健康を維持。



2. 戦略の根底にある認識

現状・課題・前提

ここでは、認識の共有を図るために、この戦略を策定するにあたって踏まえておくべき、現状・課題・前提を整理します。

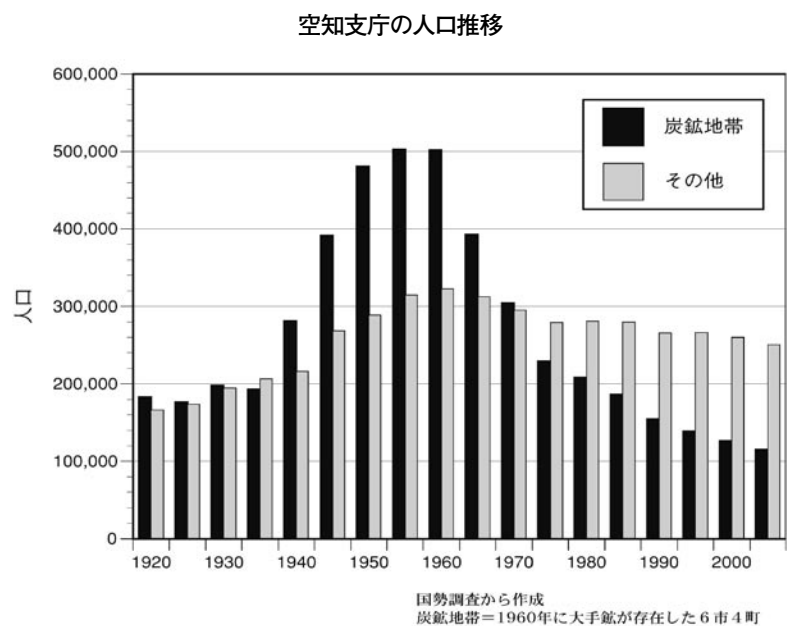
2-1 空知産炭地域の変化

■時代に翻弄される空知産炭地域

1960年代頃のエネルギー革命によって、それまで北海道開拓や日本経済の成長に大きく貢献してきた空知の石炭は、突如一転して、その地位を急激に失いました。

このような環境激変の波は、石炭産業を基幹産業とする空知産炭地域を大きく飲み込みました。その凄まじさは、炭鉱地帯の人口に見てとれます。

1960年から2005年までのわずか45年で、人口は50万人から10万人にまで減少し、人口水準は明治末期の段階にまで戻ってしまいました。



この間、空知産炭地域では地域の存立を守ろうと、国の石炭政策による支援を得ながら、様々な施策が展開されてきました。

当時の事情としては、ガラガラと音をたてて地域が崩れかねない中で、緊急事態として無我夢中で取り組んできたのが実情でした。その結果、何とか10万人が残ったと見る向きもあります。

しかし一方では、数十年にわたって国・自治体を合計すると莫大な公費が投入されながら、10万人しか残らなかったことに対する別な評価も、現実には存在しています。

■国の政策の変化

かつて、国土政策の旗印は「国土の均衡ある発展」でした。わが国全体に余裕があった成長期には、アウトカム（投入に対する産出の成果）は重視されませんでした。

それが、国全体が凝縮社会へと転換する中で、資源配分の再構築は不可欠となっています。その流れから、「地域の独自性」「地域の自己責任」が大前提となりつつあり、アウトカムが厳しく吟味される時代になりました。

その中では、「もともと炭鉱地帯は、炭鉱ができたからまちが成立したのであって、成立基盤であった炭鉱がなくなったのだから、もうまちは不要ではないか」という極端な議論すら、聞こえてきます。

ここで国全体の潮流についての是非を、論じ嘆いても事態は一向に打開しません。

「第二の閉山」とでも言える、迫りつつある空知産炭地域の存立を脅かす変化に対して、明確な対抗軸を打ち出して、今日的な危難から地域を守る現実的な戦略と行動が、今こそ強く求められています。

2-2 これまでの歩みからの反省

■これまでの常識を見直す

以上で述べたように、これまでの懸命な取り組みが否定されたり、かつての常識が通用しない状態になりつつあるという現実があります。

ここで今一度、空知産炭地域が常識として持ち続けてきた前提や常識を、改めて見直さなければ、事態は打開できません。

■「炭鉱は暗い」のか？

例えば、空知産炭地域の常識の最たるものとして、「炭鉱は暗いので、その暗いイメージを払拭しなければならない」という合い言葉がありました。

しかし、炭鉱どころか石炭すら見たことがない年齢層は、すでに全世代層の半数を占めるようになっています。

そればかりか、これまで約10年にわたって続けられてきた《炭鉱の記憶》を活用した市民活動では、若い世代やアーティストらが、炭鉱の廃墟に「美しい」「力強い」「心を打つ」といった好意的な評価を下し興味を示す事例が、多々見かけられてきました。

■炭鉱遺産は保存するのが目的なのか？

「炭鉱遺産は、後生大事に保存しなければいけない」という常識の前では、取り組みをためらうかもしれません。

しかし、必ずしも全ての炭鉱遺産を未来永劫お金をかけて保存する必要はないという前提に立つと、取り組みの姿勢や方法も変わってくるはずです。恒久的な保存を前提として足踏みするよりも、逆

に保存を前提としないで現実に取り組んだ方が、結果として将来に向けて保存できる炭鉱遺産の数は多くなるかもしれません。

その他にも、例えば次のような意見が多く述べられてきましたが、これらも全て捉え直す必要があります。

- ・元炭鉱マンの多くは行政依存意識が強い
- ・炭鉱に代わる企業を誘致しなければならない
- ・「モノ」を作れば解決するはずだ
- ・市民活動は特殊な人たちの活動だ
- ・炭鉱遺産はゴミ以外の何ものでもなく価値は全くない
- ・古い「モノ」は汚く恥ずかしい、新しい「モノ」が良い
- ・過去をサッパリ捨てて新しい人生をやり直す
- ・観光とは一人でも多くの人を呼び込まなければならない
- ・確実に予測できることしか取り組まないし、取り組めない
- ・高齢化が諸悪の根源である …

■「井の中の蛙」からの脱却を

空知産炭地域では、ある意味で主張（常識）を変えず一貫して取り組んできました。

しかし、このことが、世の中の大きな変化を感じるができずに、逆に仇になってしまったとも言えます。

常識を見直すチャンスを逸した要因は、地域内を立て直すことに精一杯で、地域外からの刺激を、行政ルート（国⇔道⇔自治体）に依存してきたことが、最大の原因の一つと言えます。

すでに時代は変わりつつあります。操業中の工場を延々1時間以上も撮影した映像DVDが爆発的に売れるような多様な価値観の時代。「モノ」による満足よりも「コト」が重視される時代。時間・空間を飛び越えてインターネットで結ばれる時代…。

このような時代の大きな変わり目は、これまでの常識を見直し、新たな視点から地域の活性化を進めるチャンスでもあります。

■多様なルートで外とのつながりを

もう一つ、これまでの反省から指摘しておかなければならないことがあります。それは、時代の流れとの、地域の認識にズレを生じさせてきた大きな原因の一つとして、自らの取り組みを検証し修正するための仕組みが欠落していたことにあります。

これまでは、行政だけが国に窓を開いて、地域外とつながっている状態でした。これからは、地域の様々な人たちが、地域外に向けて眼を開き、多様なルートでつながりを持っていることが不可欠です。

2-3 制約の中からの再スタート

■数多い制約条件

地域住民の最低限度の生活水準（シビルミニマム）を維持することに窮々とし、死ぬまでこの状況を続けるのは耐えられないことです。

明日への希望を示し、地域を未来に対してつないで行かなければなりません。

さらに、その希望に向けた取り組みは、地域維持のための経費を減らし、かつ地域の価値を表現することによって多少なりとも稼ぎにつながるような、「一粒で二度おいしい」という難しさが求められます。しかし、残された時間は余りにも少ないことも事実です。

地域の歴史的文脈を顧みずに、単に外から移植しただけでは、思うような成果を生まないということも、これまでの反省から得た教訓の一つです。現実には、すでに軍資金は使い切ってしまい、新たな投資をする余力は極めて限られています。

■炭鉱の記憶…地域最大の未活用資源

このような、数多くの制約条件を踏まえた時に、すぐに活用でき、かつ効果を望める資源は、極めて限られています。

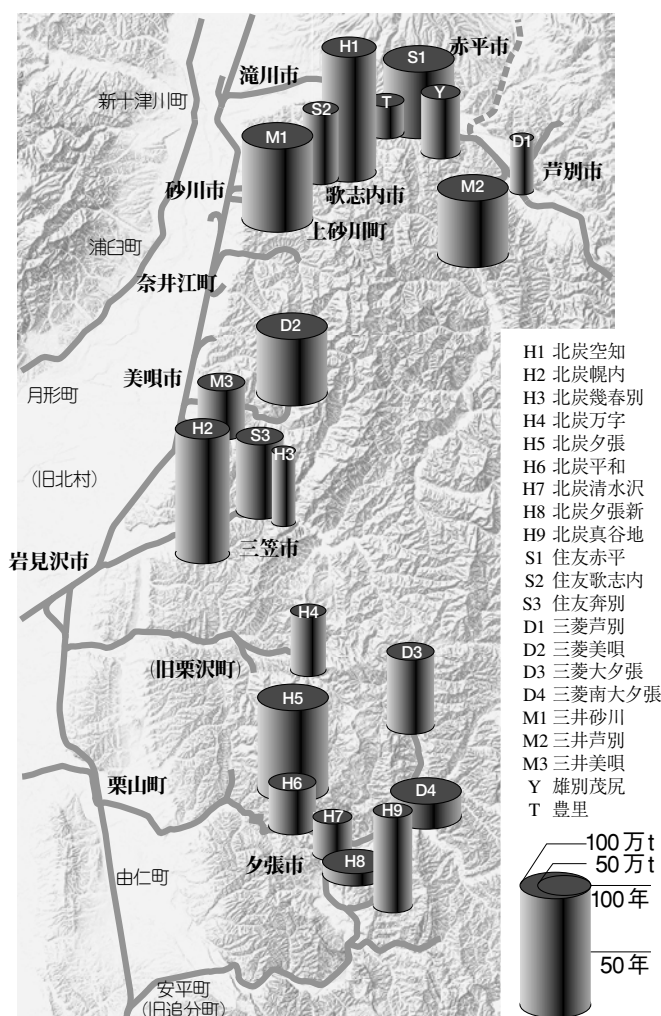
空知地域全体で見ると、活用すべき地域資源は、様々な選択肢があると思います。しかし、空知産炭地域という範囲で捉えた場合には、広域でともに事に当たることができる素材として、『炭鉱の記憶』は最有力候補となります。

《炭鉱の記憶》の代表である物的な炭鉱遺産は、地域に蓄積されているのに、十分に活用されてきませんでした。炭鉱遺産は、これまでの歴史の歩みを証するもので、多くの人の記憶を宿しています。日本でも最大の炭鉱地帯であった空知産炭地域の《炭鉱の記憶》は、国を超えて世界と結ぶことができる固有の地域資源です。

さらに、すでに地域内に存在するため、活用によって容易に価値を顕在化することができ、仮に失敗したとしても地域に与えるダメージは軽微です。

《炭鉱の記憶》を、「正の遺産」と見るか「負の遺産」と見るかは、どちらでも構いません。しかし、「炭鉱ができたからまちが成立した」という空知産炭地域の生成経緯を考えると、《炭鉱の記憶》から目を背けることは、地域が今日ある意義を自ら否定してしまうことに他なりません。

とにかく、この地域を活性化するためには、地域特有の資源としてきた《炭鉱の記憶》が有力であり、特に地域外の人から見て明確に視認できる炭鉱遺産を手がかりに、地域再生のストーリーを書くことが、最も迅速確実な方法と言えます。



空知産炭地域の炭鉱分布
平均年出炭量と操業期間
(累計出炭量5百万トン以上の炭鉱)

2-4 この戦略を策定する契機

■ 2005 年の「炭鉱遺産サミット」

2005（平成 17）年 11 月、夕張で「炭鉱遺産サミット」が開催され、空知産炭地域の首長 8 人が集まって、炭鉱遺産を手がかりにした地域活性化について話し合われました。

そこでは、「選択と集中」「ネットワーク」「ともに事にあたる」という基本的な合意がなされました。

その後、なかなか具体的な取り組みの機会を得ることができませんでしたが、2007 年度から空知支庁の独自事業の取り組みによって、はじめて公式に地域政策として検討されることになりました。



2005 年に開催された炭鉱遺産サミット

■ 市民団体による先行的な取り組み

1998 年度の空知支庁による独自事業を契機に、空知産炭地域で、市民による《炭鉱の記憶》を活用した市民活動が活発化しはじめました。

ここ 10 年来にわたって市民による先行的な活動は、一種のテストマーケティングとも言えるもので、地域外に対する訴求力にもそれなりの手ごたえが得られています。

また、そこから得られた知見の蓄積は、この戦略を立案する上で、参考となるものです。

2-5 この戦略の意義と性格

■ともに事にあたるための指針

このような厳しい制約条件の中で、地域活性化のモデルを再構築するには、当然、行政や多様な主体が、各自治体単位で頑張る必要がありますが、それだけでは十分ではありません。また、計画もなく対症療法的な施策を積み重ねていては、成果を生むことは困難です。

そこで、地域全体での戦略的な取り組みが不可欠です。大まかな戦略や道筋を立て、地域全体が意識を集中し、厳しい中でもできるだけ未来へ投資することによって、はじめて下向きの潮目を変えることができます。

完全な合意（＝コンセンサス）はどだい無理であることを冷徹な前提として、少なくとも「ともに事にあたる」という姿勢の一致（＝アコモデーション）と、やるべきことの範囲（＝ドメイン）の明確化が不可欠です。

この戦略は、これら制約条件と達成すべき要件の狭間にある、狭いストライクゾーンをくぐり抜け、地域活性化を具体化するための進むべき方向を示した指針であり、具体的展開を示唆した教科書でもあるのです。

■戦略の実践が意味するもの

空知産炭地域全体で、このような活性化モデル（仕組みやストーリー）を構築し実行できれば、それは国や他の自治体の手本となり、真の意味での尊敬と支援を得ることができるでしょう。

このことが、炭鉱なき後も空知産炭地域が存在することの価値・意義を疑う主張に対する、唯一の対抗軸となると確信しています。

3. 基本的な考え方

まち力（市民力）・創造都市・地域マネジメント

ここでは、《炭鉱の記憶》を手がかりにした地域活性化を図る上で、その基本となる考え方を示します。

そのキーワードとなるのは、まち力（市民力）、創造都市、地域マネジメントの3つです。具体化の突破口は、地域外の力を使って地域内を刺激し活性化することにあります。

3-1 基本的な考え方

■基本的な3つの要素

空知産炭地域の活性化戦略の基本的な構造は、次の3つの要素から構成します。

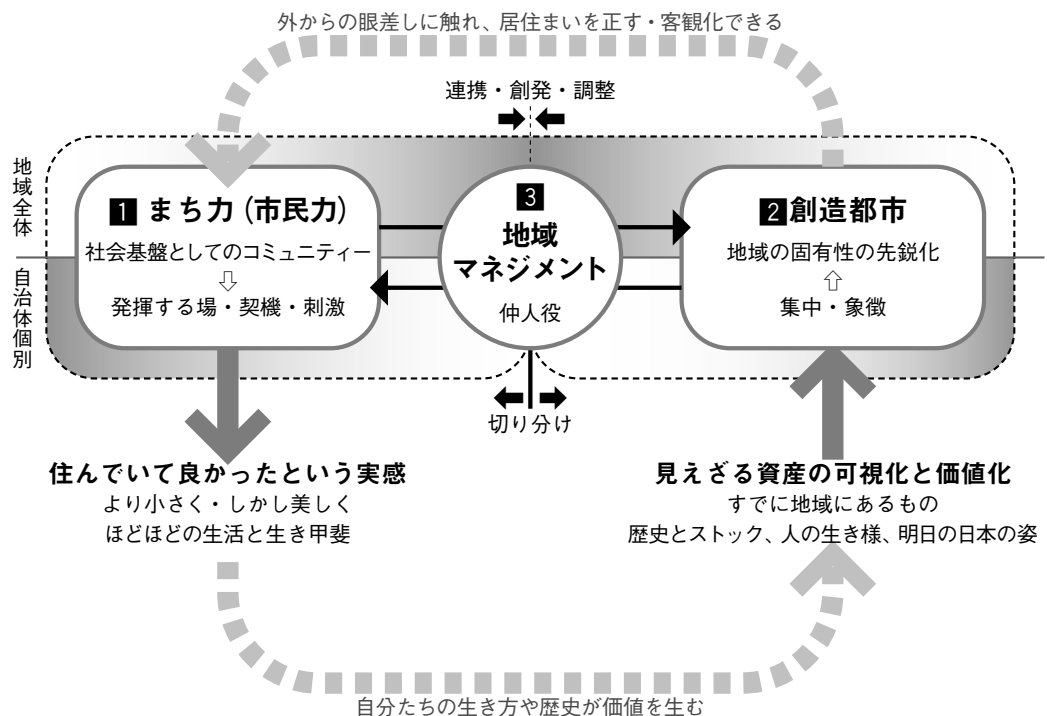
1 まち力（市民力）
ちから

2 創造都市

3 地域マネジメント

この3つのキーワードをテコにして、地域内外の循環を生み出すことを基本方針として構想しました。

このような循環構造を生み出すためには、小さな項目から始めるにしても、各自治体単位の個別な取り組みでは限界があります（特に地域外に対して訴求力がない）。そこで、広域で取り組む必要があります。



1 ^{ちから}まち力（市民力）

1 まち力（市民力）は、自治の基本である市民が、自分たち自身でまちをどうしていくのかという解決力をいかに高めるかとうことです。

従来の社会基盤は、道路などハードを中心とした公共投資に視点が向けられてきました。しかし今後は、この**1 まち力**が、重要な社会基盤の一つとなると考えられています。

かつての炭鉱には、強固なコミュニティが存在していましたが、今は弱まりつつあります。これを今日的に高めるためには、**1 まち力**を発揮するための、場や契機・刺激が必要となります。

この**1 まち力**は、簡単に生成されるものではありません。地域内での自発的な向上を期待するには厳しい現状にあります。そこで、初期段階としては、地域外の力というエンジンによって、そもそもあった**1 まち力**の遺伝子を呼び覚まし活性化することが必要となります。

2 創造都市

地域外から着目してもらうためのキーワードが、**2 創造都市**です。

2 創造都市とは、大きな社会の変化の中で、世界的に注目されている地域のあり方についての理念です。これまで都市は、芸術・文化・学問・思想・ライフスタイル・価値観など、形のない知識資源を生み出す中心的な役割を果たしてきました。その途中経過（プロセス）からは、都市の活力が生み出され発展してきました。**2 創造都市**とは、このような「創造」の機能を発揮する条件を備えた都市のことを言います。

政策的な観点からは、知的好奇心をくすぐる素材をもとに、眼に見えない知的な価値を生産する人が集まり、結果よりも途中経過を共有することによって、新たな価値を生み出す力にしようというものです。

「すごいことをやっている」「楽しそうだ」…というような、結果ではなく途中経過を価値として共有してもらい、地域の支えになる人を見つけていくことが重要となります。

2 創造都市の具体化にあたっては、自分たちのまちの特色が何かをはっきりさせることが第一の要件です。そのためには、地域資源の集中性・象徴性が必要となります。炭鉱遺産は、そのための目印となり得る最大の資源です。

3 地域マネジメント

地域外と地域内の動きが個別に取り組まれていては、せっかくの活動が個別・散発で終わってしまいます。そこで、外と内を上手く結ぶための、**3 地域マネジメント**が必要となります。

ここでは、地域（ローカル）と世界（グローバル）の二つの視点を併せて持っていなければなりません。

戦略の具体化にあたって基本となるのは、あくまで自治体単位の個別の取り組み（ローカル）です。しかし、それだけでは十分な成

果を得ることは難しいことから、一方で自分たちのまちは、地域全体の中で何を強調すべきかも念頭におく必要があります。

一方、地域外に向かって発信するには、世界的な視点（グローバル）を持たない限り、力を発揮することはできません。しかし、そもそも外に対する魅力の源泉は、地域内での取り組み（ローカル）に宿っています。

このように、地域（ローカル）と世界（グローバル）という相反する視点を、時々上手く使い分けて、地域全体の成功を、自らのまちに取り込む必要があります。各まちの動きを調整・連携し、地域外の動きとお見合い（マッチング）させることによって、個々の持つパワーの総和を上回る効果（創発効果）が、はじめて実現します。

そのために、結びつけたり通訳するための機能が必要となります。

■外⇒内：外の視点が内に役立つ

「見えざる資産の可視化と価値化」とは、北海道開発を背負ってきた炭鉱を中心とした歴史とストック、そこで働いた人たちの生き様、今日の地域の苦境は日本の将来を真っ先に体験しているという先進性…などの見えない地域資産を、炭鉱遺産を手がかりにして、地域外の人に着目してもらうための入口として活用することです。

これまでの空知産炭地域で最も欠けていたのは、外からの視点です。自分の住む地域と、地域外での動きを比較できる体制によって、自らの地域がおかれている状況、他の地域からみて恵まれている点や、頑張らなければならない点などを、初めて客観視することができます。

それが、「外からの眼差しに触れ、居住まいを正す・客観化できる」ということで、**1 まち力**を促進・強化する大きな刺激として作用します。

■内⇒外：内の生き様がないと外の人注目しない

目指すべきは、地域内の人々が「住んでいて良かったという実感」を持ち、そのための条件が整った地域になることです。

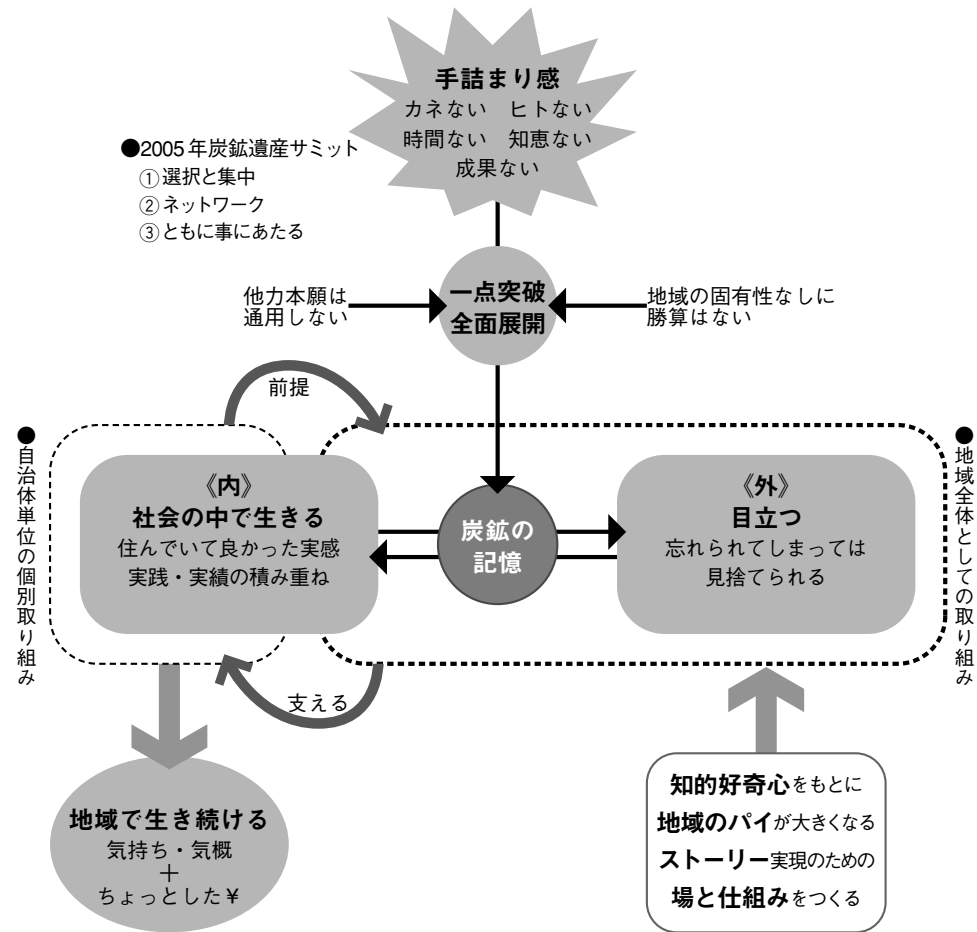
しかし、空知産炭地域では、そういった状況を作る現実的な基盤条件は弱体化しています。

そこで、「より小さく、しかし美しく」や「ほどほどの生活」という縮小均衡策を取りながら、「自分たちの生き方や歴史が価値を生む」というような別の価値観によって「生き甲斐」を実感し発揮できる局面を作らなければなりません。

「住んでいて良かったという実感」を持つことが出来れば、それ自体が他に真似できない資源となります。

ハードは、経済的に豊かなところが新しいものをつくれれば追い抜かれます。しかし、空知産炭地域では、人々の生き様や認識・価値観といったソフトである「見えざる資産」は、他では真似することのできない訴求力を持つことになります。

3-2 最初に着手すべき一手



■基本は「地域内」の取り組み

地域活性化に向けて、自治体単位の個別の取り組みが基本となります。しかし、具体的な動きを生み出すために必要な、**1 まち力（市民力）**が整っていないことから、まずは地域外からの刺激や支援（**2 創造都市**）をテコに、地域内に力を蓄積することが必要です。

そこで大事なことは、自分たちは「社会の中で生きている」ということを実感する環境づくりです。炭鉱がなくなった産炭地域において、あえてこの地域に住み続ける意味を、今日的に実感することが必要です。

その大前提となるのは、「地域で生き続ける気持ち・気概」です。しかし、それだけでは不十分で、「ちょっとした経済効果」も欠くことができません。

実践や実績を積み重ねて、「社会の中で生きる」ことを実感することで、自分たちで頑張ってみようという気持ちになり、経済的にもプラスになるような仕組みの構築を目指します。

■「地域外」からの刺激を受ける

地域外と関係を持つことは、このような内発的な取り組みを具体化するための呼び水となります。

現在の空知産炭地域は、多くの地域外の人にとって、石炭産業という過去の産業の場であり、石炭対策が終了してすでに対策が済んだ過去の地域として捉えられています。過去をしっかりと見つめるこ

とは大切なのですが、それを未来の姿と結びつけ表現することができないと、忘れ去られてしまいます。

そこで、過去から現在・未来へと続く意味を考え、「自分たちはここで、未来に対して価値のあることを行なっている」「未来の地域を創造するために、これからも取り組み続けるのだ」というメッセージを実践に込めて、地域外にアピールしなければ助力を得ることはできません。

■地域全体で取り組む

これまで、自治体単位で個別・散発的に展開してきましたが、個々のパワーには限界があります。地域外に対して、自治体単位の個別の取り組みでは訴求力が弱く、まず空知産炭地域を一つのまとまりとして認識してもらう必要があります。

そのためには、地域全体で取り組むことが不可欠です。地域全体の地位向上が、ひいては個々の自治体の地位向上につながります。特に戦略の初期段階では、地域外からの刺激を地域内に伝えることからスタートするため、空知産炭地域が外から注目を浴び、「忘れられていない」地域となる必要があります。

■地域外の関心と呼ぶ「知的好奇心」

地域外の人々が空知産炭地域に関心を持つ動機として、「知的好奇心」が有力なキーワードとなります。これは、10年にわたり市民による《炭鉱の記憶》を生かしたの活動を展開してわかったことです。

地域外の人に「知的好奇心」を持ってもらう方法は、単に歴史的事実を知らしめるだけではありません。地域内の人との対話や共同作業、地域外の人々が思索するための場の設えなど、様々な方法があります。

■地域のパイを大きくする

「知的好奇心」をきっかけに訪れる人が、空知産炭地域を巡ることによって、地域の「パイ」が大きくなることを目指します。

この場合の「パイ」には、次章以降で詳しく述べるように、量と質という二つの捉え方があります。

単に観光客が増えて「量的」な経済効果がもたらされるということだけを期待するではありません。「知的好奇心」に刺激され来訪した知的好奇心を持つ人・有為な知識技能を持つ人との関係によって、地域の経済・社会が「質的」に向上するようなことも期待されます。

■これらを実践するための「場」と「仕組み」(ストーリー)の設定

「パイ」が大きくなるストーリーを書き実践することで、地域外の人に注目されることにつながります。

ここでは特に、その実践するための「場」と「仕組み」(ストーリー)を、空知産炭地の中にいかに効果・効率的に埋め込むかが重要となります。

3-3 展開の手がかり ①…自然と炭鉱の歴史が織りなす景観

■地形と歴史に深く刻まれた景観

空知産炭地域は、標高の低い山々がつらなり、谷沿いに炭鉱都市と農地、石狩平野では水田を主体とした農地が広がっています。これら、多様な要素を一つに束ねて共有できるような象徴的なシンボルがなく、景観的に見て特別に印象深いインパクトがある訳ではありません。

しかし、石炭を地中に蔵する地質的な特性を踏まえて評価すると、

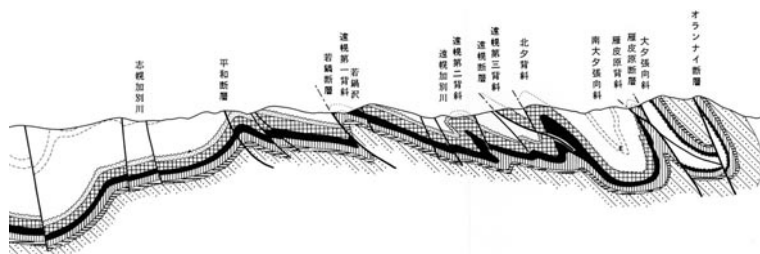
○断層・褶曲地形と、それに沿って地形が侵食されてできた谷間の景観…
屈曲した河川、幾重にも重なる山なみ、谷沿いに広がる段丘地形

○他の地域にはみられない固有の歴史と、それを物語る炭鉱遺産…炭鉱を起源としてまちができ、短期間に栄枯盛衰を描いた濃密な歴史

という、地形と歴史が相互に関連して深く刻まれた、この地域の景観的な特徴が浮かび上がってきます。



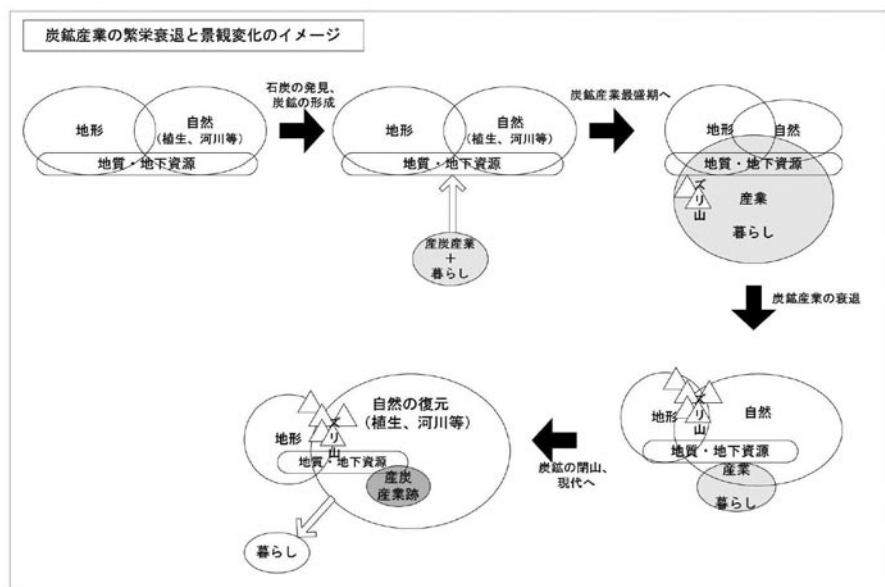
■地質と炭鉱技術が織りなす「まちなみ」Geo-Tech City



空知産炭地域では、河川が侵食した谷間に顔を出していた露頭で石炭が発見されました。ここから、石炭生産のための鉱業施設が展開され、その周囲に炭鉱住宅街や市街地を形成し、石炭を搬出するための鉄道が建設されました。

開拓当初は、地質と地形を読み解きながら、その時代の最先端の技術を導入して、炭鉱とまちの形成がデザインされていたことが大きな特徴です。

その後、炭鉱技術の近代化に伴って、地形の制約は次第に克服されますが、やはり基本は地形を読み解いて、炭鉱住宅をはじめとする「まちなみ」が形成されインフラ整備が進められてきました。それが、今日のまちの骨格を形成しているのです。



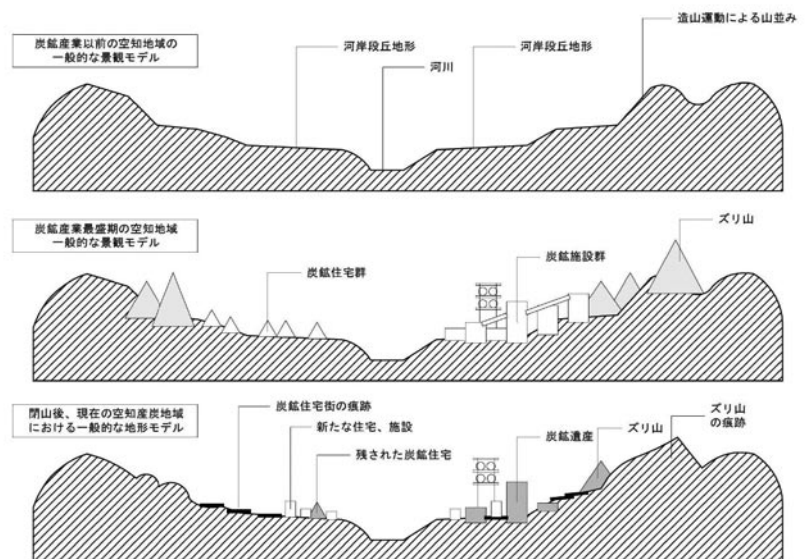
○物語性に富む風景

この地域は、比較的なだらかな山並みを背後に、河川や沢の軸に沿って農地や市街地がひろがり、炭鉱時代の面影を所々に残しています。また、カラマツに代表される二次林が山麓に広がり、軒先の畑など暮らしの息づかいと相まって、のどかな風情があり、懐かしい里山的風景を形成しています。

谷間では、気温差を利用した果樹（リンゴやメロン）、谷が平野に広がるあたりでは河川によって運ばれた肥沃な土壌を活かした畑作（玉ねぎや野菜）、平坦な平野では水田を主体とした農地が広がり、地形や気象条件を読み取った農業が展開されてきました。

石炭産業の衰退に伴い、「まちなみ」を更新するエネルギーが失われてしまいました。しかしこのことは、昭和の時代を思い起こさせる建物や、立坑・選炭機など各種炭鉱施設、ズリ山、炭鉱住宅や共同浴場、鉄道・駅舎の跡、発電所・変電所・送電線、寺社、祈念碑など、炭鉱時代の面影を色濃く残すことになりました。

人によって受け止め方は異なりますが、この地域には、今日のデジタル時代に失われたアナログ的時代のもつ、自然に立ち向かった痕跡としての施設群、鉱山労働者の手仕事がつまみと味わいがあります。その一方で、ふる里的な懐かしさなどが相まって、宮崎駿監督のアニメーション作品を思わせる、物語的資源に富む風景が感じられます。



3-4 展開の手がかり ②…過去と未来を結ぶ炭鉱遺産

■「過去の遺産」だけではない多面的な価値

これまで炭鉱遺産は、過去のものとして捉えられてきました。すでに炭鉱がなくなった後も残る巨大なゴミだと思っている地域もあります。

しかし、これまでの取り組みによって得られたことは、地域外の人はその価値について様々な示唆を与えているということです。

〈過去〉の姿を残すというだけでなく、〈現在〉の視点を加えた活用や、〈未来〉に向けた示唆など、炭鉱遺産の持つ価値は多様です。

その価値は、次の3つの視点によって整理することができます。



1 〈過去〉の価値を評価して残す



従来から主張されてきた価値感で、かつて日本や北海道の役に立ったのだから大事にしようという訴え方です。

これは基本的な価値表現の方法ですが、将来にわたっての訴求力には限界があります。

【鉱業的スケール】決して作り直すことができないもの

【産業と生活の証】そこにあった営みを手繰る入口

【はかなさの美意識】次第に失われ変容する様への思い

【身近な遺産】自分の祖父母や父母らとの関わりを意識（遺跡や法隆寺など歴史遺産にはない）

【古くて新しいもの】回帰や懐古（例：昭和30年代の評価）

2 〈現在〉の視点を加えて〈未来〉に活かす



現時点を基準にした考え方で、知的好奇心を刺激するために、炭鉱遺産に今日的な新しい価値を付加するものです。

アートなどは一つの例であり、従来の観光とは異なるスペシャル＝インタレスト＝ツーリズム（SIT）といわれる特別な関心を持った人を対象にした交流が発展する可能性があります。

【芸術のための空間】美術、音楽、写真、文学などの表現空間（場の持つ磁力、大きな空間、歴史の実感）

【際だたせる】文化と自然の対比（産業的自然）、ライトアップやランドマーク

【経過を見せる】環境教育の場（産業的自然）

【知的好奇心を刺激する】巨大システムとしての炭鉱を理解するプロセス

3 〈未来〉にとって必要な価値を掘り起こして伝える



未来に必要なものを過去の蓄積から掘り起こすために、現在時点で何をすべきかという価値表現です。

都市部市民や若年者層には、一緒に何かを行なうことや、ともに助け合うというコミュニティが薄れてきています。これは、未来において必要な機能であり、地域に過去に蓄積されたものに光を当て発掘することに意義があります。

【共同作業】コミュニティー、助け合い、協力の実践的伝承、知恵や経験の実践的伝承

【対話や思索の場】世代間や地域間の出会いと交流、場の持つ磁力に触発された思索



4. 実現の手段 ① 一選択と集中

炭鉱遺産を価値化・可視化する先導的拠点の設定

眠れる地域最大の資源である炭鉱遺産を、地域活性化のために活用するためには、限られた制約の中で、最大限その価値を増大させる戦略的な取り組みが必要です。

地域外に対し訴求力があり、かつ地域内では象徴や場となるための拠点を地域内で整備し、これらをネットワーク化することによって、地域全体の炭鉱遺産の価値を高めます。

この場合、限られた地域経営資源（ヒト・モノ・カネ・時間）の現状を考慮して、場所を選択し地域資源を集中投入して取り組む必要があります。

4-1 「選択と集中」の基本方針

炭鉱遺産の価値を高め、地域内外の人々が認知し、地域での取り組みを示すために、次の3つの視点に沿って戦略的な政策を具体化する必要があります。

■コンテンツ（各拠点）を充実する

まず、地域の歴史を端的に表す拠点を設定し、各拠点のコンテンツがしっかりとした価値を持つ必要があります。

ここでは、次のような働きが求められます。

○基本的な考え方である **1 まち力**と **2 創造都市**の双方が、同時に実現できる器としての「場」の設定

○「場」に意味を与える機能や運営の展開

各拠点での取り組みが具体化するにつれて、地域外の人々の視線にさらされることによって、地域内の人々は自身を客観化することができ「住んでいて良かったという実感」がもたらされます。その結果として、地域外の人には「見えざる資産の可視化と価値化」という訴求力がもたらされ、地域内外の相互循環が発生します。

■センター機能の所在を明確にする

地域外から訪れる人を受け止め、適切な拠点に導くためには、ワンストップ型のセンター施設（インフォメーションセンター）が必要です。

ここは、人の単なる情報提供の拠点ではなく、各地で行なわれる様々な取り組みなどの情報の共有化や、様々な人を結びつけ、新たな力を生み出すための **3 地域マネジメント**も担います。

■センター～各拠点間を結ぶ

拠点⇄センター間を結ぶ、ソフトとハードの仕組みの充実が必要です。例えば、誘導サインの統一とシステム化や、センターから各拠点を巡るための情報や交通手段の提供などが挙げられます。

4-2 先導的な拠点の選定

■先導的拠点

空知産炭地域の厳しい状況を考えると、これまでのような各自治体で均等に任務を分け合う総花的な政策では、成果を得ることはできません。固定化された沈滞状況を打開するために、「選択と集中」の方針を持って取り組み、まず突破口を開く必要があります。

先導的な拠点は、地域外に対して訴求力を持ち、地域内では象徴や場となり、効果的で効率的なストーリーを描くことができる場です。

しかし、先導的拠点を選択することは、採択されなかった場を将来にわたって切り捨てることを意味するものではありません。選択された場は、現段階で想定される、効果や熟度などから判断した優先度の高さによるものです。

次の3点を「選択と集中」のための基準として、先導的な拠点を選定します。

① **ランドマーク**：地域アイデンティティーの象徴

② **炭鉱遺産の価値**：資源の賦存・集積状況

③ **展開の可能性**：立地位置、取り組みの先導性

3つの観点から、検討の対象となる14のエリアを選定しました。

他のエリアについても、各地域で自発的に取り組むことを宣言し実行する場合には、その優先度は高くなり、先導的なグループに組み入れる可能性を担保したものと理解して下さい。

評価項目 拠点	ランドマーク		炭鉱遺産の価値					展開の可能性					評価 ポイント
	立坑	ズリ山	生産施設	鉄道	炭住・市街地	歴史的建造物	文化教育施設	芸術	産業的自然	観光行動	札幌アクセス	市民活動	
A1 岩見沢				②		①		○		△	①		44
A2 赤平	①	①	○		○	○	○	△	○			●	44
A3 美唄(盤の沢)	○			○	△	○	②	①		②	②	●	55
A4 幌内		○	②	①	○	○	○	○	①	△	③	●	59
A5 唐松・弥生・幾春別	②③③	△	①		○	○	○	△	③	△	③		54
A6 夕張上流部		③	△	○		①	①		△	①			54
A7 清水沢・南部		②	③	③	①	○			②	△		●	51
B1 南美唄			△		②	③					③		21
B2 美流渡・万字		③		△	③			②	○	③	③		33
C1 歌志内上流部	○	○	△		△	○	③					●	16
C2 芦別(国道452号北)		△	△	○	○	○	③		○	○			17
C3 上砂川	○	○		△	△		△	○		△			10
D1 栗山						○				③	○		9
D2 滝川						○		③			○	●	12

評価ポイント：①=15 ②=10 ③=5 ○=2 △=1 市民活動=3

■展開の整序化

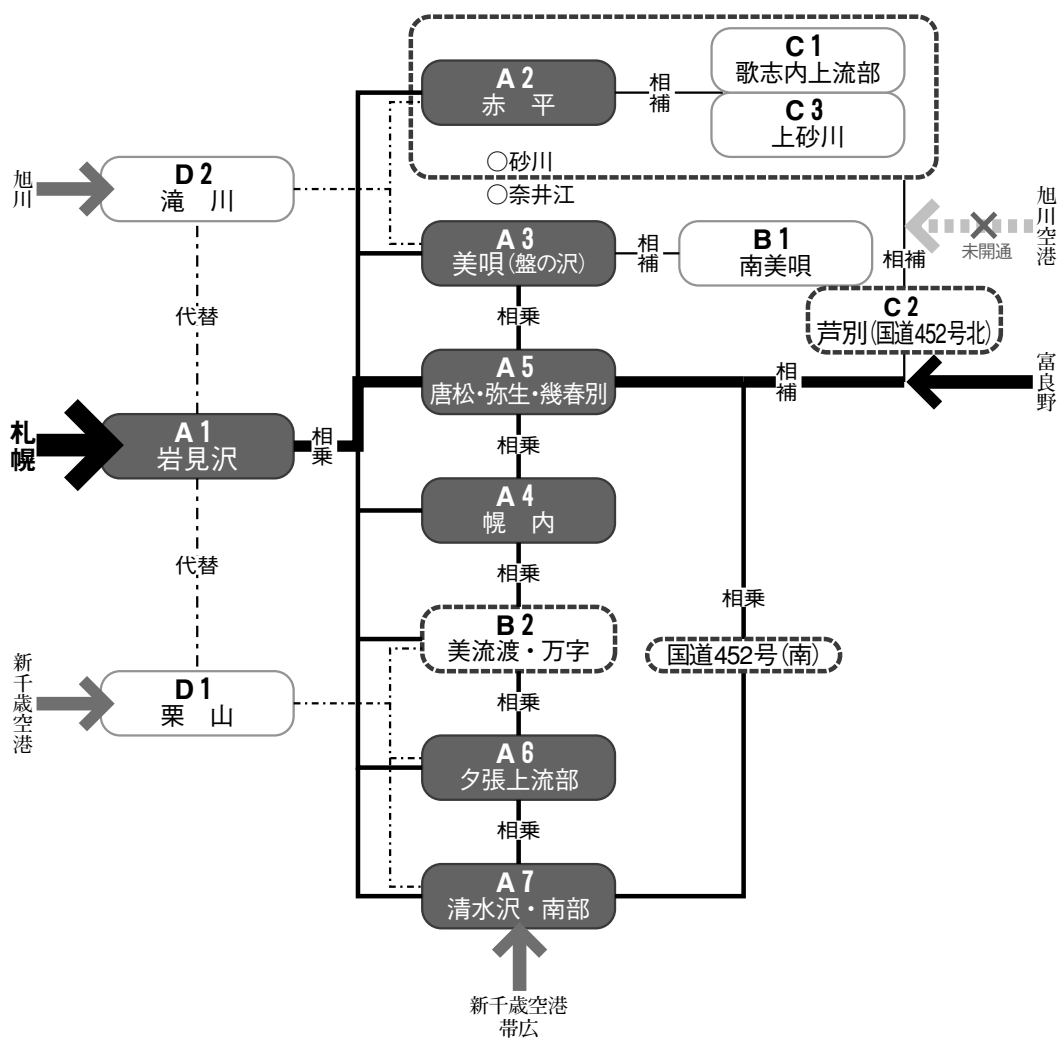
これらは、一様な重みの横並びではなく、どこをクローズアップすると空知産炭地域全体で《炭鉱の記憶》として表現できるかについて、空間的な連続性を検討し展開の整序化を図る必要があります。

そこで、各エリア相互を、相乗・相補・代替という関係で整序化します。

- 相乗**：コーヒーとクッキーのような関係で、それぞれ自体はおいしいが、セットになるとよりおいしくなるような例。
- 相補**：コーヒーとクリープのような関係で、クリープだけ食べることはしないが、クリープはコーヒーと一緒にすることによってコーヒーがよりおいしくなる効果をもたらす。
- 代替**：コーヒーと紅茶のような関係で、コーヒーか紅茶かいずれかを選択できる関係。

また、優先度や実現可能性の観点からも、各々のエリアを整序化します。

- A**：空知産炭地域を表現するのに欠かせない拠点
Bと**C**：Aと相補関係にある拠点、優先度は**B**＞**C**
D：Aのセンター機能を代替する拠点



■センター拠点：岩見沢（十栗山・滝川）

地域外に対して開いているセンター機能を備えたワンストップ拠点の立地に相応しい場所は、**A1 岩見沢**です。札幌圏や空知各地との優れたアクセス性は、炭鉱地帯の集散地として成立した歴史的経緯によるものです。この特性を生かすには、岩見沢市内でのセンター拠点の立地位置を選定する際に、できるだけ交通利便性の良い場所（さらに炭鉱の記憶を感じることができる場所）であることが望まれます。

岩見沢のセンター機能を代替するサブセンター的な地位にあるのが、**D1 栗山**（代表施設＝以下★印：小林酒造）と **D2 滝川**（★太郎吉蔵）です。この2つのサブセンターは、地域内外からのアクセス性の良さに加えて、すでに具体的な拠点となる場が整備されていることから即応性の面でも評価されます。

また、**芦別**（★スターライトプラザ芦別）は、地域の北東部のゲートに位置し、**D1 栗山・D2 滝川**と同様のサブセンターとしての潜在的な可能性を強く有しています。今後の環境変化（特に国道452号不通区間の解消による交通拠点性の向上）や取り組み動向によっては、地域全体への貢献度が高まり、サブセンターとして機能することが期待されます。

■重要拠点：赤平・美唄・三笠・夕張

A1 岩見沢に対して相乗効果があるのは、次の7つのエリアです。

A2 赤平…★住友赤平鉱立坑、★北炭赤間鉱ズリ山階段

A3 美唄…★三菱美唄鉱立坑、★アルテピアッツァ美唄

A4 幌内…★幌内炭鉱景観公園、★三笠鉄道村

A5 唐松・弥生・幾春別…★立坑群（北炭幌内鉱立坑、住友奔別鉱立坑、北炭幾春別鉱錦立坑）、★幾春別～西桂沢間の野外博物館

A6 夕張上流部…★石炭博物館、★旧北炭鹿の谷倶楽部、鹿ノ谷駅周辺の鉄道遺構

A7 清水沢・南部…★清水沢地区炭住群、★北炭夕張電力所・清水沢ダム、シュエパロ川沿いの炭鉱遺構

B2 美流渡・万字…★北炭万字鉱ズリ山、旧万字線沿線の炭鉱遺構

これら **A2～A6**は、**A1 岩見沢**に対して相互に代替関係にあります。そのうち **A3～A7**の相互は、それぞれ相乗関係にもあります。

B2 美流渡・万字は、単独ではBに位置づけられていますが、立地位置の優位性から **A2～A7**と同列に置かれます。

■その他の拠点：芦別・歌志内・上砂川

C1 歌志内上流部と **C3 上砂川**は、個別単独では弱いものの、**A2 赤平**との相補関係にあることから、一体的な取り組みによって価値発揮が期待されます。

C2 芦別（国道 452 号北部）は、基本的には **A5 唐松・弥生・幾春別**や **A7 清水沢・南部**との相補として位置づけられます。ただし、国道 452 号を巡る動向（未開通となっている芦別～美瑛間の整備進展、国道 452 号自体の魅力向上など）、芦別市での取り組み度合いや周辺の動き（三笠 IC ～富良野間の動線変化など）によっては、劇的に具体化の環境が改善し、単独展開や **B** への再位置づけも十分考えられます。そのため、関連する拠点との不断の連携強化が不可欠であると言えます。

A5 唐松・弥生・幾春別と **A7 清水沢・南部**は、景観や地質での要素の類似点が多く、**国道 452 号（南）**を介して新たな相乗関係の構築が構想できます。特に、この地域の景観的特性を体現するジオパーク的な展開の可能性が十分考えられます。

5. 実現の手段②ーネットワーク化

地域外の力を地域内に引き入れるための「ネットワーク化」

ここでは、前の4章で設定した先導的拠点を手がかりにして、地域外の力をこの地域に引き入れ、まち力（市民力）を高めるための仕組みを示します。

有為な地域外の人、地域内の動きに関心を持ち、地域活性化の応援を得るには、個々の自治体単位の取り組みではなく、空知産炭地域全体の価値を高め打ち出す「ネットワーク化」が不可欠です。

5-1 「ネットワーク化」で目指すもの…質×量の最大化

■「地域外の人」の捉え方…V量とQ質

□再び…「創造都市」の考え方を確認

この戦略で最初に取り組むのは、「創造都市」というキーワードの下で実践を重ね、そのプロセスを内外に発信し、多くの人に認知してもらうことです。

「創造都市」とは、様々な活動や価値を「創造」する条件を備えた地域のことです（⇒はじめに「戦略」、3-1「基本的な考え方」参照）。この戦略では、基本的な思想として、「未来を描くために…過去をしっかりと見据える」ことを掲げています（⇒はじめに「思想」参照）。

このメッセージは、最も厳しい状況の中で懸命に地域活性化に取り組む空知産炭地域から発したものであり、全国各地で地域活性化に取り組む人々に対して、新たな価値観を提示するという意義を持っています。

その意義を具体的に表現するためには、「未来を描くために…過去をしっかりと見据える」というメッセージが、地域外の人に眼に見える形で実践されていなければなりません。その際、この地域で最も有望な手がかりが《炭鉱の記憶》です。地域に残された未利用で固有性の高い資源であり、その歴史的経緯や石炭産業自体が持っていた総合性から、多くの人の知的好奇心を刺激できます。まず、「創造都市」というキーワードに反応する地域外の有為な人たちという「外の力」を利用し、それを「内の力」として変換し蓄積することを目指します。

「外の力」には、たくさん人が来るという量（^{ボリューム}＝Volume）の面と、影響力や能力のある人が来るという質（^{クオリティー}＝Quality）の面があります。

これまで、各地の観光政策で目指してきたのは、たくさんの人を呼び込むというV量の確保でした。しかし、「創造都市」を具体化するには、見えない価値を的確に捉えることができる人や、影響力のある人といった、Q質に注目することが重要です。

		V 量の確保	Q 質の向上
項目の性格	対 象	不特定多数 ・市 場＝大 ・来訪率＝小 ・忠実性＝小	特定少数 ・市 場＝小 ・来訪率＝大 ・忠実性＝大
	移動行動	常識的だけど腰が重い ・移動制約＝大 ・線や面での移動 ➡ 面的なラケット型 ・空知のあたりに行く	活発だけど気まぐれ ・移動制約＝小 ・点の移動 ➡ 点的なピンポン型 ・炭鉱や鉄道などテーマを追求
	行動契機	受動的 ➡ 他の情報刺激を受けて行動	能動的 ➡ 自の意志で刺激を求め行動
	行動規範	余暇・娯楽（観光） ➡ でも従来の観光客とはひと味違う人	学習・収集 地域マイラー（＝マイレージ蓄積）
	基 本	基本的要素の具備 ・一般的な人への訴求力 ・明快でわかりやすい表現	テーマに沿ったストーリー ・コアな人への訴求力 ・微細な差異の主張
具体化の要件	取組主体	各自治体単位＞空知広域	各自治体単位＜空知広域
	炭鉱の記憶	定食料理の独特の味付け	灯台

■量×質の最大化

地域外の人（＝《炭鉱の記憶》に触発された知的好奇心を持つ人）の力を得て創造都市を実現するためには、**Q質**の向上を図ることが基本となりますが、ある程度の**V量**の確保も必要です。

従来、各自治体で展開されてきた観光政策は、**V量**の拡大だけを目指してきました。しかし、特徴的な観光資源の乏しい空知産炭地域では、他地域と太刀打ちできませんでした。

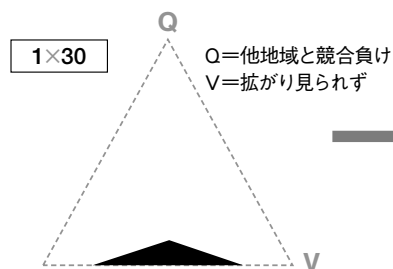
一方、炭鉱遺産を手がかりに展開してきた市民活動は、**Q質**を追求してきましたが、対象層が固定化され拡がりは見られませんでした。

V量を増やすためには、他地域との競合に対抗できる特徴である**Q質**が不可欠です。

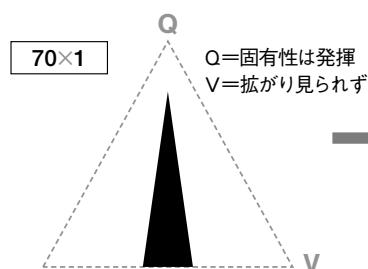
例えば…三笠から富良野に向かう観光客が、他の観光地と違う**Q質**（地域固有性）に気づいてもらえれば、**V量**は増加します。

Q質が低い確保できていなかった**V量** [$Q1 \times V30$] を、**Q質**の視点の導入によって引き上げ [$Q10 \times V70$] ようとするものです。

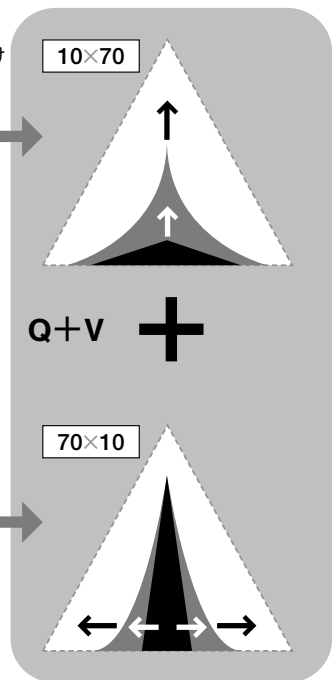
V従来目指してきた観光政策
(不特定多数)



Q従来の市民活動
(特定少数)



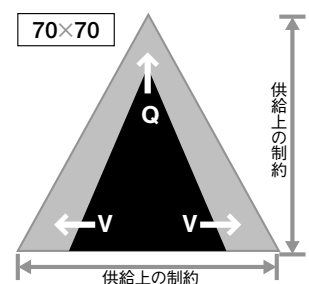
今回の取り組み



Q×V目指すべき構図
(特定多数)

Q質×V量

Q・Vともに制約がある
Q＝炭鉱遺産の減失
V＝対応能力の限界



また、**Q質**を維持向上し続けるためには、ある程度の基礎的な人数**V量**が不可欠です。

例えば…炭鉱遺産に愛好者の裾野が広い（**V量**）アートの要素を加えると、炭鉱遺産のマニア的な層だけではなく幅広い人の関心と呼ぶとともに、新たな**Q質**（地域固有性の表現）を追求する取り組みを維持できます。

Q質は高いが狭い対象層しか確保できていなかった〔**Q** 70 × **V** 1〕状態から、一般化することによって、**V量**の幅を拡げ〔**Q** 70 × **V** 10〕ようとするものです。

今回の戦略は、地域固有性が高く知的好奇心の素材となる炭鉱遺産を通じて、**Q質**と**V量**の双方の関係を適切にマネジメントすることによって、**Q質**と**V量**の総和（**Q質**×**V量**）である地域のパイを大きくしようとするものです。

ただし、**Q質**と**V量**ともに、供給上の制約があることを認識しておく必要があります。

Q質：炭鉱遺産の滅失が激しく残存資源に限りがある

V量：人口が少なく高齢化しており受入能力には限界がある

そのため、地域外の人との関係性は、できるだけ有為な人（影響力の強い人、知識・技能・人脈などを持った人）を意識すべきです。

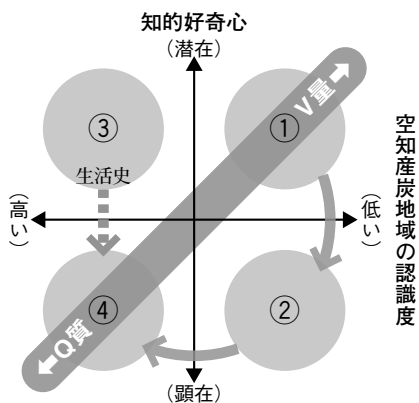
5-2 対象層による戦略の違い

■対象層の区分…Q質とV量の組み合わせ

Q質×**V量**の組み合わせによって、とるべき戦略は当然のことながら異なります。ここでは、**Q質**×**V量** = 100 の場合を例に、その組み合わせの違いによる対応戦略を説明します。

	合計=100の Q質×V量 組み合わせ	対 応 層 別 の 戦 略				■ Q 質の確保 (炭鉱遺産) ● V 量の確保 (観光)
		Input	必要な変換装置	Output	比喩	
④	Q 1 × V 100	あり得ない (従来の自治体内で完結する観光政策の限界)				
①	Q 5 × V 20		一見Vに合わせるが その裏でQがチラチラ		サブリミナル (刷り込み)	①②の実現には ③④の取り組み が不可欠
②	Q 20 × V 5		象徴的Qの打ち出し 最低限のVも必要		本末転倒 転調	
③	Q 100 × V 1		Qの新たな意味付与 Vも少しは必要		目から鱗	
④			Qの取り揃え Vは不要		××道	

□詳説：①～④ 組み合わせのポジショニング
想定した対象層①～④は、下図のような違いがあります。



①と②は、ともに空知産炭地域に対する認識度が低く、来訪は観光的な動機によります。

②は、知的好奇心の素地が①よりも高いため、④へ容易に移行する可能性を持った潜在層として捉えることができます。

①は、V量があり①→②→④と進む可能性はありますが、即効性と歩留まりに一定の限界があります。

③と④は、すでに来訪動機を持っている層ですが、現在のところ人数は限られています。

④は、戦略の本来の意図を最も体現した層で、Q質の面で空知産炭地域に最も刺激を与える存在です。

③は、自らが空知産炭地域との何らかのかかわりを持っている層であり、自身の生活史の明確化・再確認を通じて、④への移行や、④との連携が期待できます。

① Q 1 × V 100

Q質がないのにV量を達成できるはずがなく、極めて実現が難しい組み合わせです。

○従来、各地でこのパターンを想定して観光政策を展開していました。

① Q 5 × V 20

一般的な観光客を想定したものです。

際だった既存拠点による吸引力や、イメージ先行のストーリー性の打ち出しによって、まずはとにかく空知産炭地域に来訪してもらい、その経路上の随所で《炭鉱の記憶》との関連性を暗示させます。

そのうち、知的好奇心の一端を持つ人の心の深層に、《炭鉱の記憶》が刷り込まれることを狙いとしています。

際だった拠点とは、固有性・知名度・先鋭性・流行性などを有した場（例えば…山崎ワイナリー、アルテピアッツァ美唄、砂川スイートロード、ソメスサドル・いたがき）で、この地域ではそう多くありません。そのため、史実に基づいたストーリーの意識的な打ち出し（例えば…ライマン・榎本武揚・国木田独歩など）、ネーミングの工夫やイメージ形成も必要です。

典型的なプロフィール●札幌在住の31歳主婦Aさん、子どもなし、短大卒、マンション居住、週2日派遣バイトで小遣い稼ぎ、LOHAS^{（健康で環境に配慮した持続可能な生活）}大好き、「poroco」「スロウ」は毎号購読している、ブログを開設している

② Q 20 × V 5

本来的に知的好奇心の旺盛な人が、一般的な観光のつもりで来訪する場合を想定したものです。空知地域は炭鉱とともに生成し、石炭炭鉱業が歴史的に果たしてきた役割についても基礎的な知識として理解していることが想定されます。

そのため、象徴的な炭鉱遺産や、センスの良い場・「コト」・「モノ」など、印象的な場を配することで、本来は観光目的で来たのが次第に《炭鉱の記憶》への関心が主となるよう、本末転倒を促すことを狙いとしています。

典型的なプロフィール●札幌在住の45歳会社員Bさん、大学卒、海外の文化世界遺産を幾つか訪問した経験がある、NHK「知るを楽しむ」はテキストを購読し視聴している

③ Q 100 × V 1

かつてこの地域に住み、炭鉱に縁のあった人を想定しています。

故郷の衰退に心を痛めていますが、支援の「キッカケ」もなく、炭鉱がなくなったのだから仕方がないと諦め、せめて自分が生活していた手がかりだけでも保存してほしいと願っている人です。比較的高齢の方が多いと思われます。

地域活性化に向け炭鉱遺産の場が生まれ変わる実践を実見することによって、過去だけではなく、未来に続く取り組みが行われている

ることを実感し、「眼から鱗が落ちた」印象を抱いてもらうことを狙いとします。

典型的なプロフィール●炭鉱で掘進員だった江別の73歳無職Cさん、鉱員養成校卒、最近電子メールが使えるようになって連絡を取り合っている仲間とは故郷の衰退に心を痛めている、年に1度は墓参りで来訪

④ Q 100 × V 1

③と同じ「Q 100 × V 1」ですが、何らかの「キッカケ」で炭鉱遺産に強い関心を抱いた人を想定しています。

自身と空知産炭地域との関係は必ずしも高くなく、年齢層も多様です。興味関心の対象も、炭鉱だけに限らず、鉄道・写真・芸術・廃墟・自然・歴史など、多岐にわたります。

従来の市民活動では、この層が主要顧客でしたが、数の広がりは見られず限界がありました。しかし、活動への積極的な関与や、情報の収集・発信の熱意など、Q質を高めることに最も貢献する不可欠な対象層ですので、継続して来訪を導きます。

典型的なプロフィール●埼玉県在住の28歳公務員Dさん、大学院修士課程卒、全国行脚した中で空知が気に入り来訪歴十数回、「鉄道ピクトリアル」を毎号購読しNHK「熱中時代」を見て大いに共感する、フリー百科事典ウィキペディア（Wikipedia）の幾つかの項目を執筆している

■従来型マーケティングとの違い

これまで、このような対応戦略を構想する場合には、居住地・年齢・性別・年収・学歴などある基準によって市場を切り分けて（＝セグメント）、最も顧客対象を多く含む層に狙いをつけ（＝ターゲット）、刺激を与えて需要を喚起するという手順が一般的でした。

しかし、ここ10年の取り組みでわかったことは、このような伝統的なマーケティング手法による、一般的な切り口では、炭鉱遺産に関心を示す潜在層を捉えきれないということです。

「ターゲットはどこにあるのか？」と問われれば、唯一適切な答えは「炭鉱遺産に反応する価値観を持った人」ということになります。このような人は、居住地・年齢・性別・年収・学歴という従来の切り口の中では、塊として一様にいるのではなく散在しています。

そのため、「どのような人が来てくれるのか」という発地・誘致型の発想ではなく、「こういうものがあるから来て下さい」という着地・募集型の取り組みが基本となります。

もっとも、地域外の人を対象としているため、物理的な移動が必ず発生することから、主に念頭におくべき地域的な対象は札幌圏であることは確かです。

また、少数の入口から多数の来訪者を獲得しやすいという点では、教育分野も効率が良い切り口です。炭鉱の持つ多面性を捉えるためには、一定の知識や理解力が不可欠であることから、大学のような高等教育機関が有望です。

5-3 拠点のネットワーク

■テーマに沿ったトレイル（ルート）

前節で述べた対象層①②は、《炭鉱の記憶》を目的とした来訪は期待できず、通常の観光活動に近い動機によって来訪した際に、《炭鉱の記憶》に気づいてもらうことになります。

空知産炭地域への来訪動機となる地域資源には、注目度の高いものと弱いものがあります。広域的に考え、強いものが弱いものをフォローし、お互いに補完しあえる仕組みをつくる必要があります。

表面的には、通常の観光ルートとして打ち出すことができ、実際に空知産炭地域へ来訪した際には、《炭鉱の記憶》とのつながりを意識できような構造となります。また、広域的なストーリーを構築することで、各々自治体での役割や可能性が明確となつて、公共事業の連携が可能となります。

このような観点と、地域内にある資源の状況とを照らし合わせて、5つのルートを構想しました。

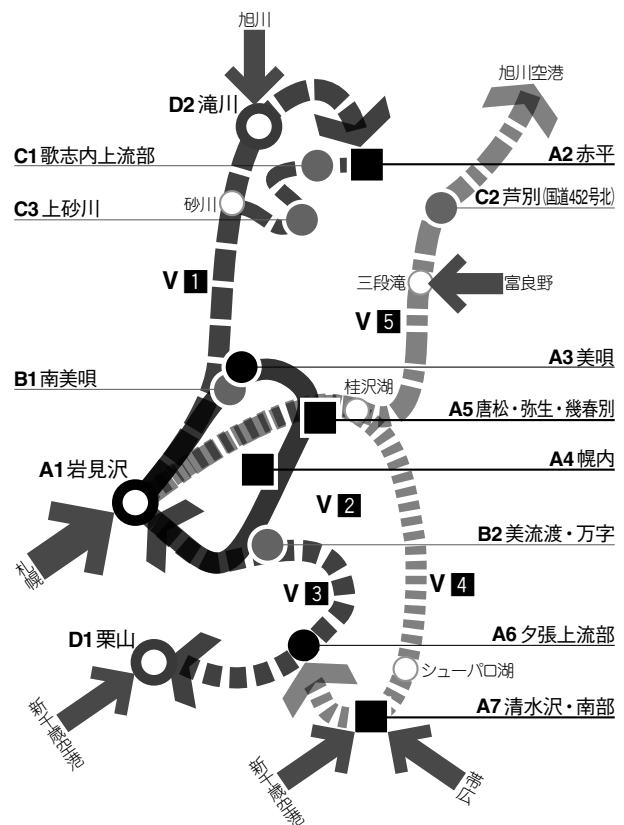
□ここで構想したトレイル（ルート）は、単なる観光ルートではありません

トレイル（ルート）は、ただ観光客が来てくれれば良いのだという発想で構想されたものではありません。

これまで、随所で説明してきたように、この戦略の基本精神は、「未来を描くために…過去をしっかりと見据える」ことにあります。

テーマに沿ったトレイル（ルート）は、このメッセージを地域外の人に眼に見える形で示すための手段です。

地域外の人々の知的好奇心を刺激する素材をトレイル（ルート）として編集し、地域外の有為な人々による「外の力」を、空知産炭地域の各所に設定した拠点で「内の力」として変換し蓄積することを目指しています。



V 1：歴史 [岩見沢～美唄～滝川・上砂川・歌志内～赤平]

地域外との最大の接点である岩見沢（センター）から、国道12号・道央高速道路に沿って北に展開するルートです。目立っているアルティピアッツァ美唄、砂川・滝川周辺の観光対象（スイートロード、こどもの国、ソメスサドル、ジンギスカンなど）を軸にして、その間に《炭鉱の記憶》を組み合わせます。

動線が長く途中のポイントの間隔が開いていることから、何らかのテーマ性の設定による補助が必要となります。そのテーマとしては、この一帯を往来した歴史的人物（例：ライマン、榎本武揚、国

木田独歩)にちなんだものが有力です。また、赤平はルートのアncer的な位置にあることから、特に拠点形成のための努力が必要となります。

V 2：アート [岩見沢を中心に美唄・三笠・美流渡万字]

このルートは、様々な要素がバランス良く豊富に揃っていることが特徴です。面的にもコンパクトにまとまっており、札幌圏からの距離は短く公共交通の路線・頻度も密にあり、成立条件に恵まれたルートです。

そこで、独創的なテーマを設定し、地域資源に新たな価値を加える取り組みを展開します。具体的には、潜在的な価値（安田侃・川俣正・伊佐治コウなど芸術家の存在や上美流渡でのアーティストの集積、北海道教育大学岩見沢キャンパスの芸術課程、アルテピアッツァ美唄・幌内炭鉱景観公園などアートに適した空間）を生かして、アートをテーマに設定します。

V 3：産業的自然 [岩見沢～美流渡万字～夕張～栗山]

温泉・果樹など都市型のレクリエーション施設、夕張の既存観光施設、万字峠の景観など、見どころが充実しています。また、札幌からは距離的にも近く往復の経路の多様性が確保できることから、最も観光的な色彩が強く、即効性のあるルートです。

ルートは、特徴的な渓谷と峠のロケーションに沿い、その中にズリ山・炭住・送電線鉄塔などの炭鉱遺産が随所に残っています。自然と人工物のせめぎ合いを目の当たりにすることができ、途中での適切な機会の設定によって、『炭鉱の記憶』への誘導が期待できます。

V 4：ジオパーク [岩見沢～唐松弥生幾春別～清水沢南部～夕張上流部]

空知産炭地域の南部を、西側から包み込み大回りするルートで、湖・ダム、炭鉱、地質、森林という多様なテーマを設定できます。

桂沢湖～シューパロ湖間は冗長であることから、何らかの価値創出が必要であり両端部での展開が鍵を握ります。そこでは、特に地質を切り口として、広い範囲を対象とし開発の姿まで見ることができる特徴的なジオパーク（（＝地球活動の遺産を主な見所とする自然の中の公園））とテーマ設定が有望です。

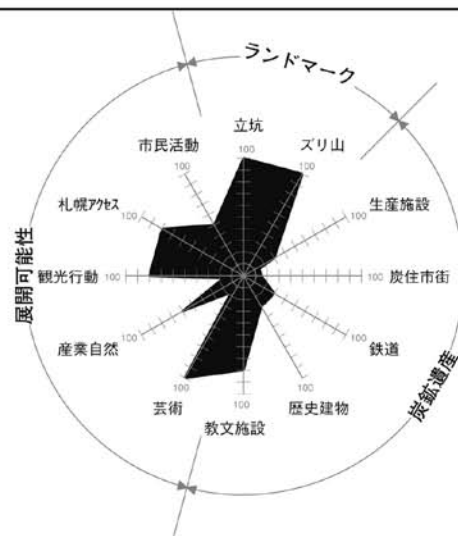
V 5：回廊 [岩見沢～唐松弥生幾春別～芦別]

札幌から富良野に抜ける主要経路の一部を構成する国道 452 号北側のルートで、通過交通を誘導することが主眼となります。

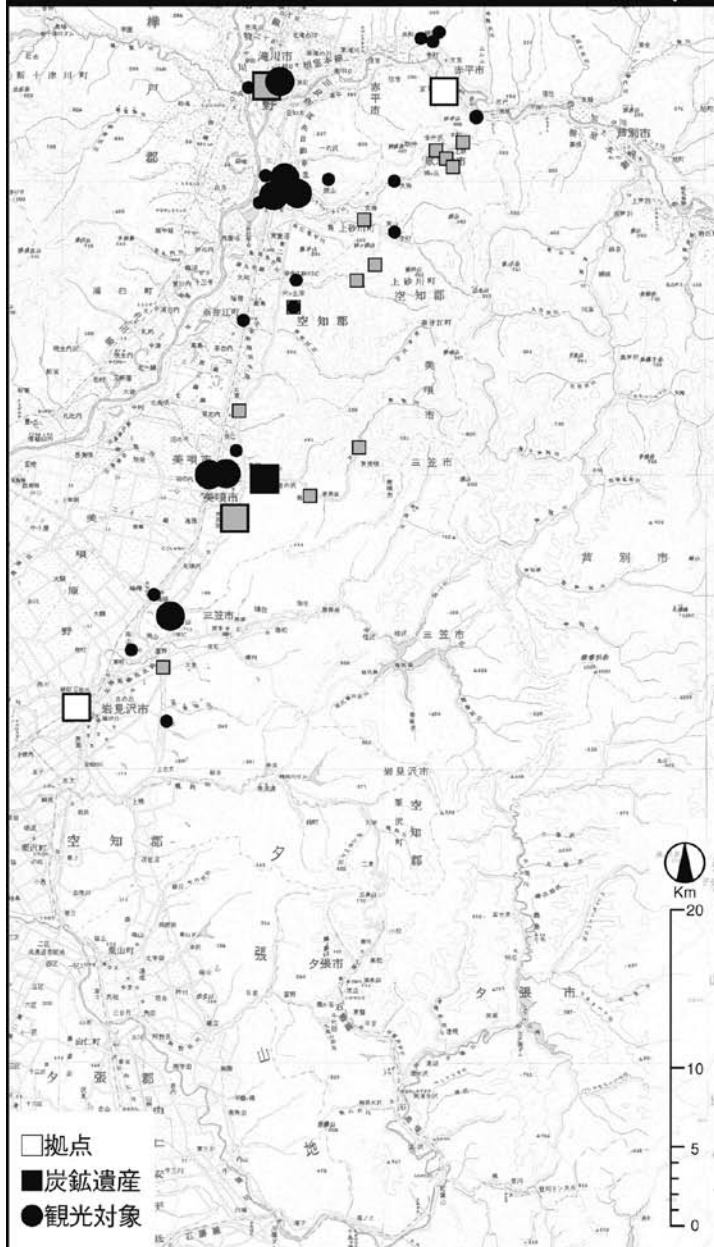
芦別三段滝付近から富良野に向かう交通が多く、流動が芦別まで至らないのが大きな課題となっています。芦別での取り組みだけでは限界があることから、国道 452 号の不通区間（芦別～美瑛間）の解消が急務です。全通した際には、空知産炭地域の東側を縦断する国道 12 号・道央高速道路の軸線と対になって、旭川空港～新千歳空港を結ぶ回廊として機能することによって、地域全体の取り組みを強力に支援する基盤となることが期待されます。不通区間の事業熟度を上げるためにも、隣接する赤平・三笠と協調した芦別での先行的な取り組みが求められます。

V1 歴史（ライマン・榎本武揚・国木田独歩…）

- ・高速道沿いに展開するV資源を上手く活用
- ・全体を表現する強い軸イメージ（ロマン性を持つストーリー造成）
…ライマン、榎本武揚、国木田独歩
- ・飛び石的に赤平まで誘導
- ・途中での確かなQ情報の提示（刷り込み）…アルテピアッツァが重要
- ・砂川→上砂川→歌志内→赤平、砂川→滝川→赤平へ誘導
…テーマ性など工夫必要
- ・赤平での特徴的な拠点の形成が必要
（表向きはVだが…実はQというような）
- ・各地の小さいV資源での小まめなQ情報の提示が必要



ルート



□岩見沢駅周辺…圏域全体の情報拠点

- 道の駅
- 萱野駅（●ライダーハウス）
- 山崎ワイナリー
- 峰延ハスカップ

■南美唄（炭鉱住宅・福利厚生施設）

- アルテピアッツァ（栄小）…V⇒Qの意識付け重要拠点
- 美唄焼き鳥、中村鳥めし
- 三菱茶志内鉱跡

- 奈井江町文化ホール、道の駅
- にわ山森林公園…眺望点（■石炭露頭）
- こどもの国
- 砂川スイートロード
- ソメスサドル
- 砂川オアシスパーク、北光公園
- 北の湯（■住友奈井江鉱跡）

●ジギスカン

□滝川駅周辺…北部情報拠点（●太郎吉蔵・五十嵐威暢）

●スカイパーク

●岩瀬牧場

■上砂川（三井砂川立坑・坑夫像）

●パンケの湯

●悲別駅舎（■上砂川駅舎）

●チロルの湯、道の駅（■住友歌志内跡）

■歌志内（ゆめつむぎ、倶楽部、空知立坑）

●悲別ロマン座（■上歌会館）

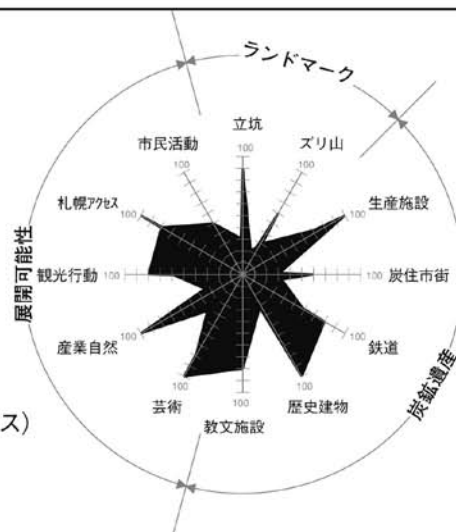
●独歩苑

□住友赤平（立坑・機械・資料・坑口浴場、北炭赤間（ズリ山）

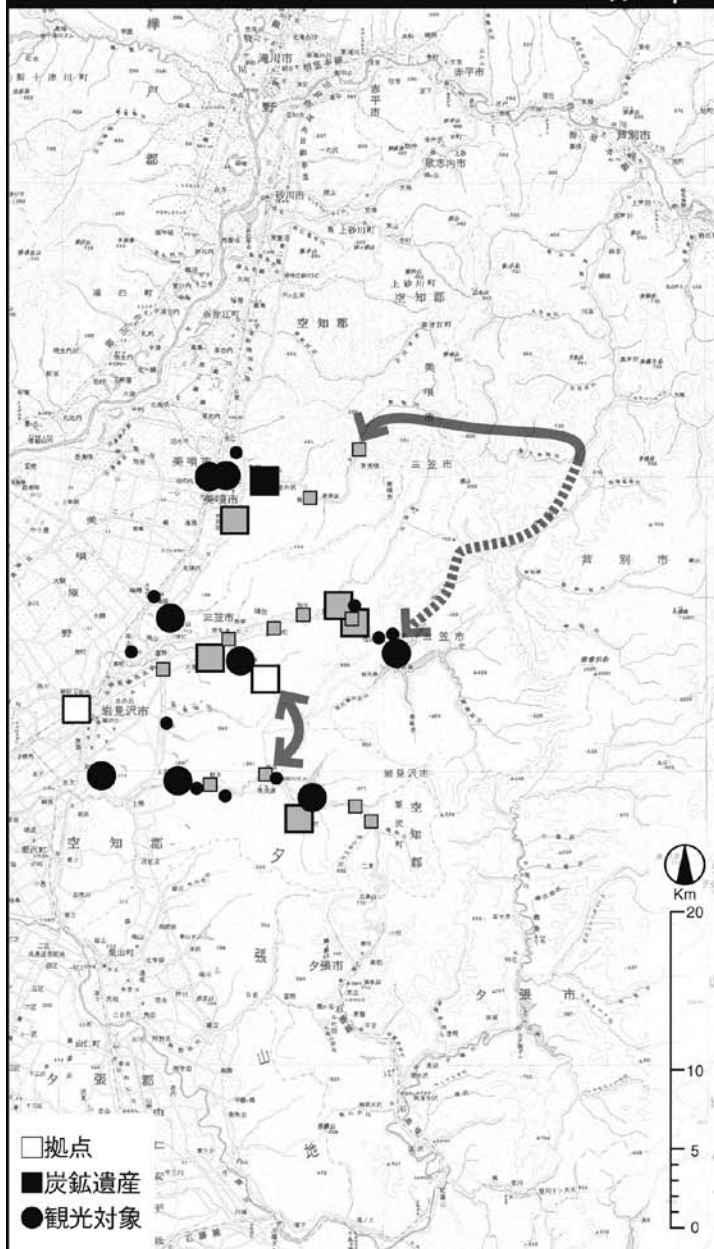
●幌岡（幌岡ソーコ、いたがき、エルム高原温泉）（■植松電機）

V 2 アート

- ・岩見沢を中心にした狭範囲回遊
- ・回遊のテーマとしてのアート
 - ⇒多くの人材が集積（アーティスト・教員～教育大芸術専攻学生）
- ・作者や作品だけではなく…空間自体のアート（展開可能）性も魅力
- ・岩見沢で的確な情報提示ができる拠点が不可欠（…その拠点もアート性必要）
 - ⇒教育大の表現の場との共用の可能性
- ・「農」との境界領域にある（農でキッカケ⇒沢に分け入る）
- ・密度高く、バランス良く炭鉱記憶が残っている
 - ⇒VからQへの意味転換は比較的容易
- ・岩見沢～美唄／三笠／万字を結ぶ移動ルートの特徴出し（例えばフットパス）
- ・各拠点（地区）でのアートの棲み分けが必要



ルート



□岩見沢駅周辺…圏域全体の情報拠点

- 道の駅
- 萱野駅（●ライダーハウス）
- 山崎ワイナリー
- 峰延ハスカップ
- 南美唄（炭鉱住宅・福利厚生施設）
- アルテピアッツァ（■栄小）…V⇒Qの意識付け重要拠点
- 美唄焼き鳥、中村鳥めし

■三笠市役所・市民会館綴帳・特徴的な都市計画

□幌内炭鉱景観公園十周辺（市街地・アートギャラリー）

- 三笠鉄道村
- 伊佐屋ギャラリー、倶楽部跡の樹種・空間構成
- 幌内立坑
- 唐松（駅・坑口・炭住街）
- 弥生（特徴的な木造炭住）
- 住友奔別立坑
- 北炭幾春別錦立坑
- 三笠市立博物館
- 幾春別市街地
- 湯ノ元温泉、健康増進センター
- 桂沢湖

●宝水ワイナリー

●上志文～万字：果樹

■朝日（駅・会館・炭住）

■美流渡（炭住・市街地・ズリ山・ジャンプ台）

●毛陽メイプルロッジ、交流センター

■上美流渡アートビレッジ

●北海道グリーンランド

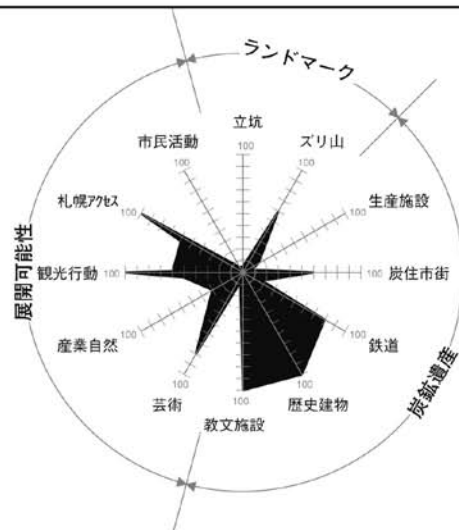
■万字（ズリ山、市街地）

- 拠点
- 炭鉱遺産
- 観光対象

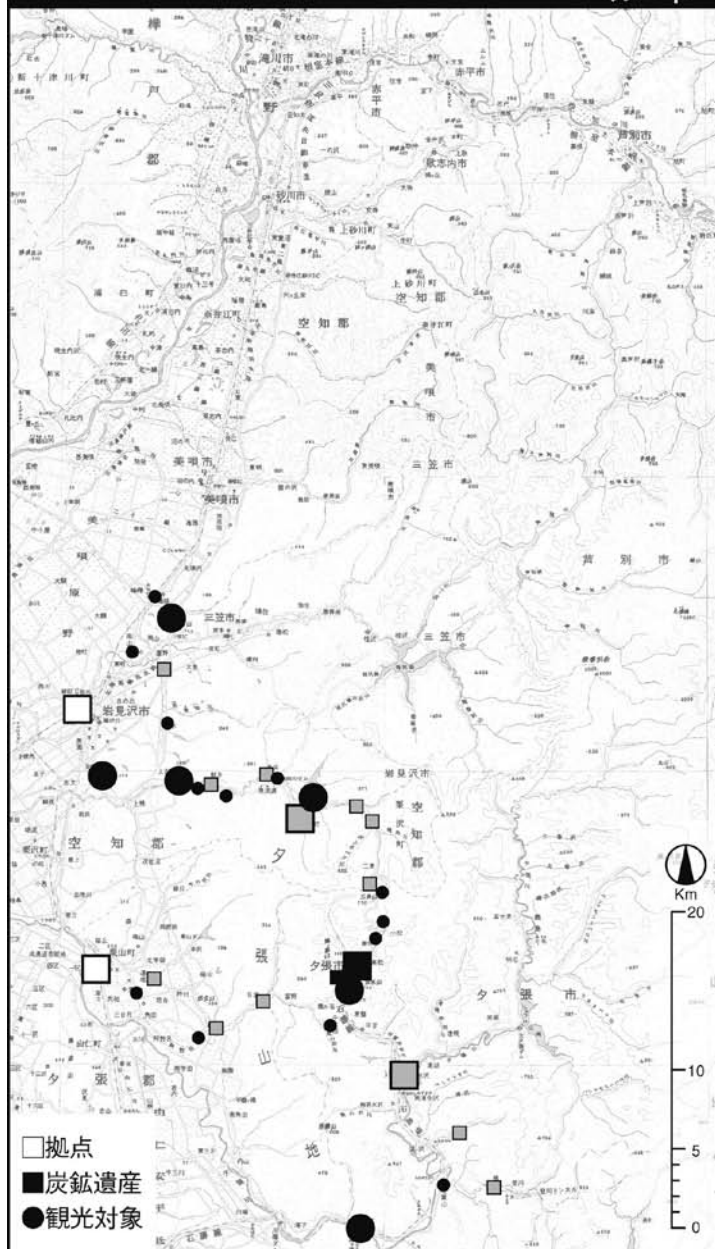


V 3 産業的自然（峠・渓谷の中にある炭鉱遺産）

- ・岩見沢から栗山（紅葉山）を結ぶ回遊ルート
- ・両端の岩見沢と栗山での情報提供拠点の整備が不可欠
- ・夕張、万字（毛陽）は、すでにVルートとして定着
- ・渓谷沿いの移動となり常に炭鉱を感じる空間に密着
- ・石炭博物館、旧北炭鹿ノ谷倶楽部など象徴的な拠点がルート中央に立地
- ・清水沢は生活拠点をどう見せるのかが課題



ルート



□岩見沢駅周辺…圏域全体の情報拠点

- 道の駅
- 萱野駅（●ライダーハウス）
- 山崎ワイナリー
- 峰延ハスカップ

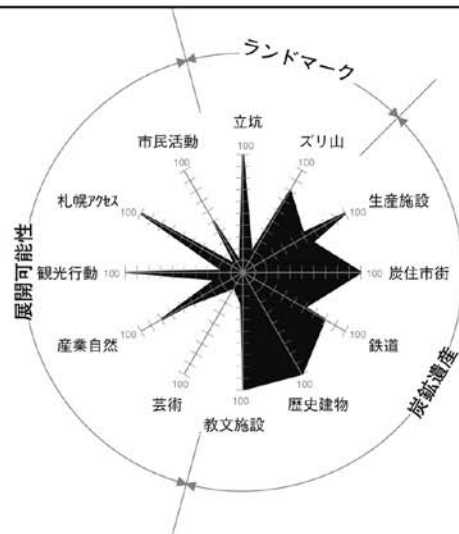
- 北海道グリーンランド
- 宝水ワイナリー
- 上志文～万字：果樹
- 朝日（駅・会館・炭住）
- 美流渡（炭住・市街地・ズリ山・ジャンプ台）
- 毛陽メイプルロッジ、交流センター
- 上美流渡アートビレッジ
- 万字（ズリ山、市街地）

- 道道岩見沢夕張線の急カーブ・坂・眺望（■北炭送電線）
- メロン城
- ニトリ桜
- 石炭博物館
- 旧北炭鹿ノ谷倶楽部
- 夕張リゾート（■多くの炭鉱記憶の上に立地）
- 清水沢（ダム・発電所・ズリ山・炭鉱住宅群）
- 真谷地
- 紅葉山（メロン）
- 楓
- 滝ノ上（■北炭発電所・地層擾乱）

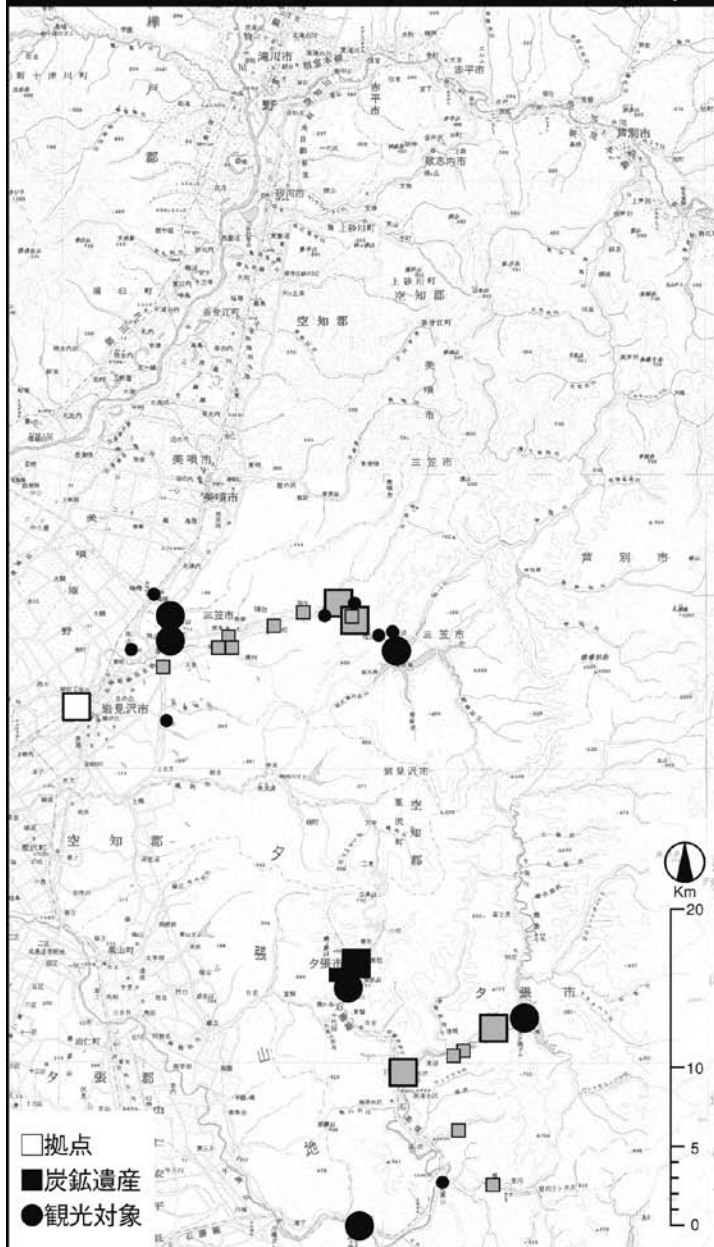
- 道道札幌夕張線の坂
- 夕鉄駅舎（新二岐・継立）と路盤跡
- 坂本九思い出資料館
- 王子製紙森林博物館
- 天然温泉くりやま、シャトレーゼ
- 栗山…南部情報拠点（●北の錦）

V 4 ジオパーク

- ・岩見沢から夕張に至る大回り回遊ルート
 - ・国道452号を介して、三笠側と夕張側ゲートで同様の環境（炭鉱・ダム・川・森林）
 - ・桂沢湖～シュエパロ湖間のテーマ性や仕掛けに工夫が必要
 - ・アウトドアの展開可能性高い（アクティビティーしながらQを感じる）
- ⇒幾春別＝《動》地層擾乱の体感、南部＝《静》2ダム間のゆるやか水面



ルート



□岩見沢駅周辺…圏域全体の情報拠点

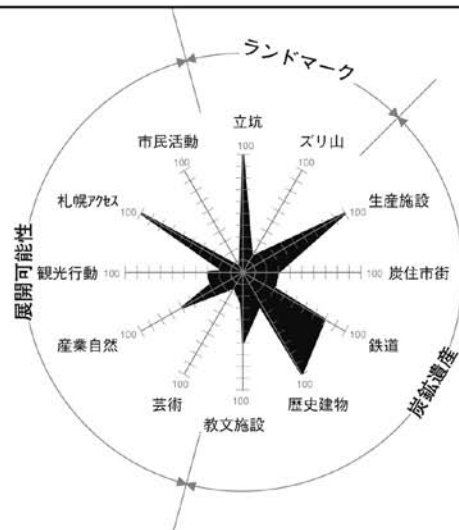
- 道の駅
- 萱野駅（●ライダーハウス）
- 山崎ワイナリー
- 峰延ハスカップ
- 三笠市役所・市民会館緩帳・特徴的な都市計画
- 伊佐屋ギャラリー、クロフォード公園
- 幌内立坑
- 唐松（駅・坑口・炭住街）
- 弥生（特徴的な木造炭住）
- 住友奔別立坑
- 北炭幾春別錦立坑
- 魚染の滝
- 三笠市立博物館
- 幾春別市街地（■）
- 湯ノ元温泉、健康増進センター
- 水辺の楽校
- 桂沢湖

□国道452号（桂沢湖～シュエパロ湖）…何かテーマ性必要

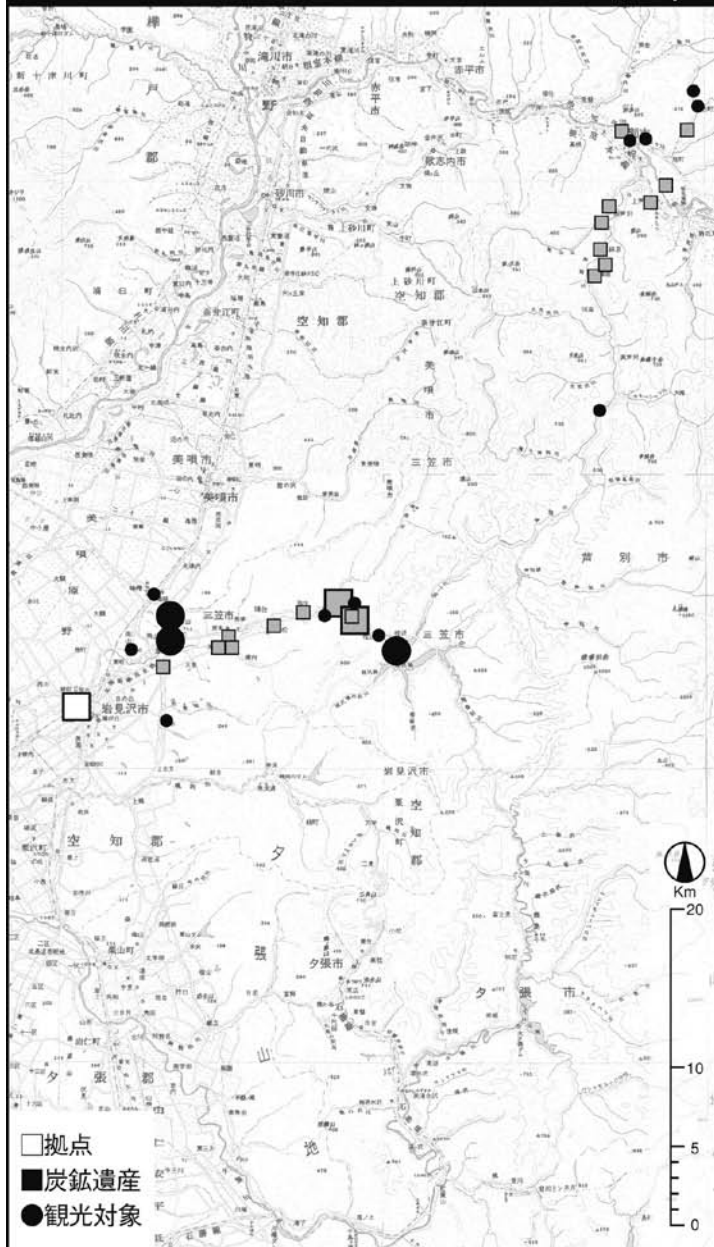
- シュエパロ湖
- 大夕張鉄道車両
- ズリ山（北夕、北菱）
- 清水沢（ダム・発電所・ズリ山・炭鉱住宅群）
- 石炭博物館
- 旧北炭鹿ノ谷倶楽部
- 夕張リゾート（■多くの炭鉱記憶の上に立地）
- 真谷地
- 紅葉山（メロン）
- 楓
- 滝ノ上（■北炭発電所・地層擾乱）

V5 回廊（緑…+ドライブ系）

- ・岩見沢から芦別に抜ける通過ルート
- ・国道452号を介した札幌⇄富良野の流動量の多きさに負う
- ・三段滝から折れ富良野に向かう流動をいかに芦別へ惹きつけるかが課題
 - ⇒芦別での特徴的な展開に負う
 - ⇒国道452号不通区間（芦別油谷～美瑛）が開通すれば一挙に解決



ルート



□岩見沢駅周辺…圏域全体の情報拠点

- 道の駅
- 萱野駅（●ライダーハウス）
- 山崎ワイナリー
- 峰延ハスカップ
- 三笠市役所・市民会館緩帳・特徴的な都市計画
- 伊佐屋ギャラリー、クロフォード公園
- 幌内立坑
- 唐松（駅・坑口・炭住街）
- 弥生（特徴的な木造炭住）
- 住友奔別立坑
- 北炭幾春別錦立坑
- 魚染の滝
- 三笠市立博物館
- 幾春別市街地（■）
- 湯ノ元温泉、健康増進センター
- 水辺の楽校
- 桂沢湖

□国道452号（桂沢湖～三段滝）…何かテーマ性必要

- 三段滝（■地層擾乱）
- 頼城（坑夫像、炭鉱住宅）
- 星槎大学（旧頼城小学校）
- 三井鉄道旧緑泉駅
- 三井鉄道橋梁十車両
- 三井鉄道旧三井芦別駅
- 上芦別（三菱芦別鉱社宅・厚生施設・関連施設群）
- 上芦別（明治上芦別鉱遺構）
- 道の駅、北の京芦別（■星の降る里百年記念館）
- 上芦別～油谷間の鉄道遺構
- 芦別市健民センター（■旧油谷鉱）
- カナディアンワールド公園

- 拠点
- 炭鉱遺産
- 観光対象

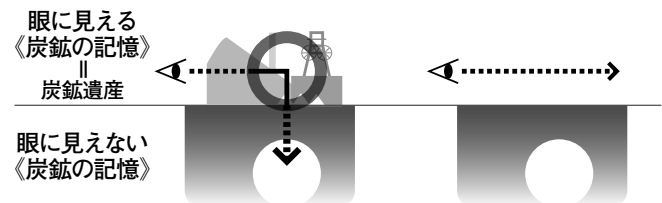
5-4 ネットワーク具体化のため最低限必要な足場

■【拠点】手段として必要な炭鉱遺産への投資

この戦略で目指していることは、空知産炭地域で地域活性化に向けた動きを起こすことです。そのためには、誇り・思い・文化・習慣など、人によって作られてきた歴史の積み重ねである眼に見えない資源を含めた《炭鉱の記憶》を活用することが不可欠です。

しかし、往々にして人は、眼に見えないものを見過ごしがちです。また、眼に見えないものの価値を表現することは、すぐには達成できません。そこで、《炭鉱の記憶》の価値を高め地域活性化に向けて活用するために、物的な炭鉱遺産の力（わかりやすさ＝訴求力）を借りる必要があります。

あくまで、炭鉱遺産を保存することが目的なのではなく、炭鉱遺産が残るのは、地域活性化の活動成果です。地域のイメージを表現し、地域に眠る膨大な蓄積がある眼に見えない《炭鉱の記憶》を活用するために、炭鉱遺産を維持・活用することは、地域活性化に向けた必要な投資であると言えます。



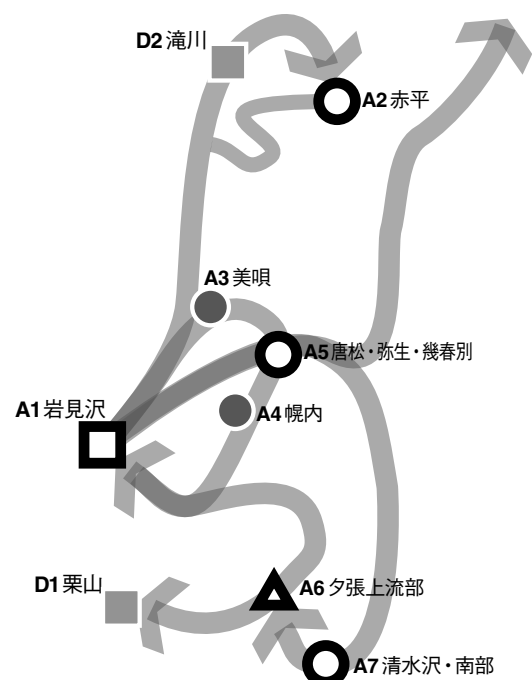
■【拠点】イメージ保持のために必要な拠点

全ての炭鉱遺産を維持・活用することは、現実的には不可能です。そのため、空知が《炭鉱の記憶》をとどめた地域であるということをも地域内外にアピールし、《炭鉱の記憶》の手がかりを得るための足場となる、象徴的拠点を戦略的に配置する必要があります。

すでに、4-2(先導的な拠点の選定)と5-3(拠点のネットワーク)での検討から、幾つかの拠点が選定されています。

この地域を象徴する炭鉱遺産があるA1岩見沢～A7清水沢・南部の7拠点和、地域外との接点となる3拠点（A1岩見沢＝再掲・D1栗山・D2滝川）の合計9拠点は、

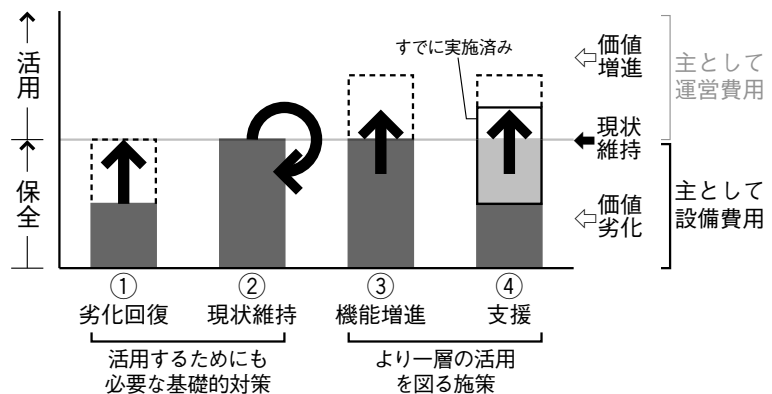
これら拠点が共同して、空知のイメージを確保する役割を先導します。



■【拠点】整備パターン

それぞれの拠点における炭鉱遺産の現状は様々ですが、保全・活用するために必要な投資（主として設備費用＝イニシャルコスト）について、幾つかのパターンが想定されます。

- ① **劣化回復**：活用する以前の水準にあり、現状維持の水準に高めるための投資が必要なもの
- ② **現状維持**：現状維持の水準にあるが、これを安定的に持続するために今の段階で追加投資をすべきもの
- ③ **機能増進**：現状維持の水準は達成されているが、追加投資によって一層の価値増進が期待できるもの
- ④ **支援**：すでに他の事業主体によって保全・活用が実施され、これを支援することで価値増進が期待できるもの



■【拠点】広域的な観点から求められる整備の方向性

各拠点の整備については、各々の炭鉱遺産などの状況に応じて、施設所有者など関係者の理解を得た上で、関係者（市民・行政・学識経験者など）による議論を経て、整備内容や手法を定めて実施されることになります。

また、各拠点の整備にあたっては、少なからず投資が必要であり、内容や手法によって投資額は大きく変動することから、その財源をどのように確保するかが大きな課題です。

しかし、空知産炭地域の活性化の観点から、炭鉱遺産の価値を顕在化し眼に見えない《炭鉱の記憶》の活用につなげるために、炭鉱遺産などの整備についての議論を避けて通ることはできません。

このため、整備にあたっては様々な課題が存在することを前提に、今後の議論のたたき台として、現段階で想定した整備の方向性は次の通りです。

A1 岩見沢：交通至便の位置に地域内外の接点となる拠点の確保が急がれる

A2 赤平：地域北部のアンカー的な拠点として、炭鉱遺産の保全・活用が強く求められる

A3 美唄・A4 幌内：すでに市や市民の手によって一定の整備が実行されており、当面はこれを支援する

A5 唐松・弥生・幾春別：地域中部にあつて東西方向へ抜ける交通の要衝にあり炭鉱遺産を最もアピールできる位置

にあるが、劣化回復や現状維持が急務となっているため、特に保全が必要である

A6 夕張上流部：全空知で活用できる学術的な機能が集積しているが、現状維持が危うい状況となっていることへの対策が急務であり、これが実現することで機能増進への展望が開かれる

A7 清水沢・南部：地域南部の玄関的な拠点であり、生活の場としての機能の維持により新たな展開の可能性がある

D1 栗山・D2 滝川：地域のサブセンター的な拠点として期待されているが、すでに一定の整備が行われ拠点としての基礎的要件を充足しているため、当面はそれらを支援する

アーカイブス（史料収蔵庫）：《炭鉱の記憶》を活用した取り組み、特に炭鉱遺産を整備する際に、基礎的な史料（図書・図面・写真・映像・音声…）は欠かせないが、散逸・滅失の危機にあることから、まずは史料の探索（サルベージ）と集積、活用されていない公共スペースなどを利用した保全を急ぐ必要がある

想定した各拠点ごとの整備内容
(今後の議論のたたき台として作成)

拠点	対 象	整備タイプ				整備内容			費用の目安		
		①	②	③	④	権利調整	保全	活用	小	中	大
A2 赤 平	赤平立坑	●		○		■ 建物（民間）	■ 屋根外壁の修繕	■ 公開用施設整備			※
	坑口浴場	●		○		■ 建物（民間）	■ 屋根外壁の修繕	■ 公開用施設整備	※		
	資料・機械		●	○		市・民間		■ 移設集約し展示 （整備済み）	※		
	赤間鉱ズリ山				○	土地（市・道）					
	立坑～ズリ山間			●		■ 土地（市・民間）		■ 拠点フィールド整備	※		
A3 美 唄	アルテピアッツァ				○	土地・建物（市）		（整備済み）			
	美唄立坑				○	土地（道）		（整備済み）			
	三菱美唄鉱遺構		○			（多様）	（随時対応）		※		
A4 幌 内	幌内変電所				○	■ 建物（民間）		（現況）			
	幌内選炭機跡				●	■ 土地（市）		■ 公開用施設追加整備	※		
	幌内線跡		●			土地（市）		（現況）			
	幌内ズリ山		●			■ 土地（市・民間）		（現況）			
	布引立坑		○			土地（道）		（現況）			
A5 唐 松 弥 生 幾春別	幌内立坑	●	●			■ 建物（民間）	■ 基礎鉄構修繕	（見守り保存）	※		
	奔別立坑	●	●			■ 建物（民間）	■ 外構整備	（見守り保存）		※	
	錦立坑	●	●			無主物	■ アプローチ整備	（見守り保存）	※		
	野外博物館				●			■ 要素の複合	※		
	住友炭住		○	○		■ 建物（民間）	■ 劣化補修	■ 一部内部公開	※		
A6 夕 張 上流部	石炭博物館		●	○		土地・建物（市）	■ 機器更新・建物補修	■ 展示更新・資料整備			※
	鹿ノ谷倶楽部		●	●		土地・建物（市）	■ 建物補修	■ 利用機能増進追加		※	
	高松ズリ山			○		土地（市）		■ 公開用施設整備	※		
	鉄道車両・資料		●	●		■ 市・民間、土地（市）	■ 鹿ノ谷駅裏に集約	■ 公開用施設整備		※	
A7 清水沢 南 部	北炭電力所		●			■ 建物（市・借主民間）	■ アプローチ整備	（見守り保存）	※		
	清水沢ダム		○			構築物（道）		（現況）			
	水面（ダム～南部）			○		河川（国）ダム（道）		（湖上ルート形成）	※		
	清水沢ズリ山			●		土地（市）		■ 公開用施設整備	※		
	改良住宅群		○			土地・建物（市）	（通常補修）	（現況）			
	地区センター				○	■ 未定		■ 拠点施設整備	※		
A1岩見沢	圏域センター				●	■ 未定		■ 拠点施設整備	※		
未 定	アーカイブス		●	○		■ 公共施設賃借	■ 史料サルベージ・保管	■ 活用・公開体制	※		

■=対応の緊急度が高い施設 ●=第一段階に着手すべき ○=条件が整った段階で着手 ■=権利調整・保全・活用に必要な内容

これら拠点における整備を全て実施した場合、相応の投資額が必要となります。その事業費の大半を占めるのは、整備タイプ①劣化回復と②現状維持であり、緊急度が高い状況にあります。空知が《炭鉱の記憶》をとどめた地域としてのイメージを保持するために必要な拠点であることから、今後、様々な課題を克服して可及的速やかに対応する必要があります。

■【拠点⇔拠点】必要な基盤整備

次のような社会資本（道路）の整備によって、戦略的ストーリーの具体化が促進されます。

○地域全体の回遊構造の強化、ルートV 5 の具体化

国道 452 号不通区間（芦別～美瑛）の早期開通

○ルートV 2 の具体化

道道 1129 号三笠栗沢線の未整備部分（幌内～美流渡）

道道 135 号美瑛富良野線の不通区間（盤の沢～奥芦別）

○ルートV 1 5 の連絡による地域北部の強化

道道 115 号芦別砂川線の未整備部分（西芦別～上砂川）

また、次のような施策によって、ルートの回遊が一層促進されます。

○物理的

広域フットパスルート

○情報的

誘導・案内サインの統一

ガイドシステム（iPod や GPS などの活用）

ルートのテーマ性設定と景観的な^{しづら}な設え

○制度的

公共交通での事業者間の垣根を越えたエリア乗車券

■推進のための事業構造

これら整備を推進するための事業内容は、今後、各拠点・施設ごとに、初期投資と運営費用を含め、詳細に検討されることになります。基本的な事業構造は、次のように進めるのが現実的かつ効果的です。

●資金調達

○ファンドの造成…応援団としての市民・企業からの公募型基金

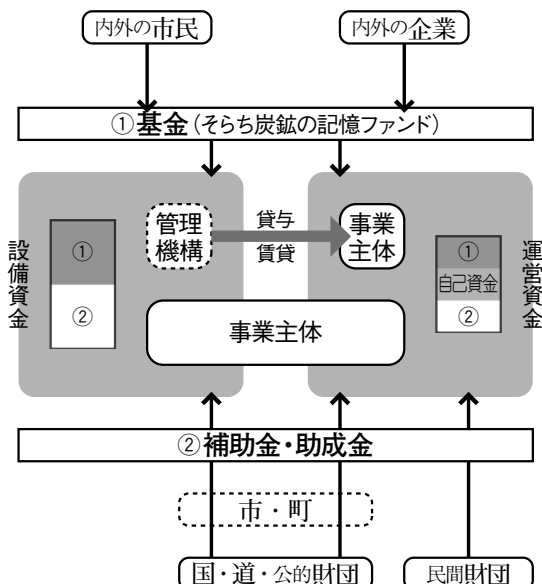
○公的な補助・助成…産炭地域総合発展基金（新産業創造：新基金）、観光圏整備・雇用対策・地方の元気再生事業（国）、地域政策総合補助金・北海道版観光圏整備（道）など

○民間の補助・助成

●事業主体

○産炭自治体の財政的能力の限界から、基本的には民間セクターを想定

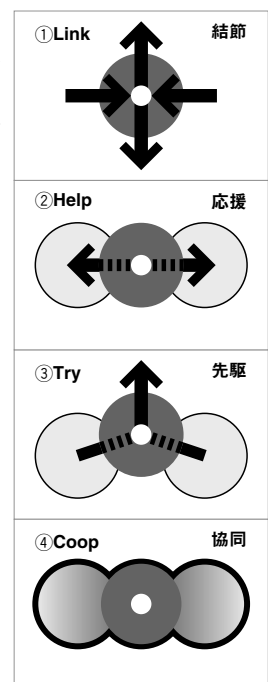
○事業内容によっては、一つの事業主体による資産保有・管理の一体化だけではなく、資産保有と運営管理の法人の分離も考えられる



- これまで、空知産炭地域では教育機関（特に大学・大学院など高等教育機関）の参画が随所で見られているため、「産・官・民」とどまらない「産・官・学・民」という枠組みによる推進体制の構築が考慮されるべき
- 市・町は、経常的な公共事業を展開する際に本戦略の視点を保持し常に参照することや、国・道の補助金・助成金などで市・町を経由する手続きを円滑に媒介することで、本構想の具体化に貢献する

各拠点や基盤整備の取り組みに加えて、空知産炭地域の全域を対象とした「地域マネジメント」の機能が不可欠です。特に、A1 岩見沢に置かれる地域全体のセンター機能拠点では、地域内外を結ぶ重要な役割を果たすだけでなく、各拠点やルート形成について進捗を管理し具体化を促進する役割を担います。

- ① **結節**：地域内外の人や知識を集約し媒介することによって、空知産炭地域のゆるやかな繋がりをつくる。特にこの機能は重要であり、地域内外の動きを知識・情報を付加することによって促進する
- ② **応援**：各地の取り組みにおいて手薄な機能・人員などを支援する
- ③ **先駆**：各地の活動の方向性を示すような実験的・先導的な活動、個々の拠点ではできない基礎的な活動を行う
- ④ **協同**：各地の分散した活動では実現できない連合してあたるべきことの中核として活動する



6. 実現の手段 ③ 一拠点の形成

展開のスタディー、拠点形成のための道具だて

4章で設定した先導的拠点は、5章で構想したネットワーク化の際に構成要素の一つとして機能するだけでなく、それ自体が明確なメッセージを地域内外に対して発信します。

ここでは、そのような役割を担う拠点を形成するために、どのような知見が不可欠であるかを、赤平・三笠の重要拠点を例にスタディーし、他の拠点の形成に資するツールを提供します。

6-1 拠点形成の必要性

■Q質を追求する

前章(5-3)では、地域外の人のV量を確保するために、ネットワーク化について構想しました。V量を確保するためには、前章(5-2)で述べたように、同時にQ質の向上が不可欠です。

特に、Q質の向上に貢献する対象層③④は、炭鉱遺産を筆頭とする《炭鉱の記憶》自体に興味を持っています。炭鉱遺産の新たな意味や、より深い知識の導入のために、これらの層の関心を惹きつける魅力的な「場」が必要です。

これまでは、〇〇立坑、△△ズリ山、□□博物館…というように施設単体や拠点個別にアピールし、理解の範囲は炭鉱遺産にとどまっていました。これでは構成要素相互の関連性は希薄となり、Q質を目指すための知識や人材の集積は望めません。

■パッケージ型の先導的拠点

4章で選定した14拠点では、各々において、Q質の向上を図り、V量の確保に貢献する拠点の形成に向けた努力が必要です。

特に、拠点形成の先導役として期待されるのは、炭鉱に係る様々なテーマが重層的に見てとれる見本市的な「場」としての可能性を有する次の4つの拠点です。

A2 赤平…住友赤平立坑～北炭赤間ズリ山の一带

A4 幌内…幌内炭鉱景観公園を中心とする一带

A5 唐松弥生幾春別…住友奔別立坑から西桂沢にかけて

A7 清水沢南部…清水沢周辺

これら拠点は、炭鉱遺産を目印・入口(＝ランドマーク)としながら、その根本にある《炭鉱の記憶》全体を見せるという困難な任務を果たします。

これら拠点の形成が先行し、具体化のプロセスや知見が手本・教訓となり、他の拠点の形成が促進されることが期待されます。

以下では、市民活動が既に展開されており具体化の熟度が高い3つの拠点を例に、拠点形成のスタディーを行い、そこから得られた知見を、他の拠点を形成する際のヒントとしてまとめました。

6-2 拠点形成のスタディ（赤平）

■地形と歴史は現在のまちを形づくってきた二大要素

地形と歴史は景観の成立にかかわる二大要素であり、地形と歴史の両方の視点から、いかにして景観が成立したかを知ることは、まちの構造を見定めることにつながります。

赤平市の場合、市域を東西に貫流する空知川の南北兩岸に広く河岸段丘地形が分布しており、そこを中心に、石炭産業の発展とともに山麓に向かって市街地が拡大しました。

石炭産業が衰退して以降、山麓部から市街地が縮退し、今日に至っているという歴史的変遷に目を配る必要があります。

■地形・土地利用の構造からみた赤平の景観上の骨格

赤平市の自然景観の基盤は、河岸段丘とそれを貫流する空知川にあります。空知川は、段丘面を下刻しながら蛇行していることから、市街地が相対的に高台に位置しています。

そのため、空知川の氾濫によって市街地が被害を受けたことがなく、開拓以前の流路がほぼそのままの形で今日まで引き継がれたという特徴があります。

川岸には豊かな河畔植生が連続し、空知川をまたぐ橋からは、ゆるやかに蛇行する河川、兩岸に連なる河畔のみどり、その奥に市街地のまちなみ、市街地の北と南に屹立する山地が背景として連なり、西側へは石狩平野からピンネシリまでの遠望を一望できるという恵まれた特性を有する点に留意すべきです。

■市街地構造にみられる歴史の重層構造

市街地に目を転ずると、河岸段丘に相当する区域は、1901年に殖民区画にもとづき設定されました。1913年の鉄道開通を境に、石炭産業が本格的に興隆し、殖民区画に沿った街区の計画的配置をベースに、炭鉱施設や炭鉱住宅が整備されました。

しかも赤平には、住友赤平・北炭赤間・雄別茂尻・豊里の4大炭鉱が並立し、それぞれの「企業城下町」が形成され、炭鉱毎の企業風土が地域的まとまり感を持って形作られました。

このように、殖民区画にもとづき設定された区域に、炭鉱産業の隆盛とともに炭鉱住宅など炭鉱関連施設配置が上重ねられたまちなみが形作られたのです。

さらに、根室本線、国道38号線、赤平駅から虹かけ橋への街路といったまちの骨格をなす幹線が、まちの基盤構造を切り裂くように組み込まれました。まちなみの基本構造は、時代の変遷が重積され、それが地域固有の景観の基盤を形作っている点を踏まえる必要があります。

■赤平固有の歴史的・文化的オリジン

また、石炭を含む地層（夕張層・若鍋層・美唄層）は、南北方向に軸をもつ地向斜に沿って分布しています。褶曲する炭層が地表に現われた個所を空知川が浸食し、露頭として川岸に現れたことが、炭層の発見につながりました。

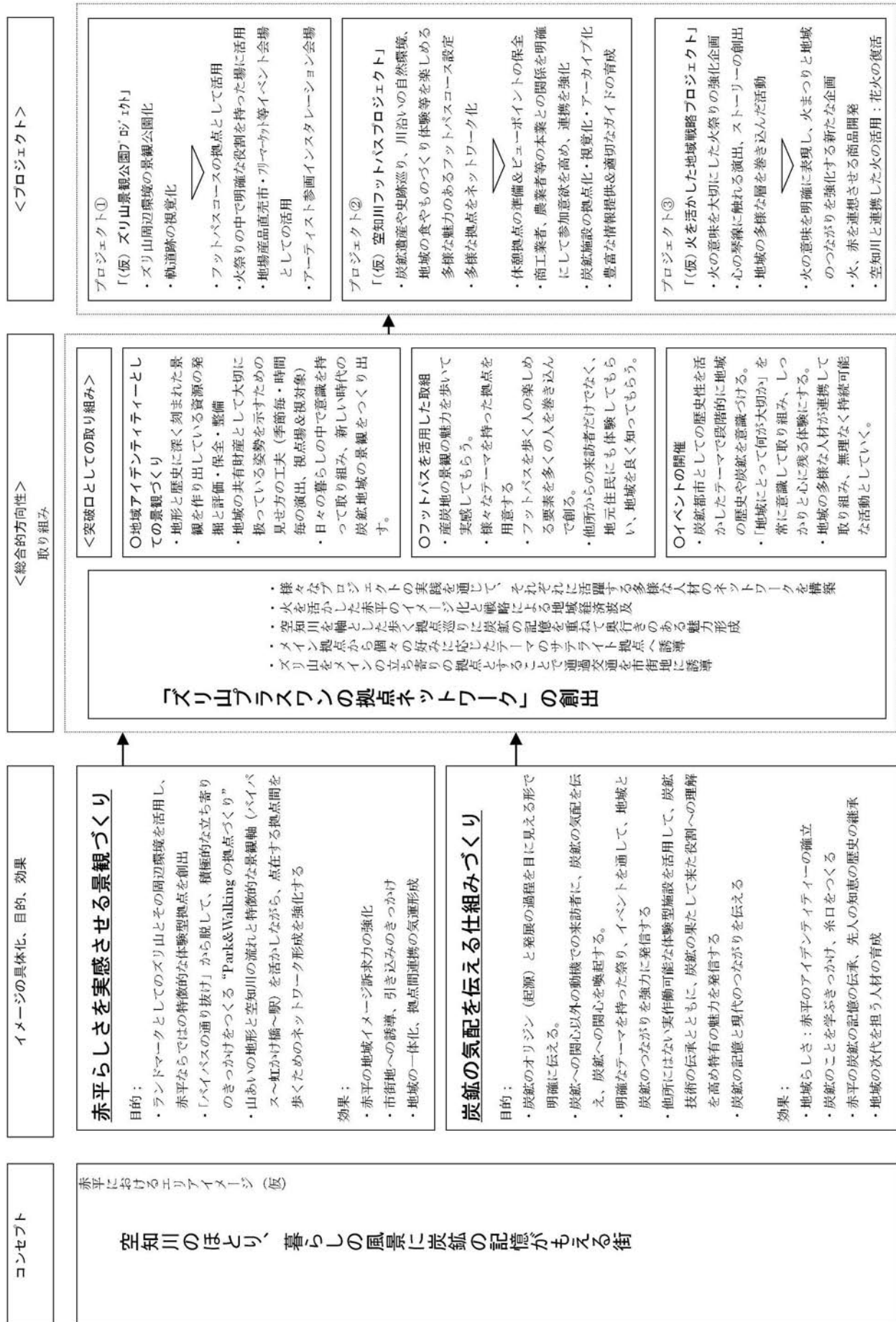
まさに炭鉱都市のオリジンともいえる場所が、今日に至るまでほぼ原形をとどめており、貴重な資源と言えます。

また、この川岸の近くは、1895年に国木田独歩が空知川沿いを訪ね、代表作である「空知川の岸边」を構想した場所としても知られ、文化的価値をも有していることから、保存・活用を優先的に具体化する必要があります。

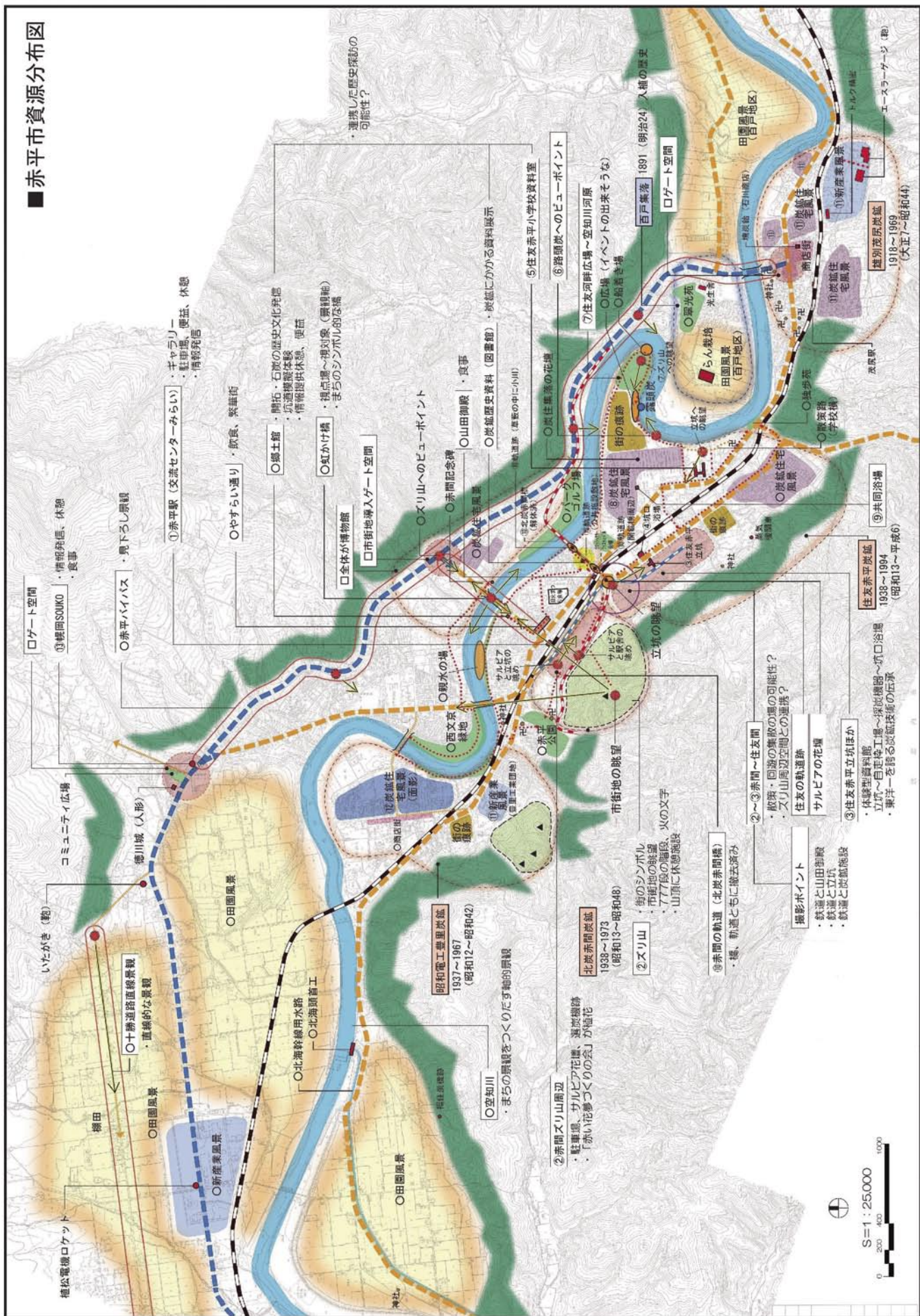
■炭鉱まちの面影に見る景観構成要素の表出性

炭鉱まちとしての面影としては、赤平の至る所から望むことができる住友赤平立坑・周辺施設、赤間のズリ山などの、シンボリックな景観構成要素があります。一方、その対極として、線路跡など一見しただけでは見逃してしまう景観構成要素も見られ、中間的な要素としての炭鉱住宅など、それぞれの要素の形態や意味は多様です。

そのため、これらの特性を踏まえた景観特性の表出を検討する必要があります。



■赤平市資源分布図



6-3 拠点形成のスタディ（三笠）

■地形と歴史は現在のまちを形づくってきた二大要素

地形と歴史は、景観成立にかかわる二大要素であり、その両方の視点から、いかにして景観が成立したかを知ることが、まちの構造を見定めることにつながります。

三笠市の場合、東西に市域を貫流する幾春別川に沿って、谷底平地と、南北両岸に河岸段丘地形が分布しています。そこを中心に、石炭産業の発展とともに山麓に向かって市街地が拡大し、石炭産業が衰退して以降、山麓からの市街地の縮退と、同時に市街地内に空地が生じ始め、今日に至っているという歴史の変遷に目を配る必要があります。

■地形・土地利用の構造からみた三笠の景観上の骨格

三笠市の自然景観の基盤は、河岸段丘とそれを貫流する幾春別川にあります。

幾春別川は、桂沢から谷合いを縫って流れ、「桂沢神居古潭」という南北に走る尾根を貫く狭隘部をぬけると、幾春別、弥生、唐松といった市街が位置する河岸段丘面の間に広がる谷底平地を蛇行しながら流下します。

谷底平地にひろがる農地や市街地は、氾濫の被害を受けてきたことから、幾春別から川下では、河道の付け替えなど河川改修が行われました。河川と人々とのせめぎ合いの歴史の中で、1889年に幾春別での河道切り替え工事の際に出現した「魚染めの滝」とその逸話、幾春別市街に残る街中の地名に名残がみられるなど、その扱いについて、留意すべきです。

■市街地構造にみられる、地区毎の独立的発展過程

市街地に目を転ずると、1879年に北海道の近代炭鉱の端緒となる官営幌内炭鉱が開坑し、石炭産業の立地に不可欠な鉄道は、1883年の幌内～手宮間に幌内鉄道の営業が開始されました。

1888年には幌内太（三笠）～幾春別間が延長され、同年に幾春別炭鉱も開坑、1902年から1905年の間に、奔別炭鉱・弥生炭鉱・唐松炭鉱・ヌッパ炭鉱が相次いで開坑しました。

それぞれのヤマ元には、幌内・唐松・弥生・幾春別の市街地が独立的に形成されました。

幌内は、幌内川沿いの狭い谷合いと斜面に市街地が広がり、唐松・弥生・幾春別の市街地は幾春別川の、河岸段丘上あるいは谷底平地に市街地が展開しました。

このように、それぞれの市街地は、炭鉱の「企業城下町」として計画的に地割がなされ、相互に独立した地域社会を形成した経緯を持っています。

炭鉱直下の商店街の面影を残す幌内市街地や幾春別市街地、三角屋根の美しい炭鉱住宅が残る弥生地区、幌内線の駅の面影を残

す旧唐松駅舎など、当時の炭鉱まちの暮らしを想起させる要素が点在しています。

これらは、市街地の歴史をひも解き、場の記憶を呼び寄せる手がかりとなる要素であり、人々の思いを束ねる素材として活用が求められます。

■幾春別周辺に見られる地域活性化の資源「宝」

石炭を含む地層（幾春別層）は、北東―南西方向に軸をもつ地向斜に沿って分布しています。褶曲する炭層が地表に現われた個所を幌内川が浸食したことが、石炭の発見につながり幌内炭鉱の起源となりました。同様に、幾春別川の浸食により露頭炭として川岸に現れたことが幾春別炭鉱の起源となりました。これらの発見が、その後の地質調査につながり、炭鉱開発の端緒となりました。

なかでも、幾春別炭鉱の発祥の地は、当時の面影を残しており、貴重な資源と言えます。この一帯は、1921年に文豪の大町桂月が溪谷美を「桂沢神居古潭」、温泉宿を「神泉閣」と名付け、歌人の若山牧水が訪れるなど文化的資源でもあります。同時に、中生代から新生代の地層が露出し、なかでも白亜紀層が露頭する地質学的に貴重な場所でもあります。さらに、この一帯はカヌーなどの利用や、かつての森林軌道跡なども見られ、環境学習・レクリエーション・風景観賞・散策など、地域の多様な歴史や地質的構造特性が密度高く分布しています。

その具体的な保全・活用方策については優先的に具体化を検討することが求められます。

■選炭工程に見られる「自然立地的施設配置」

坑口から運ばれた原炭を選炭し鉄道貨車で出荷する、一連の選炭工程の施設配置には、知的好奇心の対象となる様々な配慮が見られます。

坑口を高台に設け、斜面落差を利用しながら選炭し積込ビンに落とすという構造が、住友奔別鉱（奔別立坑開発前）・住友弥生鉱・北炭新幌内鉱に共通して見られます。また、選炭工程で大量の水を必要とすることから、各炭鉱では、河川との位置関係を考慮し、選炭施設群が配置されています。

このように、選炭工程に関わる施設群が、地域の地形的特徴を読み解き、「自然立地的施設配置」をしており、これらの配置特性を踏まえた景観特性の表出を検討する必要があります。

炭鉱時代の面影、復元する自然と創造蓄積の芸術空間、汽笛が響く沢の街

幌内地区におけるエリアイメージ（仮）

石炭のある暮らしを伝える景観づくり

- 目的；
- ・幌内地区のオリジン（起源）と発展の過程を目に見える形で明確に伝える
 - ・石炭を活用した催しや体験メニュー、新たな産業創出を通して炭鉱街の魅力、産業文化を発信し、新しい時代の炭鉱街の風景をつくる
- 効果；
- ・幌内地区成立の記憶の伝承、地域らしさの確認
 - ・炭鉱街コミュニティの構築、熟成
 - ・炭鉱を学ぶきっかけ、糸口をつくる

幌内線でつながる地域づくり

- 目的；
- ・クロフォード公園をエンタランスとして幌内炭鉱跡と幌内市街地を幌内線を軸に連続化する
 - ・炭鉱の時代に幌内線の果たした歴史的役割の理解を深め、特有の魅力を発信する
- 効果；
- ・幌内地区への誘導、引き込みのきっかけ
 - ・音、におい等、幌内らしい五感の風景の連続化による地域としての一体化、拠点間連携
 - ・幌内の地域イメージの訴求力の強化

復元する自然と共生した地域づくり

- 目的；
- ・衰退した炭鉱産業跡に復元する産業的自然環境との共生と、そこを舞台にした芸術活動等の文化的蓄積によってこれからの幌内の風景、地域をつくる
- 効果
- ・環境時代に生き続けられる豊かな地域の特徴
 - ・新しい価値、魅力の創造
 - ・環境教育による地域の次代を担う人材の育成

「幌内線でつながる幌内地区トレイル」の創出

- ・様々なプロジェクトによる進化、熟成と地域内外の人的ネットワークの醸成
- ・ストーリーによる資源の連携
- ・線路、河川、道路が並行する幌内地区の特性を生かした活動プログラム
- ・連続（ネットワーク）と拠点（コンテンツ）創出によりエリア全体をフィールド化

＜突破口としての取り組み＞

- 地域アイデンティティとしての景観づくり
- ・地形と歴史に深く刻まれた景観を作り出している資源の発掘と評価・保全・整備
 - ・地域の共有財産として大切に扱っている姿勢を示すための見せ方の工夫（季節毎・時間毎の演出、視点場＆視対象）
 - ・日々の暮らしの中で意識を保持して取り組み、新しい時代の炭鉱地域の景観をつくり出す。
- フットパスを活用した取組
- ・産炭地の景観の魅力を歩いて実感してもらう。
 - ・様々なテーマを持った拠点を用意する
 - ・フットパスを歩く人の楽しめる要素を多くの人を巻き込めるように創る。
 - ・他所からの来訪者だけでなく、地元住民にも体験してもらい、地域を良く知ってもらう。
- イベントの開催
- ・炭鉱都市としての歴史性を活かしたテーマで段階的に地域の歴史や炭鉱を意識づける。
 - ・「地域にとって何が大切か」を常に意識して取り組み、しっかりと心に残る体験にする。
 - ・地域の多様な人材が連携して取り組み、無理なく持続可能な活動としていく。

プロジェクト①

- 「（仮）幌内炭鉱景観公園活用プロジェクト」
- ・常設展示ではない変化する展示と蓄積
 - ・炭鉱が対話の理解を深めるきっかけ
- ＜
- ・アーティスト参画インスタレーション会場
 - ・炭鉱住宅を活用したアート宿舎
 - ・「ザ・アートミュージアム」等、既存施設との連携
 - ・地下模型や炭鉱の話を伝える「アーカイブ」化
 - ・幌内1丁目のゲートタウン化

プロジェクト②

- 「（仮）幌内線フットバスプロジェクト」
- ・「クロフォード」公園～景観公園間の周辺集落を含めた「フットバス」設定
 - ・「クロフォード」公園のエンタランス機能強化、鉄道材の拠点化、幌内線活用による景観軸化
- ＜
- ・幌内線全線を使った「フットバス」・鉄道馬車運行
 - ・休憩拠点の準備＆シークエンスとシーン景観、視点場の保全
 - ・商工業者、農業者等の本業との関係を明確にして参加意欲を高め、連携を強化
 - ・炭鉱施設の拠点化・視覚化・アーカイブ化
 - ・豊富な情報提供と適切なガイドの育成

プロジェクト③

- 「（仮）石炭＆鉄道活用プロジェクト」
- ・石炭を使った学習・催し企画
 - ・線路を舞台とした地域学習
- ＜
- ・石炭を使った風呂、ストーブ、SL体験
 - ・石炭をエネルギーに食の体験
 - ・映画スタンドバイミー体験
 - ・石炭をキーワードの商品づくり（幌内1丁目「イメージ再現型商品」開発）

幾春別・弥生・唐松地区におけるエリアイメージ (仮)

褶曲する地層に挟まれた炭層と幾春別川に削り出された地形と産業史が織り成す街

地層と地形が生み出した景觀の表出

目的：

- ・地質学的に、地区のオリジン（起源）と発展の過程を目的に見える形で明確に伝える
- ・炭鉱 GEO PARK の創出

效果：

- ・町の基盤である地形・地質、それを亮堀した幾条別川によって街の骨格が形成されていること、炭堀が石炭層を露出させ、洪積世に成立した河岸段丘に市街地を發展させた歴史を、浮き彫りにする。→三笠のまちの基盤と歴史という、目に冴えない資源を、景観を手掛かりに表出

炭層と地形を讀んだ炭鉱システム

目的：

- ・奔別、弥生、唐松、各炭鉱システム（坑口から選炭機へ、ホッパー→貨車）を実現させた、地形や地質を解説し、時代の最先端の技術力を持って、将来を構想した当時の人々の力強さを、炭鉱遺産をシンボル、ノードといった景観イメージとして、視覚的に伝える

效果

- ・産業の技術、技術思想、まちづくりの構想力など、炭鉱を学ぶきっかけ、ガイド案内の糸口をつくることのできる。また、当時の様子の伝承と写真画像のアーカイブ化

川谷と地形が織りなす溪谷と歴史

目的：

- ・幾春別神居古譚をコアとし、そこでの学習（博物館や資料館）とレクリエーション（カヌー、サイクリング、フットパス）を通じた地域の自然史や産業史（森林施業、炭鉱業）、文芸史を学ぶ

效果：

- ・自然、アウトドアガイドの育成、新しい価値、魅力の創造・環境教育による地域の次代を担う人材の育成

＜突破口としての取り組み＞

○地域アイデンティティとしての景観づくり

- ・地形と歴史に深く刻まれた景観を作り出している資源の発掘と評価・保全・整備
- ・地域の共有財産として大切に扱っている姿勢を示すための見せ方の工夫（季節毎・時間毎の演出、視点場と視対象）
- ・日々の暮らしの中で意識を持って取り組み、新しい時代の炭鉱地域の景観をつくり出す。

○景観を舞台にしたフットパスを活用した取組

- ・産炭地の魅力を、ガイドにより、る案内、ガイドポストにより、歩いて実感してもらう。
- ・地域の歴史や地質にベーズのある資源を楽しむ学ぶ拠点を用意する
- ・地域の多様な人材が連携して取り組み、無理なく持続可能な活動としていく。

○イベントの開催

- ・炭鉱都市としての歴史性を活かしたテーママで段階的に地域の歴史や炭鉱を意識づける。
・「地域にとって何が大切な」を常に意識して取り組み、しっかりと心に残る体験に、遊び、環境学習をベースに、並び、語らい、地域支援活動など、多彩な要素を織り込む。

- ・様々なプロジェクトによる進化、熟成と地域内外の人的ネットワークの醸成
- ・屈曲する幾希別川、段丘地形、川周辺に賦存する地産資源の特性を生かした活動プログラム
- ・道路Pathと河川Corridorと拠点となるSymbolと、人の動きと思いを束ねるNodeによるイメージ創出

「地形と川」によって形作られた炭鉱の記憶を浮き彫りにする仕掛け→気づき」

プロジェクト①

「(仮) 幾春別景観公園活用プロジェクト」

- ・生来の自然環境(地質、地形)の環境学習を通じた地域の地質(炭層含む)、地域の産業史や生活史を楽しく学べる装置と機会の創出
- ・地域全体を地質歴史公園として、位置づけ、ガイドボランティアの養成
- ・自然と楽しみながら、学ぶ仕掛けを構築すると同時に舞台環境を整備する

プロジェクト②

「(仮)地域イメージ戦略化プロジェクト」

- ・炭鉱遺産を巡るパスと幾春別川を利用した生態的コリドーの組み合わせ
 - ・市立博物館のエントランス機能と旧駅舎のノーード機能の強化、シンボルとしての炭鉱ノーード施設の表出化
- 
- ・休憩拠点の準備&シーケンスとシーン景観、視点場の保全
 - ・高工業者、農業者等の本業との関係を明確に就参加の拠点を高め、連携を強化
 - ・炭鉱施設の拠点化・視覚化・アーカイブ化
- 豊富な情報提供と適切なガイドの育成

プロジェクト③

「(仮)化石、地質探索プロジェクト」

- ・石炭や化石を使った学習・催し企画
 - ・サイクリングロードを舞台とした地域学習
- 
- ・地質学習体験 ・石炭をエネルギーに食の体験 ・川沿いの風情の演出
 - ・アーティスト参画インスタレーション会場
 - ・炭鉱住宅を活用したアートの宿
 - ・地下模型や炭鉱システムを伝えるア・カピバ

[illegible]

6-4 拠点形成の道具だて

景観づくりを切り口とした地域づくりを他の地区において展開するにあたって、赤平と三笠のケーススタディの検討結果から、汎用性のある項目を拾い出し、「地域の見せ方」と「資源の活用」といった視点で整理を行いました。

■地域の見せ方

地域の始まりのオリジンを伝える

地域の起源、オリジンを知ることは、その地域の理解をより深めることが出来る。

炭鉱まちとして栄えた地域のオリジンを地域アイデンティティを伝える資源として活用することが、地域イメージを確立する上でも重要となる。

歴史的発見のあった川からの視点で地域を見せる

空知産炭地域における炭鉱の始まりは、露頭炭の発見に始まっている。その歴史的な発見は、川を遡ってその川筋に見られた。

かつて石炭を発見した松浦武四郎やライマンといった探検家たちの歴史的発見をトレースするように、川からの視点で地域を見せることも、その地域の「場の記憶」を学ぶ中での貴重な体験となろう。

歴史的痕跡を視覚化し資源化する

空知産炭地域に残る炭鉱遺産は、現存して残されているものから既に撤去されかろうじて痕跡が残るものまで、現状は様々である。

残されているものでも、草や木々に隠れその存在が分からないものも少なくない。

このような目に見えないものを視覚化して資源化することも、「場の記憶」を伝えていくためには重要となる。

ランドマークを望む景観軸を強化する

空知産炭地域で見られるズリ山や立坑などは、地域のランドマーク的景観要素として捉えることができる。

これらを望む視点場や、そこから望む景観軸の環境を、整え強化することによって、地域におけるランドマークとしての存在を強調し、地域の景観イメージを強化することにつながる。

長い期間地域のイメージを強力に発信できる空間を整える

特徴的なインパクトのある景観は、その地域のイメージを強力にする。

空知産炭地域固有の《炭鉱の記憶》を生かし、地域ならではの特徴的な空間をつくり出し、発信し続けることは、地域イメージを確立する上で重要となる。

遠望から見、近傍から仰ぎ見る、システムを見せる…など重層的に見せる

一つの視対象物を見せるにあたって、遠望から、中景から、近傍から、システムを見せるなど、それぞれの視点に応じた演出や環境を整え段階的、重層的に見せる。

これによって、地域の景観イメージを特徴づけるとともに、「場の記憶」を効果的に伝えることが可能となる。

アートの表現を取り入れ、心・息遣いなど見えないものを形にする

空知産炭地域には、現在も「場の記憶」を伝える景観構成要素としての炭鉱遺産が現存している。かつてそこには、日本の経済発展を支えてきた炭鉱に生きる人々の暮らしや生業があった。

その人々の心や息遣いなど目に見えないものをアートによる表現によって、可視化し景観資源化することによって、「場の記憶」をより鮮明にすることが可能となる。

記憶を伝える写真を活用しアーカイブサインをランドスケープの場に設ける

かつてそこはどうであったのか、どのようなシステムの中でこういった役割、機能を担っていたのかといった、来訪者の知的好奇心を満たし、その場の記憶を後世に伝えていくためのアーカイブサインを、「場の記憶」を有するコンテンツごとに配置する必要がある。

それらは、空知産炭地域のイメージを強力に発信するアイテムとなることから、洗練されたデザインにより、地域アイデンティティを持って産炭地域全域で統一する必要があるとともに、設置する位置についてもランドスケープの観点から緻密に計画する必要がある。

また、現存する施設においても、残されているうちにその記憶を残しておくことが必要である。

時の止まった現実空間を地域らしい生活景としてみせる

空知産炭地域には、炭鉱の時代からあたかも時を止めてしまったかのような暮らしの風景が残されている。長屋の炭鉱住宅を住まいとして、庭先で畑を作り、軒先には畑でとれた大根を干し、共同浴場では地域のコミュニティを育むといった、タイムスリップしてしまったような暮らしの息遣いを感じることができる。

このような地域の生活景をありのまま見せることができるのも、空知産炭地域ならではのである。

■資源の活用

地域のオリジナル料理や地場の食材を提供する

来訪者の多くは、訪れる地域ならではの食を楽しみにしている。

来訪者の食に対する大きな期待に応えられる空知産炭地域ならではの、オリジナル料理や地場の食材を使ったメニューを提供することは、その来訪者がリピーターとなることの十分なきっかけとなる。

深く知りたくなる来訪者の関心をそそる資料展示を工夫する

炭鉱を学習し出すと、その歴史やシステムの面白さからどんどんと深みにはまり、もっと炭鉱を知りたいという気持ちになってくる人は少なくない。

歴史やシステムの面白さに関心を持ち、知的好奇心を満たすことのできる資料展示の工夫を図ることも、炭鉱ファンを増やすきっかけとなる。

子供から大人まで楽しく学習できる拠点形成する

身の回りのエネルギー源が石油や電気の現代では、子供たちに限らず、石炭を見聞きしたことがあっても燃えている姿を見たことがないという人は多くなっている。

石炭が燃えるという単純な体験から、それらをエネルギーとして活用する体験など、子供から大人まで楽しく学習できる拠点の形成も産炭地域ならではのサービスとなろう。

記憶の最も濃密度な場を地域のメイン資源として活用する

動態保存された資源など、《炭鉱の記憶》が色濃く残る場を活用しない手はない。

地域イメージの確立に向けても、それらを地域のメイン資源として有効に活用していくことは重要である。

空き家の炭鉱住宅を活用し、非日常的な空間体験を提供する

かつて炭鉱マンとその家族たちがひしめき合っていた炭鉱住宅も、今ではただの空き家となっているものは数多くある。

このような空き家の炭鉱住宅を、宿泊施設や休憩拠点、体験学習拠点や工房など、新たな機能としてその有効活用を図り、地域外の人に炭鉱の暮らしの疑似体験といった非日常的な空間体験を提供できるのも、空知産炭地域ならではの体験である。

地域に離合集散の活動拠点を整える

知らない土地を訪れたとき、その地の情報を得ることができなければ、人はその地をどの様に回って良いか分からず、素通りしてしまうだろう。

回遊を促すには、その地域に情報を得ることができる離合集散の活動拠点があることは重要である。この拠点は、地域外の人にとって分かりやすく立ち寄りやすい場所にあることが理想である。

6-5 具体化の手順

今回の戦略策定にあたっては、地域政策の観点から望ましい地域の全体構造を構想する一方で、その具体化を担う地域単位の取り組みを担保する観点から、広域景観を切り口に検討を進めてきました。

景観は、地域の現状だけでなく、過去からの経緯や蓄積、未来への方向性や意志を、具体的に示すものです。また景観は、視覚だけではなく、聴覚・嗅覚・触覚・味覚という五感も対象とする総合的なものです。

新しい現実を創造することが、この戦略の流れに多くの人が注目し参加する原動力となります。その際、具体性・総合性のある景観からのアプローチは、具体化の先導役として期待されます。

そこで、特に景観の観点から見た、具体化の手順と留意点について、以下に詳述します。

■広域景観形成につながる「場の記憶」「炭鉱の記憶」の活用

空知産炭地域固有の景観特性を検討する際の基軸

何もない所から新しいものを作るのは、とても難しいことです。空知産炭地域には、炭鉱遺産という歴史的・地質学的・文化的資源があります。

これを活用するためには、まず、過去の経緯や責任を追及するのではなく、問題を共有することを念頭に置いて、

- 「負の遺産」というイメージの生成と影響を冷静に見極めた上で、炭鉱施設跡などを「負の遺産」の棄地として捉えるのではなく

- ものづくりの伝統を育んだ文化遺産として見直すなど、問題の本質に迫る処方

- 地域住民のみならず来訪者を含めて、誰もが自然に感じとり考える場として、保全・形成することを、空知産炭地域固有の景観特性を検討する際の基軸に据えます。

炭鉱遺産が持つ意味のオリジンと多様化

炭鉱が閉山し一世代が過ぎ去ろうとしている今、炭鉱施設跡をみても、多くの人は、形状から受ける印象にとどまり、意味が分化し、解体しつつあると言えます。

「場の記憶」を通じたまちづくりには、本質的な意味の保全と同時に、新たに付加される発見と更新に留意しつつ、記憶を積み重ねることが求められます。

それゆえに、空知産炭地域の文脈を読み解いて、今後の地域づくりを展開するには、これまでの文脈＝地域の固有性、地域のあり様、個性を自覚することが不可欠です。

地域の個性が分かっているなければ、変化を適正に受け止めて馴染ませていくことはできません。

空知産炭地域の歴史を見ると、そこには、人間と自然とが、時に睦みあい、時ににらみ合い、その果てに何とか折り合いをつけてきました。人間の痕跡が刻まれた景観、それはそのまま地域の歴史の歩みを表しています。

今、ここで論議している景観は、決して過去の遺物にしがみつ়く歴史ではありません。

■地域連携による広域景観づくりの考え方

基本的な考え方

【物語が必要】

物語性に富む風景は、そこに生きたストーリーが付与されることで輝きを増します。地域内の人が、自分たちのまちに誇りと愛着を持ち、自信を持って自分達のまちを語れる物語づくりが必要です。

【産炭地域共有の地域アイデンティティを物語へ】

褶曲・断層地形に沿って作られた谷間の景観資源、他の地域にはみられない炭鉱というオリジンを持ち、栄枯盛衰を描いた濃密な歴史とそれを物語る炭鉱遺産など、地形と歴史に深く刻まれた景観を有するという空知産炭地域独自の大きな特徴を持っています。

これらを、空知産炭地域共有の地域アイデンティティとして最大限に活かし、物語をつくりだす必要があります。

今あるまちを、そのままに保存するのではなく、まちを構成する要素を読み取り、歴史的な経緯に沿ってそれらを強化し、まちの魅力にさらに磨きをかけ、「普通のまち」を「特別なまち」へと転移するのです。

物語づくりの第一歩―「普通のまち」を「特別なまち」へと転移する方法

「普通のまち」から「特別なまち」へと転移する方法として、次の三つの手法を用います。

- ① 景観の総浚えから特別なものを見出す
- ② 現在の都市の構造から景観上重要なところを掘り出す
- ③ 都市空間の意図を読む

これら三つの視点でまちを見直すことが、物語づくりの第一歩となります。

- ① 景観の総浚えから特別なものを見出す【モデル検討地域：赤平、三笠（幌内）】

景観の魅力は、単に不可視なのではなく気づいていないだけで、詳細に検討すれば、価値ある景観が見えてくる場合も少なくない。

タウンウォッチングや百景選り、瞬間情景、祭礼や行事などに現れる祝祭的な空間のしつらえや歴史上意味ある空間など、個々の場所性を評価する視点は多様である。

その手がかりは、山や谷、川、高台、道路、シンボル、所縁、建築様式など様々な場所に隠れている。

② 現在の都市の構造から景観上重要なところを掘り出す[モデル検討地域：赤平、三笠（幌内）]

駅周辺の通勤帰宅の主要経路、目抜き通り、歴史的な街道、社寺の参道空間など、普段何気なく行き来している普通の空間に過ぎない場所が、晴れの場面で祝祭の場となることもある。

日常的な空間として当たり前であるがゆえに気づかないことも多く、ものの見方を少し変えてみることや、時には外部からの目でまちを見てもらうといったことも必要である。

③ 都市空間の意図を読む[モデル検討地域：赤平、三笠（唐松・弥生・幾春別）]

まちの立地やその後の変遷を振り返り、その変化のありようを検討することを通じて得られる知見を基盤にまちを見直すという手法である。

地形と歴史は、現在のまちを形づくる二大要素である。地形と歴史の両方の視点から、いかにしてまちができてきたかを知ることは、まちの構造を見定めることにつながる。

「意図」は、間違いなく地形や歴史、そこでの生活風景と密接にかかわり合っている。

先人がまちを形成するのに見据えたであろう「構想力」というものを解読することによって、都市の各空間が今後どのような役割を果たすべきなのかを展望することが可能となる。

このように、都市を解読するプロセスの中で、都市の今日の姿自身を物語化することができ、物語化して初めて、動的なまちづくりが生まれるのです。

地域連携による広域景観づくり

ケーススタディを行った赤平市や三笠市（幌内地区、唐松・弥生・幾春別地区）を、空知産炭地域の先導的モデルとして景観づくりに取り組んでいくことを提案します。

これら拠点での先導的な取り組みが、他の地域へとネットワークし、広域的な景観づくりへと結実します。

○連携した取組が必要

個々の地域がばらばらに景観づくりを行うのでは、そのイメージ発進力は弱くなってしまう。

各地域が広域的に連携し補完、役割分担しながら相乗効果をもたらすことによって地域全体の魅力を高め、より強力な発進力を持った空知産炭地域全体のブランドイメージを形成していく必要がある。

○近隣からの小さな連携から取り組む

連携的な取り組みを実践する際には、空知産炭地域は各地域が谷によって隔てられ、谷のすそ野の沢沿いにそれぞれが独立して集落を形成しているため、谷を越えて連携するイメージを抱きづらいのが現状である。

このため、広域連携の手順としては、まずテーマを共有して取り組める近隣の地域同士が一つのエリアとして連携することから始める必要がある。

エリアの組み方は、石炭の発見の歴史的経緯を共有できる地域エリアや、沢ごとの地形的つながりにより連携できる地域エリア、地下の炭鉱システムによりつながりを持った地域エリア、あるいはアートや

食など各地域での取組の現状や可能性から共有のテーマを持って連携できる地域エリアなど、幾つかのエリアを形成し取り組むことが考えられる。

○各エリアの取組から広域的な取組へ発展させるプラットフォーム

個々のエリア内において、それぞれの地域が個々に有する地域資源、景観資源を有効に活用し、役割分担と連携を明確にした戦略的な拠点形成を行い、エリアとしての魅力を高めた取組を行うことが必要である。

そして、各エリアにおける取組が熟成してきたところで、エリア間連携による取組へとステップアップし、空知産炭地域全体の取組へと発展させるプラットフォームを立ち上げる。

産炭地域の統一イメージの発信

各地域、各エリアにおける連携した取り組みを推し進める一方で、空知産炭地域全体として取り組むことが必要なものもあります。

それは、空知産炭地域が全体として統一したイメージを発信するために必要な仕掛けであるとともに、外に対して空知産炭地域のイメージを印象づけるほか、地域内の連携意識の醸成や取組意欲を高揚させるといった効果を有するものです。

○産炭地域へと誘導するアイキャッチの仕掛け

その仕掛けの一つは、広域幹線道路から産炭地域へと誘導する結節点でのイメージ発信である。

産炭地域へのアクセスは、空知地域を縦貫する広域交通網の国道 12 号線より、石狩川の各支流に沿って櫛の歯状に入り込んだ国道や道道のアクセス路に乗り産炭地域へと入っていく。あるいは、高速道路を利用しインターチェンジ出口からアクセス路に乗り産炭地域へと向かうルートが主流と考えられる。

この国道 12 号線や高速道路から産炭地域へと向かうアクセス路の結節点において、産炭地域へと誘導するアイキャッチの仕掛けとしての案内サインが必要であるが、各サインがばらばらのイメージを発信しないよう、統一したデザインを広域で連携し計画することが必要である。

「産学官民」の連携で取り組む

広域連携は、行政の枠にとらわれるのではなく、企業や大学との連携を深めるなど、新たな視点を持って取り組むことが必要です。

空知産炭地域での市民活動は、すでに全力を出し切っている状況にあり、外部の応援や新たな視点を持った仲間を必要としています。

この戦略を策定するにあたっては、これまで多くの大学の専門家を交え検討してきた経緯があります。今後は、これまでの検討の成果を活かし、より実践的な取り組みを行う必要があります。

産業界はその活動を通じて利潤を追求し、大学は真理の探究と学生の教育を目的とし、行政は地域産業の振興と活性化を推進し、市民は暮らしの安定と充実を達成しようとし、各々の立場・視点・アプローチは異なるものがあります。しかし、共通の認識を抱き「産学官民」の連携によって取り組む必要があります。

地域連携のきっかけと活動の場づくり

ここ 10 年、活発に展開されてきた《炭鉱の記憶》を活用した市民活動は、「やるべきこと」「やりたいこと」についての強い思いを持ちながらも、人材や活動財源不足などの問題を抱えています。

この状況を打開し次なるステップへと踏み出すためには、「キッカケ」と「場」づくりが必要であり、次のステップで取り組むことを検討します。

① 小地域のエリアプラットフォームを立ち上げる

景観をテーマにしながら、地域間連携や、地域の農・商・工連携による地域の活性化を見据えた小地域のエリアプラットフォームを立ち上げる。

きっかけの声かけと検討の場は、空知支庁が地域の活動団体や市町等の間のパイプ役となって仕掛け、支庁内の横断的応援体制を整える。

スタートアップのための既存施策の柔軟な運用の可能性や、国の「地方の元気再生事業」などの公的助成制度の導入を検討する。

② 民間の自主的な運営にバトンタッチ

「そらち温泉ネットワーク協議会」の事例にみるように、可能性と方向性が見えた時点で、民間の自主的な運営にバトンタッチする。

■ 景観を契機とした地域再生の実践

空知産炭地域の景観の見せ方

【地域を学び、ゆっくりと見ることから始める一導線と動線づくり】

空知産炭地域の景観は、意識せずに走り抜けてしまうと、その魅力は伝わってきません。足を止めじっくりと見て感じるのが、この地域にふさわしい景観の楽しみ方です。

地域外からの来訪者に足を止めてもらうには、まず地域内の人が、目の前にある歴史の痕跡から、先人の知恵を学ぶことが必要です。そして、それらを地域外からの来訪者に伝えるのです。

そのためには、まず興味を持ち空知産炭地域に足を向けさせる「導線」づくりが必要となります。

そのためのツールとして、地域の景観イメージの強化やランドマークの存在を強調する軸となる景観づくり、拠点までの誘導を促す誘導サインの設置、テーマを持ったガイドブックや興味をそそられる総合案内マップの作成などが考えられます。

次に、一度惹きつけた来訪者に地域の良さを伝える仕組みとして、地域住民によるガイドや案内板の設置など、知的好奇心を満たすことの出来る仕組みが必要となります。

また、これらの仕組みを活かして、空知産炭地域に何があり、どんな営みがあったのか、思いを馳せながら感じてもらうための動線づくりの仕掛けとして、ゆっくりと歩いて・見て・感じてもらう Park（景観公園と駐車場の両義）& Walking を図る必要があります。

物語性に富む風景は、そこに生きたストーリーが付与されることで輝きを増すことから、ストーリー展開に即した舞台環境を整えることが求められます。

それだけでは多くの人を呼び込めないことから、地域の食の楽しみ、農業体験や自然体験の楽しみ、アートのエクシビションや地域のお祭りなどのイベントを絡ませ、訪れる人にとって、より魅力的な滞在環境となるようにする必要があります。

空知産炭地域における取り組みのきっかけ

【何からはじめようー突破口としての取り組み】

地域でまずは始めることは、地域資源・景観資源の確認を行い、地域のビジョンを描くことです。

地域ブランド化を促す景観イメージの活用方策として、また地域内外に発信する可能性と実現化のための課題解決方策として、次の3つを突破口にした取り組みを提案します。

- ① 景観づくり
- ② イベント
- ③ フットパス

これら3つの取り組みを突破口に、炭鉱遺産の保全・活用や、地域の景観形成をすすめ、少しずつ広域的な連携による取り組みへと展開していくことが望まれます。

赤平・三笠でのケーススタディが示すように、誰が何を行うかの担い手の検討を行い、それを行う上での障害や問題・課題についての検討が必要です。

① 景観づくりー舞台背景としての地形と歴史に深く刻まれた景観の表出

地域 Identity としての景観イメージづくり

景観資源として大切に扱っている姿勢を示す

イベント、フットパスづくりと連携した景観イメージの発信

炭鉱地域の住環境コミュニティの再生景観

② イベントの開催をきっかけとして

炭鉱都市としての歴史的文脈を活かしたテーマ設定を行う

何が大切なのかを常に意識する

連携して取り組み持続可能な活動としていく

③ フットパスを活用したきっかけづくり

歩くことから始める

様々な取り組みの動機となるフットパスの可能性

本業と関係のある人を巻き込む

地域で生活している人を巻き込む

資 料

「元気そらち！産炭地域活性化促進事業」について

1. 事業の目的

空知産炭地域においては、炭鉱閉山に伴う国、道、各市町による各種振興策が講じられ、企業誘致や炭鉱遺産を活用した民間活動団体の取組の醸成など一定の成果が得られましたが、空知産炭地域市町の財政状況の悪化や地域の経済的・社会的な課題が未だ解決されず、かつてないほどに厳しい状況となっています。

このため、空知支庁では、2007（平成 19）年度から、空知産炭地域の民間主導による自立化を促進するため、「元気そらち！産炭地域活性化促進事業」に着手し、「空知産炭地域活性化戦略会議」などの開催を通じて、民間主導の自立的・継続的な地域活性化運動の手法と実践についての活性化策をとりまとめ提言しようとするものです。

2. 事業の進め方

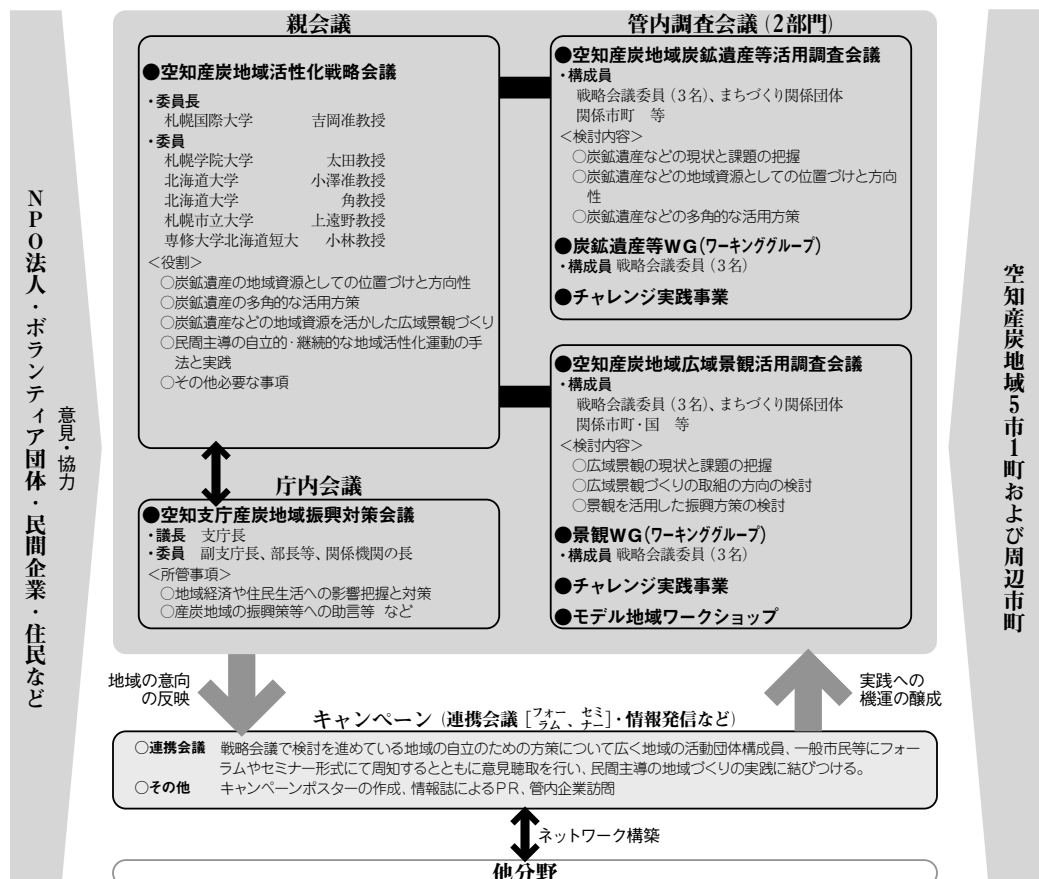
① 「空知産炭地域活性化戦略会議」における検討

学識経験者 6 名で構成される「空知産炭地域活性化戦略会議」を設置し、その下に関係市町職員や地域づくり団体役員を構成員とする 2 つの調査会議（炭鉱遺産の多角的な活用方策などの検討を行なう「空知産炭地域炭鉱遺産等活用調査会議」と炭鉱遺産などの地域資源を活かした広域景観づくりなどについて検討を行なう「空知産炭地域広域景観調査会議」とワーキンググループ（「WG」）を設置し、検討を進めました。

また、2008（平成 20）年度からは、活性化策の検証のため具体的な取組を行う「チャレンジ実践事業」や、民間主導の円滑な取組が図られるよう、地域住民との「モデル地域ワークショップ」を実施しました。

② キャンペーンの実施

空知産炭地域市町のイメージアップと交流人口の拡大を図るため、炭鉱遺産などの地域資源の魅力をポスター・マップでの紹介、新聞・写真雑誌への広告掲載のほか、工業団地を紹介するパンフレットを作成しました。また「空知産炭地域活性化戦略会議」の検討状況を広く周知し、地域づくりの実践に結びつくよう促すため連携会議を開催しました。



< 参考 > これまでの地域政策推進事業（支庁独自事業）の取り組み

空知支庁では、1998（平成 10）年度に産炭地域の新しいまちづくりに向け、**そらち・炭鉱の記憶発掘事業**を立案、空知管内の基幹産業として地域を支えた石炭産業が有した炭鉱関連施設を炭鉱遺産として位置づけ、これらの現状を調査し、地域住民とともに炭鉱遺産を活用した地域づくりの取り組みを始めました。1999（平成 11）年度からは、**そらち・炭鉱の記憶推進事業**を実施し、炭鉱遺産を活用した地域づくりに関する**そらち・炭鉱の記憶コミュニティミュージアム基本構想**を取りまとめました。2001（平成 13）年度からは、**そらち・炭鉱のまちからの挑戦事業**を実施し、地域づくり団体の主体的・広域的な活動展開への支援、あるいはファンクラブの設立による支援基盤の拡大に取り組んできました。

2004（平成 16）年度から 2005（平成 17）年度にかけては、**空知産業遺産活用自立化促進事業**を実施し、従来の取り組みを基礎とし、炭鉱遺産を含めた産業遺産の活用による地域づくりを自立的・継続的な住民活動とするため、「自立化促進検討会」や「産業遺産活用地域連携実践事業」などの取り組みを進めました。

空知産炭地域活性化戦略会議設置要綱

(趣旨)

第1条 この要綱は、空知産炭地域の自立化、活性化に向け、より高い見地から活性化策の検討を行い、スピード感をもって実践に結びつけることを目的とした、空知産炭地域活性化戦略会議（以下、「戦略会議」という。）の設置及びその運営に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 戦略会議は、次の事項について検討を行う。

- (1) 炭鉱遺産の地域資源としての位置づけと方向性について
- (2) 炭鉱遺産の多角的な活用方策について
- (3) 炭鉱遺産などの地域資源を活かした広域景観づくりについて
- (4) 民間主導の自立的・継続的な地域活性化運動の手法と実践について
- (5) その他、空知産炭地域の活性化・自立化に必要な事項について

(構成)

第3条 戦略会議は、次に掲げる者のうちから、空知支庁長が委嘱する者（以下「委員」という。）をもって構成する。

- (1) 学識経験者
 - (2) その他、戦略会議の目的を達成するために適当と認める者
- 2 委員の任期は、委嘱の日から平成 21 年 3 月 31 日までとする。
 - 3 委員が任期期間中に欠けた場合における補充された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第4条 戦略会議に、委員長 1 名を置く。

- 2 委員長は、委員の互選により決定する。
- 3 委員長は、会務を総理し、戦略会議を代表する。
- 4 委員長に事故あるときは、代理を委員の互選により決定し、その職務を代行する。

(戦略会議の開催)

第5条 戦略会議は、委員長が招集し、主宰する。

- 2 委員長は必要に応じ、戦略会議に構成員以外の関係者の出席を求めることができる。

(調査会議の設置)

第6条 戦略会議の下に次の調査会議を設置する。

- (1) 空知産炭地域炭鉱遺産等活用調査会議
 - (2) 空知産炭地域広域景観調査会議
- 2 各調査会議に、戦略会議委員の中から互選により、座長 1 名を置く。
 - 3 各調査会議は、座長が指名した者で構成する。

(雑則)

第7条 戦略会議に関する庶務は、空知支庁地域振興部地域政策課において処理する。

- 2 この要綱に定めるもののほか、戦略会議の運営に関して必要な事項は、委員長が戦略会議に諮って定めるものとする。

附則

この要綱は、平成 19 年 4 月 18 日から施行する。

この要綱は、平成 20 年 4 月 8 日から施行する。

空知産炭地域活性化戦略会議名簿

	氏名	所属・職名	調査会議
委員	太田 清澄	札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科教授	炭鉱遺産等
委員	小澤 丈夫	北海道大学大学院工学研究科准教授	景観
委員	角 幸博	北海道大学大学院工学研究科教授	炭鉱遺産等
委員	上遠野 敏	札幌市立大学デザイン学部教授	景観
委員	小林 昭裕	専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科教授	景観（座長）
委員長	吉岡 宏高	札幌国際大学観光学部観光学科准教授	炭鉱遺産等（座長）

空知産炭地域炭鉱遺産等活用調査会議開催要領

(目的)

第1条 空知産炭地域活性化戦略会議設置要綱第6条に基づき、炭鉱遺産の地域資源としての位置づけや多角的な活用方策などについて調査・検討を行うため、空知産炭地域炭鉱遺産等活用調査会議（以下、「炭鉱遺産等調査会議」という。）を開催する。

(業務)

第2条 炭鉱遺産等調査会議は、次の事項を所掌する。

- (1) 炭鉱遺産などの現状と課題の把握について
- (2) 炭鉱遺産などの地域資源としての位置づけと方向性について
- (3) 炭鉱遺産などの多角的な活用方策について
- (4) その他必要な事項について

(構成)

第3条 炭鉱遺産等調査会議は、別表に掲げるもので構成する。

- 2 座長は、必要に応じ、炭鉱遺産等調査会議に構成員以外の出席を求めることができる。

(会議)

第4条 炭鉱遺産等調査会議は、座長が必要と認めた場合に招集し、これを主宰する。

- 2 炭鉱遺産等調査会議に空知産炭地域活性化戦略会議委員から構成されるワーキンググループ（以下「炭鉱遺産等WG」という。）を設置する。
- 3 座長は、必要に応じ、炭鉱遺産等WGを開催することができる。
- 4 座長は、必要に応じ、炭鉱遺産等WGに炭鉱遺産等調査会議構成員の出席を求めることができる。

(雑則)

第6条 炭鉱遺産等調査会議の庶務は、空知支庁地域振興部地域政策課及び産業振興部商工労働観光課において処理する。

- 2 この要領に定めるもののほか、炭鉱遺産等調査会議の運営に関し必要な事項は、座長が炭鉱遺産等調査会議に諮って定めるものとする。

(附則)

この要領は、平成19年4月18日から施行する。

この要領は、平成19年5月28日から施行する。

空知産炭地域炭鉱遺産等活用調査会議委員名簿

所属	氏名	備考
札幌国際大学観光学部観光学科准教授	吉岡 宏高	戦略会議委員長、調査会議座長
北海道大学大学院工学研究科教授	角 幸博	戦略会議委員
札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科教授	太田 清澄	〃
NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団副理事長	青木 隆夫	まちづくり
赤平コミュニティガイドクラブ「TANtan」代表	三上 秀雄	〃
みかさ・炭鉱の記憶再生塾事務局長	伊佐治 知子	〃
歌志内市郷土館支援組織「ゆめつむぎ通信員」会長	三戸 満雄	〃
夕張市地域再生推進室長	畑山 栄介	行政
岩見沢市企画財政部企画室長	新林 裕幸	〃
美唄市総務部地域経営室長	伊藤 敦史	〃
芦別市総務部企画課長	稲場 厚一	〃
赤平市企画財政課長	伊藤 寿雄	〃
三笠市企画経済部企画振興課長	須河 恵介	〃
滝川市総務部企画課長	館 敏弘	〃
歌志内市産業建設課主幹	佐藤 守	〃
上砂川町企画産業課長	林 智明	〃

空知産炭地域広域景観活用調査会議開催要領

(目的)

第1条 空知産炭地域活性化戦略会議設置要綱第6条に基づき、炭鉱遺産などの地域資源を活かした広域景観づくりなどについて調査・検討を行うため、空知産炭地域広域景観調査会議(以下、「景観調査会議」という。)を開催する。

(業務)

第2条 景観調査会議は、次の事項を所掌する。

- (1) 空知産炭地域における広域景観の現状と課題の把握について
- (2) 空知産炭地域における広域景観づくりの取組の方向について
- (3) 景観を活用した空知産炭地域の振興方策について
- (4) その他必要な事項について

(構成)

第3条 景観調査会議は、別表に掲げるもので構成する。

- 2 座長は、必要に応じ、景観調査会議に構成員以外の出席を求めることができる。

(会議)

第4条 景観調査会議は、座長が必要と認めた場合に招集し、これを主宰する。

- 2 景観調査会議に空知産炭地域活性化戦略会議委員から構成されるワーキンググループ(以下「景観WG」という。)を設置する。
- 3 座長は、必要に応じ、景観WGを開催することができる。
- 4 座長は、必要に応じ、景観WGに景観調査会議構成員の出席を求めることができる。

(雑則)

第6条 景観調査会議の庶務は、空知支庁産業振興部建設指導課において処理する。

- 2 この要領に定めるもののほか、景観調査会議の運営に関し必要な事項は、座長が景観調査会議に諮って定めるものとする。

(附則)

この要領は、平成19年4月18日から施行する。

この要領は、平成19年5月28日から施行する。

空知産炭地域広域景観活用調査会議委員名簿

所属	氏名	備考
専修大学北海道短期大学みどりの総合学科教授	小林 昭裕	戦略会議委員、調査会議座長
北海道大学大学院工学研究科准教授	小澤 丈夫	戦略会議委員
札幌市立大学デザイン学部教授	上遠野 敏	戦略会議委員
NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団副理事長	植村 真美	まちづくり団体等
NPO 法人アルテピアッツァびい	伊東 奈美	〃
NPO 法人三笠森水遊学舎理事長	高篠 和憲	〃
NPO 法人ゆうばり観光協会理事長	高村 健次	〃
(財)いわみざわ地域交流センター専務理事	野村 悟	〃
夕張市建設課長	細川 孝司	行政(管内市町)
岩見沢市建設部都市計画課長	佐藤 克弘	〃
美唄市都市整備部都市計画課長	山田 富昭	〃
芦別市建設部都市建設課長	白間 和義	〃
赤平市建設課長	熊谷 敦	〃
三笠市企画経済部企画振興課長	須河 恵介	〃
滝川市総務部企画課長	館 敏弘	〃
砂川市総務部広報広聴課長	湯浅 克己	〃
歌志内市産業建設課長	柴田 一孔	〃
奈井江町まちづくり課長	碓井 直樹	〃
上砂川町企画産業課長	林 智明	〃
北海道開発局事業振興部都市住宅課課長補佐	小澤 雅幸	行政(国・道)
札幌開発建設部地域振興対策室長	渡辺 幸宏	〃
石狩川開発建設部地域振興対策室長	羽山 英人	〃
北海道建設部まちづくり局都市計画課主幹	友原 政彦	〃
(株)シー・アイ・エス計画研究所	濱田 暁生	

「元気そらち!産炭地域活性化促進事業」実施経過

月日	戦略 会議	調査会議 炭鉱 景観	ワーキング 炭鉱 景観	モデル地域WS 三笠 赤平	キャンペーン、チャレンジ実践事業、PR事業など
■ 2007（平成 19）年度					
5月23日	第1回				
5月30日			第1回	第1回	
6月09日	現地調査				
6月15日			第2回	第2回	
6月20日					
6月22日	現地調査		第3回	第3回	
7月04日			第4回	第4回	
7月11日			第5回		
7月24日					
8月09日					
9月03日		第1回			
9月10日					
9月26日	第2回				
9月下旬～					
10月06-08日					ポスター、チラシ、ガイドマップの配布（道の駅、イベントなど）
10月07日					「空知産炭地域へ行こう!」の実施（サッポロファクトリー）
10月21日					北海道新聞でのPR広告の掲載
10月31日			第6回	第5回	「元気そらち!産炭地域炭鉱遺産等活用連携会議」の開催
12月04日		第2回			
12月06日			第7回	第6回	
12月26日		第1回			
1月25日			第8回	第7回	
2月04日		第2回		第8回	
2月12日					
2月15日					
2月29日					
3月05日		第3回			
3月14日	第3回				
3月22日					「三池ー終わらない炭鉱の物語」上映会の開催（三笠市）
3月26日					「産業観光セミナー in 空知」の開催（岩見沢市）
■ 2008（平成 20）年度					
4月15日			第1回		
4月22日	第1回				
5月08日			第2回	第1回	
5月13日			第3回		
5月27日		第1回			
6月10日				第2回	
6月26日					
7月06日			第4回	第3回	タウンウォッチング（夕張市）
7月08日			第5回		
7月22日					
7月29日				第1回	
7月30日					第1回
8月08日		第1回	第6回		
8月11日					
9月10日				第2回	第2回
9月12日			第7回	第4回	
9月16日			第8回		
9月26日					
10月18日					タウンウォッチング（三笠市）
10月19日			第9回		炭鉱住宅オープンハウス（夕張市）
10月20日				第5回	
11月05日			第10回		
11月11日					第3回
11月17日			第11回		
12月19日				第3回	
12月01日					第4回
12月03日					
12月09日				第4回	
12月中旬			第12回	第6回	産炭地域企業誘致・雇用促進パンフレット
12月22日					
1月16日			第13回	第7回	炭鉱の記憶探検モニターツアー（歌志内市、赤平市）
1月19日		第2回			
1月30日		第2回	第14回	第8回	
2月18日					
2月下旬					PRポスター・チラシ配布
3月12日	第2回				
3月19日					アサヒカメラ広告掲載
3月下旬					そらち炭鉱のまちガイドマップ・チラシ配布
3月28日					『炭鉱の記憶』で地域づくりフォーラム（岩見沢市）

凡例：資源の評価 ●>○>△
太字は特徴的なもの

地域資源の総括表 ①

	V ↓	A6 夕張上流部	A7 南部・清水沢	D1 栗山	B2 美流渡・万字	A1 岩見沢
Q →						
立坑			△北炭清水沢			
ズリ山		●北炭夕張(高松) △北炭夕張(福住)	●北炭清水沢 ●北炭鹿島 ●北炭 ○三菱大夕張		●万字[+階段] ○北星美流渡(東幌) △北星美流渡(上美流渡)	
生産施設		○坑口(天龍など多数) △輸車路など輸送施設	●北炭清水沢発電所 ●北炭清水沢ダム ○北炭清水沢鉱務所		△北炭送電線鉄塔	
炭住・市街地		○木造職員集宅(平和)	●改良住宅(宮前・清陵) ●木造職員住宅(南部) ○清水沢市街地		●木造職員住宅(奈良他) ○美流渡市街地 ○美流渡ジャンプ台 △万字市街地	△駅周辺飲食店街
鉄 道		○夕張鉄道(サイクリングR) ○鹿ノ谷駅 ○SL館	●大夕張鉄道保存車両 ○大夕張鉄道跡(放置) ○森林鉄道跡(三弦橋) ○清水沢駅		○志文駅 △上志文駅 △朝日駅 △鉄道跡(転用・放置) △鉄道資料室	●岩見沢駅(踏線橋など) ○操車場・機関区跡
歴史的建造物		●旧北炭鹿ノ谷倶楽部 ○夕張協会 △夕張神社	○大夕張営林署	○酒造蔵		●レールセンター
文化教育施設		●石炭博物館・模擬坑道 ●炭鉱生活館				
ア ー ト		○夕張市美術館 ○畠山哲雄 ○炭鉱写真 ○石炭博物館収蔵作品		△小林酒造収蔵品	●アートビレッジ	○教育大学岩見沢校
産業的自然		△炭住跡	●ダム湖 ●地質擾乱(清水沢ダム)		○万字鉱周辺	△操車場跡
市民活動		△三番方倶楽部 △JC	●大夕張鉄道保存会 △シュエバロ塾		△万字地区(植樹)	△他のNPO △JC
地形・自然		○シュエバロ湖 ○滝ノ上公園				
産 業						○レールセンター ○岩見沢運転所
アクティビティ		●マウントレースイスキー場		●北の錦(工場見学)	○萩の山市民スキー場	○岩見沢公園/バラ園 ○あやめ公園
食		○シナモンドーナツ ○藤の家、のんき食堂 ○おーぬま	●夕張メロン ○ながいも	○北の錦レストラン ○栗饅頭	○果樹園群 ○リンゴジュース	○宝水ワイナリー ○焼き鳥三船 ○こもろそば
温泉・宿泊		●ホテルレースイ ●ホテルシュエバロ ●ひまわり ○シュエバロの湯		○天然温泉くりやま ○シャトレーゼ	●メープルロッジ ○栗沢温泉 ○錦園	○岩見沢温泉なごみ ○北村温泉 ○ホテルサンブラザ
イベント		●ファンタスティック映画祭 ⑩もみじ祭り				⑦ 彩花まつり ⑨ 百餅まつり

地域資源の総括表 ②

	V ↓	A4 幌 内	A5 唐松・弥生・幾春別	B1 南 美 唄	A3 美 唄 (盤の沢)
Q →					
立 坑		△北炭幌内(布引)	●北炭幌内入気 ●住友奔別 ●北炭幾春別錦		○三菱美唄入気 ○三菱美唄排気
ズリ山		○北炭幌内×4	△幌内立坑ズリ山 △住友奔別[整備済]		
生産施設		●幌内選炭機跡 ●坑口(布引・常磐)	○北炭新幌内坑口選炭施設跡 ●住友奔別選炭機 ●奔別斜坑周辺施設 △弥生斜坑周辺施設	△坑口(水平坑) △ボイラー煙突	△三菱美唄原炭ホッパー △三井美唄原炭ホッパー
炭住・市街地		○幌内市街地 ○改良住宅(幌内・住吉)	△改良住宅(唐松・弥生) ○木造鉱員住宅(弥生) ○幾春別市街地	●木造職員住宅 ●木造鉱員住宅 ●南美唄市街地	△我路市街地 △木造鉱員炭住(東明)
鉄 道		●幌内線(レール) ●鉄道記念館 ●車両展示	○唐松駅 ○森林鉄道(サイクリングR) △萱野駅		○東明駅と保存機関車 ○三菱美唄鉄道跡 (サイクリングR)
歴史的建造物		○幌内変電所 ○伊佐屋ギャラリー △幌内神社 △市街地土蔵	○住友奔別鉱務所 ○住友奔別立坑巻室 △幾春別神社 △市街地土蔵・旧銀行	●福利厚生施設 ●三井美唄鉱業所	○栄小学校 △東明劇場 △沼東中学校 △我路郵便局
文化教育施設		○鉄道記念館 ○アートミュージアム △旧幌内小学校[教育大活動]	○市立博物館 △森林記念館		○美唄市郷土史料館 ○三菱美唄記念館
ア ー ト		○伊佐治コウ ○伊佐屋ギャラリー ○アートミュージアム	△川俣正		●アルテピアッツァ美唄 ●安田侃
産業的自然		●幌内炭鉱景観公園	○住友奔別選炭機周辺 ○北炭幾春別錦立坑周辺		
市民活動			○NPO三笠森水遊学舎	△びびい炭鉱の記憶再生塾	●NPOアルテピアッツァびびい △びびい炭鉱の記憶再生塾
地形・自然			○達布山展望台		○宮島沼 ○東明公園
産 業			○武部建設		●石炭露天掘り ○雪冷房
アクティビティ			○みかさ遊園 ○みかさ鉄道歴史村 ○桂沢国設スキー場		●アルテピアッツァ美唄 ○美唄国設スキー場
食			●山崎ワイナリー ○更科食堂 ○市来知スイカ		○焼き鳥 ○中村の鳥めし ○ハスカップ ○米(雪蔵工房)
温泉・宿泊			○桂沢観光ホテル ○湯の元温泉 ○地域健康増進センター ○花月園		○ピノの湯
イベント			⑤ 梅まつり ⑦ 線路の灯り展 ⑧ 北海盆踊り		⑤ 桜まつり ⑧ 歌舞裸まつり ⑨ 百万風まつり

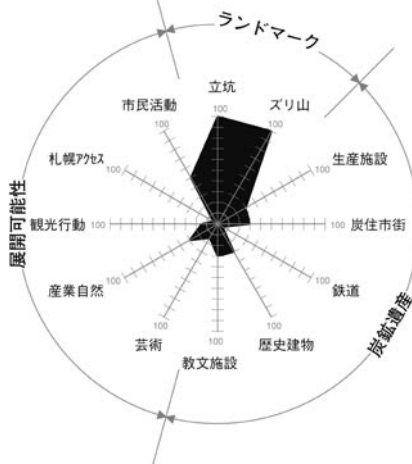
地域資源の総括表 ③

	V ↓	D2 滝川	C3 上砂川	C1 歌志内上流	A2 赤平	C2 国道452北
Q →						
立坑			○三井砂川(JAMIC) △三井砂川排気 △三井砂川第一	○空知 ○住友赤平排気	●住友赤平	△三井芦別
ズリ山			○三井砂川 ○にわか山森林自然公園(奈井江:旧ズリ山)	○空知	●赤間[+階段] ○住友赤平	△三井芦別
生産施設				△住友上歌志内ホッパー跡 △空知鉱務所、火薬庫	○北炭赤間ホッパー ○住友赤平発電所 ○住友赤平坑口浴場	
炭住・市街地			△改良住宅(鶯)	○改良住宅(神威)	○赤平市街地	○西芦別市街地 ○改良住宅(頼城・西芦) ○木造鉱員住宅(上芦別) ○芦別市街地
鉄 道			△上砂川駅	○歌志内線(サイクリングR)	○赤平駅(跨線橋)	○三井芦別鉄道橋梁・車両 ○三井芦別駅・緑泉駅 ○芦別駅(跨線橋) △三菱芦別鉄道跡(放置)
歴史的建造物		○太郎吉蔵	△三井砂川鉱業所跡 標語塔	○空知鉱倶楽部 △市街地土蔵	○山田御殿[蕎麦店]	○頼城小学校 △上芦別福祉施設群
文化教育施設			△炭鉱生活館 △無重力科学館	●ゆめつむぎ	○赤平市炭鉱歴史資料館	●百年記念館
アート		●五十嵐威暢 △滝川市美術 自然史館 △奈井江町文化ホール	○早川紀良 △創夢会(解散)		△2004 インスタレーション △手芸品郵便箱	△「石岡剛の世界」美術館
産業的自然					●赤間～赤平選炭機周辺	○一坑周辺 ○二坑選炭機周辺 △三段滝(地層擾乱)
市民活動		○NPOアート チャレンジ滝川	△創夢会	●ゆめつむぎ通信員	●TANTAN ○炭鉱資料収集保存会 △JC	△JC
地形・自然		○丸加高原 ○砂川オアシスパーク		○かもい岳自然公園		○三段滝
産 業			●ソメスサドル(砂川)	●石炭露天掘り	○いたがき ○植松電機	○北日本精機
アクティビティ			○上砂川岳日本庭園 ●北海道子どもの国(砂川)	○かもい岳スキー場		○カナディアンワールド公園 ○国設芦別スキー場
食		●ジンギスカン ●スイーツ(砂川)		○歌志内太陽ファーム ○なんこ	○ガンガン鍋 ○塊炭鍋	○ガタタン
温泉・宿泊			○パンケの湯 ○北の湯(奈井江)	○チロルの湯	○エルム高原温泉	●スターライトホテル ○芦別温泉 ○北の京芦別
イベント		⑥ 菜の花まつり		② なまはげ祭り	④ らんフェスタ ⑦ 火まつり	⑧ 健夏まつり ⑧ キャンドルアート ⑪ 芦別映画学校

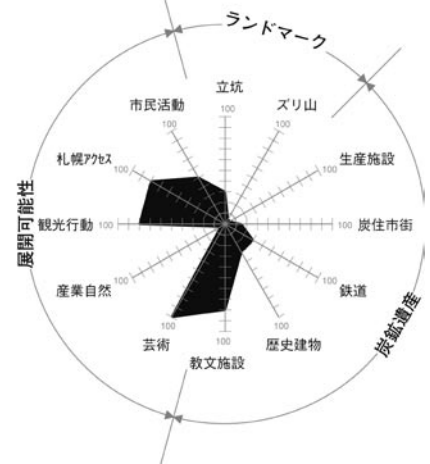
A1 岩見沢



A2 赤平



A3 美唄（盤の沢）



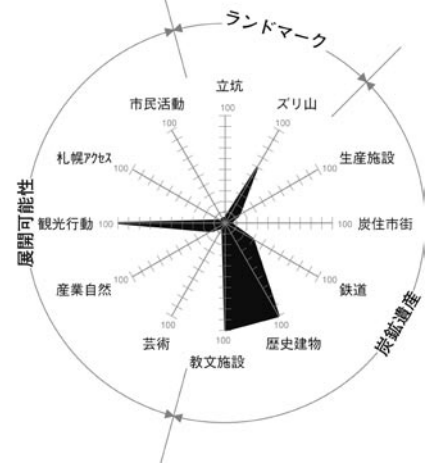
A4 幌内



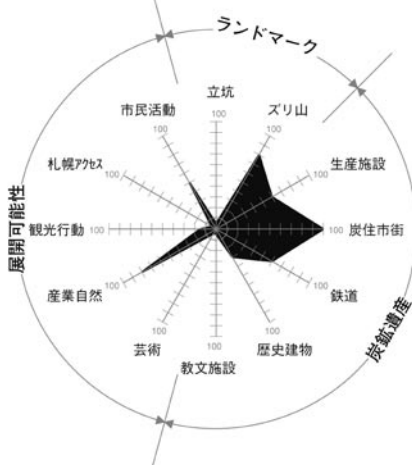
A5 唐松・弥生・幾春別



A6 夕張上流部



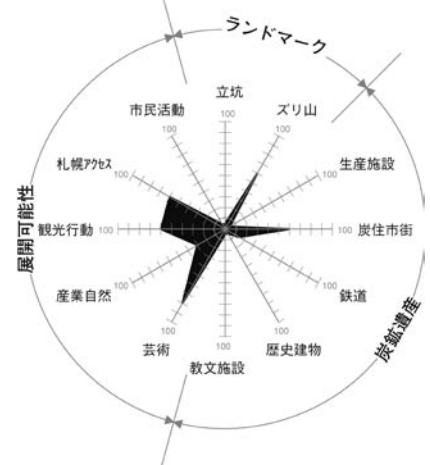
A7 清水沢・南部



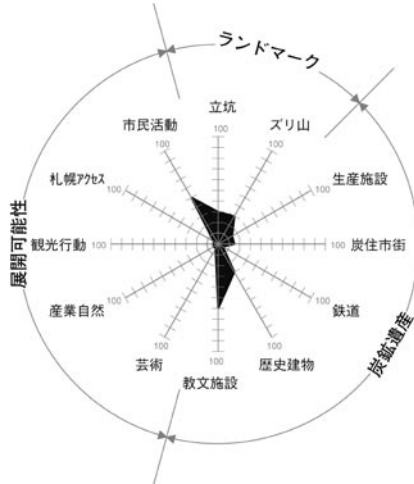
B1 南美唄



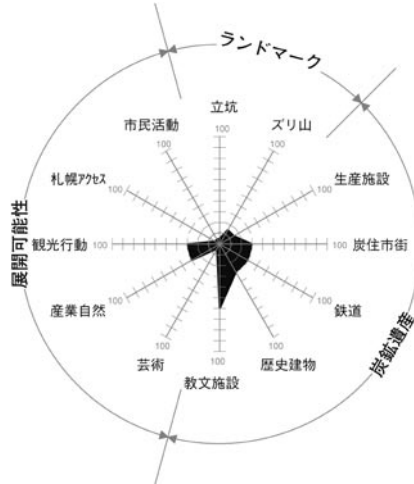
B2 美流渡・万字



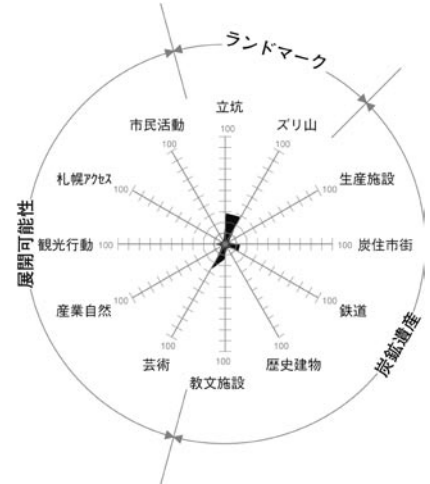
C1 歌志内上流部



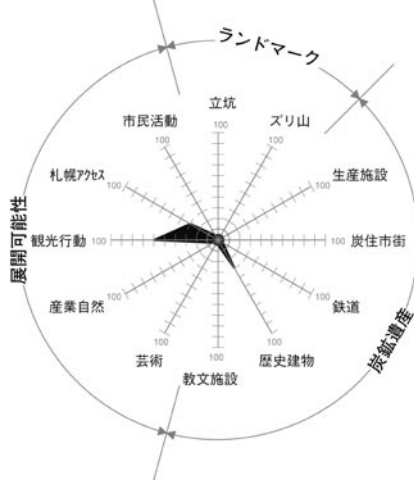
C2 芦別 (国道 452 号北)



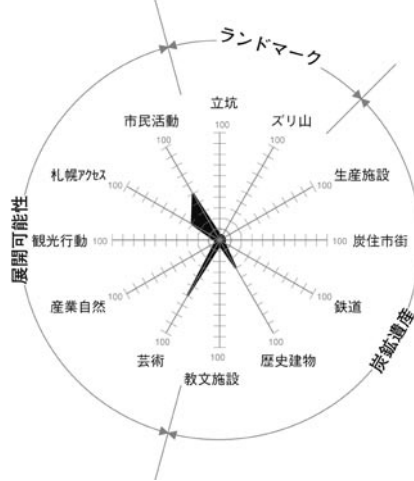
C3 上砂川



D1 栗山



D2 滝川



元気そらち！産炭地域活性化戦略

2009（平成 21）年 3 月

北海道空知支庁

地域振興部 地域政策課

産業振興部 商工労働観光課

産業振興部 建設指導課

〒 068-8558 岩見沢市 8 条西 5 丁目

☎ 0126-20-0034